質疑応答集2

（『麻原彰晃の世界』より）

『麻原彰晃の世界』PART4より

◉世界の聖者も霊障は説かない

――その霊能者自身が持ってる世界が地獄・餓鬼・動物であるから、動物霊とかが見えるとおっしゃいましたよね。じゃあ、その対象になる人は、そういう世界を持っていないわけですか。あくまでも、それは霊能者の世界なんですか。

（尊師）対象になる人は持っていないかというと、普通は他人のアストラル世界というものは、視覚で見えるもんじゃないんです。例えば、あなたがどういう世界に入ってらっしゃるかっていうのを見る場合、もちろんエネルギーでチャクラの状態で見ることはできます。

しかしそうではなくて、一般的には三昧に入って、あなたのそのアストラルの世界に入らなきゃなんない。普通は。わかりますか。わたしがあなたのアストラル世界に入った段階で、あなたは今どういう世界に入ってますよと言うことはできますよ、それは。

しかしそうじゃなくて、パッと見て、お前は地獄だとか餓鬼だとか、これは世界を通して、日本だけにしか存在しません、そういう人たちは。それだけ日本の霊能者は、レベルが高いのかもしれないね（笑い）。いやいや、そうだよ。これはインド辺り行ってごらん。いないから。必ず瞑想に入ります。

前生もそうですよ。「あなたの前生は」ってよくやってるけども、よっぽど力がなければわかりません。あるいは前もって、その人たちの生年月日とか写真とかを見ながら、ディアーナといって瞑想状態に入る。あるいは三昧に入って、前生を見ることは当然できます。しかしそうじゃない限り、何にもない状態で前生を適中させることっていうのは、皆無に等しいです。わたしはいろんな力のある方と会ってきたけども、どの方も同じように言ってらっしゃいますね。それは三昧に入らなきゃ駄目だよと。ところがこれもまた、先程言ったとおり、日本の霊能者方はね、力がおありになるから、即お答えになると。

わたしはね、よくこういうテストをするんだよ。例えばこの甘露水もそうだけども、この甘露水というのは今東大の物理研究をやってる子がね、結局データ分析したわけだけど、これは光を放ってるんだよね。普通の水じゃないんです、これは。で、それがデータとして出てます。そういう感じで必ずわたしはテストするわけです。で、例えばここに霊能者がいて、その霊能者がどれぐらい力があるか、試してごらんなさい。百発百中で外れるから。あなた方はそれを信じてるわけだよ。そりゃ中には、たまにはまぐれ当たりで当たるかもしれないよ。だからあとはあなた方のカルマだね。カルマというのは、過去においてたくさんだましたんだから、今だまされるカルマがあるんだとお考えになって、例えば一年、二年、わたしはだまされ続けようと考えたら、それも一つの行だと思うよ。

よろしいですか。答えとしては。ですから三昧に入らなければ、あるいは、瞑想に入らなければ、相手の本当の状態はわからないということです。

――そうすると、三昧に入ったときには相手の霊障がついてるという事実はあるわけですね。

（尊師）霊障がついてるというよりも、その変化身というか、その人のもともとのコーザル・レベルがありますね、心の状態が。その心がどの世界に通じてるかっていうことがわかるわけですね。だから霊障がこうやって抱きつかれてるとか、あるいは、おんぶされてるとか、それはないです、はっきり言うと。

ただ、邪気はありますよ。邪気というのは心の作り出したよこしまなエネルギーですから、それは当然存在します。例えばそれに触れると、そのエネルギーが体に入ってきて、体を害することはあります、それは。しかし、それはあくまでも邪気であって、そのアストラルの形をとってません。よろしいでしょうか。

――はい、わかりました。

◉潜在意識に傷があるから霊障になる

――霊障に関してなんですけれども、霊障はやはり人間の潜在意識とか深層意識に影響は与えるわけでしょうか。

（尊師）逆です。潜在意識とか深層意識に傷があるから、毒があるから、霊障になるんです。

――要するに霊体があるから、潜在意識や深層意識に影響を受けるということではないわけですね。

（尊師）ではないです。それはもう大嘘ですね、それは。

――そうですか。逆なわけですね。

（尊師）ええ。要するにどういう理論かといいますと、この肉体と、この粗雑な世界というものは、ここにある粗雑な肉体と、それから微細な肉体と、それからもう一つ原因

体といって情報だけの体と、三つを持っております。で、その微細な肉体というのは、イメージででき上がっています。

　ですから、例えばあなたをだれかが恨んでいるとしたら、それは微細な肉体に影響を与えます。そうすると、微細な肉体というのは潜在意識と深い関係がありますので、当然そこに傷ができるわけですね、例えば。おわかりですか。

――チァクラとは関係があるわけですか。

（尊師）霊障体質の人は、だいたいせいぜいがスヴァディスターナ・チァクラと。ムーラダーラ・チァクラ、スヴァディスターナ・チァクラしか使っていませんね。だから、もともと人類のためにといっている人は、霊障の話はしません。だいたい自分のことだけを考えている人が、「あー、霊だ。霊につかれた」と言っております。ですから、霊障体質というのは治すことは簡単です。それはなぜかというと、自己のことを、自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを悲しみとする実践を行なったならば、簡単に霊体質から逃れられるでしょうね、それは。だから、まあ言い方を換えるならば、功徳の足りない人は霊体質になったり、魔境に入ったりします。功徳のある人は決して魔境には入らないし、霊体質にもなりません。

●「水子は先祖の霊」の嘘

――昨日、密教に関係した宗教家が、水子というのはご先祖の霊だと言ったんですね。しかし、結局人間は死んで輪廻転生すると。結局妊娠した時点では、もう真我は、そこに入っているわけでしょう。

（尊師）入っています。

――ということは、水子の霊が先祖の霊というのは、正しくないと思うんですが、もし霊というものが存在するなら、子どもを堕ろすと何かあるんじゃないかと。

（尊師）殺生になりますよね。殺した段階で。それは殺生のカルマとしては残るでしょう。

――で、水子の霊は存在はする、ということが言えるんでしょうかね。

（尊師）一時的にはですね。つまりバルドーに入るわけだから。しかしそれは、水子の霊なんていうのは、だいたい四十九日も、だいたい三十日くらいで転生しますから。

●不幸の原因は水子霊のたたりではない

――エドガー・ケイシーの本に、人間は生まれたときに、そこに魂が宿ると書いてあったんです。生まれて息をしたときに、初めて体に魂が宿るっていうんですけども、そのへんのところはどうなんでしょうか。

（尊師）それはエドガー・ケイシーが間違っています。一言で言うと、精子が卵子と結合しますね。そして卵割が始まった段階で魂は宿ります。

　じゃあ、それはなぜそう言い切れるかというと、もちろんわたしの弟子たちの中にもその経験をしてますし、それだけではなくて、例えば『エジプト死者の書』だとか、『チベット死者の書』でも同じ記述をしてるんですね、これは。エドガー・ケイシーのみが違う。ということは、エドガー・ケイシーが間違いであると考えた方が正しくないでしょうか。

――ということは、これも、要するに水子の霊っていうのがたたって……。

（尊師）いや、水子の霊がたたるんではなくて、先程言った殺生のカルマだ。最も身近なものを殺したという殺生のカルマが生じるとお考えになった方がいいと思います。

――そうすると、その殺生のカルマはどういうふうに返ってくるんでしょうか。

（尊師）それは、まず心が殺伐としてくる。そして、やっぱりそのまま放っておくと地獄に落ちるんじゃないでしょうかね。

――この現在の生活の中で……。

（尊師）もう現在の中では、まず愛情というものが欠落してくると思います。

――それは、男性と女性のどちらも？

（尊師）いや、それは、まずは堕ろせと言った方が先に殺伐としてきます。だから、例えばカップルがありますね。そのカップルの例えば女性が妊娠したと。それを男性が聞いて、「それは堕ろせ」と。例えば言ったら、その堕ろせと言った男性の心がまず殺伐としてきます。そして、それは行為をなしたならば、女性も当然、同じように心が殺伐としてきます。

　そして、まあ一般的にはその異性間ね、その男性と女性の関係が悪化します、一般的には。愛情が持てなくなってくると。それは、なぜかというと、子供というのは、最も愛情を持たなければならないパートなんです。愛情があるからセックスをします。ところが、それがそうでないとしたならば、当然心に変化が起きるわけですね。愛情に対する変化が。そうすると、例えば今身近にいる彼に対しても、あるいは彼女に対しても同じように殺伐とした気持ちになります。

　で、まずは愛情の欠落から始まるとお考えになっていいと思いますね。

●より良い転生をさせるのが大切

――現実に人間が死んで、やっぱり社会習慣に従って、やはり何か、その死んだ後始末をしなくちゃいけないわけで

すね。

そうしますと、オウムの信徒になった場合、どんな形でどんなふうに、供養か何か知りませんが、死んだ後の後始末をして、それから先、どのように考えていったらいいのか、ご指導いただきたいと思います。

(尊師)今考えていることはですね、ポアを実践させようと考えています。それは成就すると亡くなった後、肉体が滅びますね。その後、必ず幽体っていうのは抜け出します。それはマニプーラから抜け出します。その世界が、例えば、スヴァディスターナとか、あるいはムーラダーラの方に下降するか、あるいは上昇するかは、一つはその人のカルマなんです。

もう一つは、それを今度修法するのによく読経しますね、例えば。「魔訶般若波羅……」ってやりますね。あの読経している人はそれを見て、引き上げられるかどうかなんです。だから、実際は亡くなられたと。で、何日間、まあだいたい、そうだなあ、現代人の場合は三週間ぐらいは固定されてます、だいたい。だから、その間に、例えば成就した人がそこに行って、それを修法して、上に引き上げたら、その人は高い世界に入るでしょう。

で、当然そこでもう肉体から離れて高い世界に行った段階で、その骨というものは焼いて、後はまあ、オウムでも一応墓は用意するつもりでいますけどね。

――それはぜひしていただきたいです。

(尊師)ええ。やるつもりではいますよ、一応。

――で、その後はもう何もしない。

(尊師)もうその後はいらないですね。

――はい、わかりました。どうもありがとうございました。

(尊師)大切なのは、その抜け出した魂をどの世界へ放り上げたらいいかということでしょう、それは。だからその、いかにポアさせる実力を持つ成就者を作るかということが、わたしの課題だと考えていますから。

――そういたしますと現実問題で、亡くなったときにオウムに連絡をすればいいわけですか。

(尊師)そうです。もう少ししたら、確実にそのシステムができると思います。

――そうですか。ありがとうございました。

◉偉くなったあなたに嫉妬する守護神

――守護、指導霊というものについて、この機会にぜひお聞かせ願いたいと思うんですが。

(尊師)守護神っていうのはだいたい二人から三人の守護神がつきます。それはどういうことかというと、まずその人が欲界レベルの、だいたい第二天界に至るまでの守護神がつく、まずはね。功徳のある人ですよ、これはあくまでも。

そして、それを乗り越えるときに、その第二天界まで応援した人は、必ず今度は足を引っ張ります。よろしいですか。それはそうだよ、だって自分も第二天界までしか行けないんだもん。自分が守護してたのが、どんどんステージ上がっていったら、こりゃ駄目だと思って引きずり下ろしますよ、これは。いや、そういう世界なんだ。あなた方だってそうでしょう。それまで自分がどんどん引き上げていったのが成長したと、ところが自分より偉くなったら、これは困ったと、やっぱり思いませんか。いやその世界なんだね、これは。

それで次は、第三天界っていうのは、これはあなた方もよく知ってる閻魔天の世界ね、夜摩天といっているんだけども、この世界だから関係がない。

それで第四天界からは、今度は兜率天、ここからまた別の守護神がつきます。そして、だいたいアストラルのね、報身の世界、ここまでだいたいついていきます。

そして最後には、前生のグル、あるいは最高霊といったらいいのかな、それが本性身の世界でつきます。

だからだいたい三人つくとお考えください。で、もちろんこの第二番目の兜率天レベルの人は邪魔しないよ。もう精神的に安定してるから。よろしいですか。だから、どのへんのレベルをいってるかだね、問題は。だから現象的に満足したければ、やはりその足を引っ張る守護神にお願いするしかないと。そうでなくて、高い世界に入って、最終的にマハーヤーナに到達しようと考えるんだったら、その守護神は切り捨てなきゃならない。

まあとにかく、これはダライ・ラマ法王もおっしゃってたことだし、あるいはまあわたしが今までに会った聖者も言ってらっしゃることだけど、今の日本の宗教というものは、先程言ったとおり、まあ欲界のね、だいたい阿修羅の世界までの宗教だとお考えになってよろしい。

だから第一番目の守護神っていうことになるよね、今一般的に説いているのは。だって例えばだよ、守護神がついたから金持ちになれるとか、あるいは恋愛がうまくいくとか、これはばかばかしいと思わないか。

例えば、人の三倍働けば、金持ちにはなれるよ。どうですか、それは。それからちゃんと女性を口説くような練習を一生懸命やれば、それは女性にはもてるようになります、それは。わざわざ一生懸命、念力でこうしたって、それは念力で寄って来る人は、念の強い人で、最終的には不幸になるよ、それは。だからそこはなんか、本末転倒してるような気がするよね、わたしは。

●幸福を呼ぶペンダントはみんな邪気

――すいません。そうしたら、今俗にいう幸福を呼ぶペンダントですとか、あの手のものも……。

（尊師）みんな同じです。あれについては、わたしは四人くらいから相談を受けまして、握ってみたら邪気なんですね、あれね。

――ああ、それじゃあ、絵とかいうものもみんな……。

（尊師）あれはもう完全に妖怪のアストラル世界ですね。あの幸福を呼ぶ絵でしょ、あれ。

●黒魔術も白魔術も駄目

――今までずっと、その質問の内容聞いてみると、その黒魔術とか白魔術というのは、そのオウムの見地から見れば、間違った、その潜在面のアプローチだと思うんですけど、そういう間違ったアプローチの仕方は、全部駄目なんですか。

（尊師）全部駄目だ。

――じゃあ、僕も……。

（尊師）お前もか（笑）。

――魔術ではないんですけど、アルファコイルとか……。

（尊師）ああ、同じだそれは、駄目だ。

●ヒランヤ、アルファコイルも魔術だ

――もう一つ、つまらないことなんですけどヒランヤというのはどうでしょうか。

（尊師）じゃあ、言いましょう。アルファコイル、ヒランヤ、それから魔術、それから呪法、それからもう一つは火を拝むもの、火を拝むものといっても、それが自己のために拝むもの。他のために拝む場合は関係ありません。これは、みんな魔術です。いいかな、これで。

●魔術をやると夢見が悪くなる

――先程おっしゃられた西洋魔術の修行についてですけど、聞いていて怖くなったんですが、僕もちょっとやってたんです。ただ、本格的にどこかの団体に入ってというのは違って、ただ本で独習してただけなんです。神秘体験もしないし、超能力もつかないということで、結局やめちゃったんですけど。

（尊師）夢見が悪くはなりませんでしたか。

――いえ、別に。変化っていうのが全然なかったんです。

（尊師）夢は覚えていますか。何を見ているか真っ暗でしょう。ほとんど覚えてないでしょう、夢は。

――ああ、夢はあんまり覚えてないです。

（尊師）でしょう。もう完全にそれ自体が魔境ですよ。いや、本当に。だから普通はイメージを使ったものは、夢で現われてくるから。だから、その夢で判断できるわけだけども、その判断ができないくらいに、暗いわけです。それは明らかに影響出てますよ。それは間違いないでしょうね、それは。

――最近は、またちょっと、夢を覚えていられるように……。

（尊師）オウムの修行を始めたのはいつですか。

――まあ、だいたいそれくらいから。

（尊師）夢がはっきりしてきたでしょう。ですからオウムは光を超えていますので、当然夢見が鮮明になってくるでしょう、それは。ただ魔術は、もう既にアストラルのデータっていうのは、現象界に現われてきますから、それは注意しなきゃならないですね。まあ後で来なさい、一回説明しなきゃ。困るよね、これは。

●いらなくなった魔術グッズの処理

――わたしもいろんな教団や魔術的なことをやってきたんですが、その都度、例えば五芒星なり、なんなり、いろんなものがだんだんたまってくるんです。で、そういった物の処置は、どういったふうにしたらいいのでしょうか。

（尊師）一番いいのは、返すのが一番よろしいですね。自分はこの教義とは合わないというか、この教義は実践できないということで、お返しになるのが一番よろしいでしょう。

――はい、わかりました。

●オーラを生活に活かすには

――わたしはオーラというものを信じています。アメリカではそういったものを数式でちゃんと証明できるそうですね。

（尊師）甘露水の話は聞いているか。あなた方は現代の科学に侵されているから、説明するならば、これは、あなた方の大好きな東京大学の理科の実験室の中で、わたしの純粋な透明液っていうのがあるんだね。

　これは何かというと、要するに普通の純粋な水と。これを三本用意して、一本はわたしがエネルギーを込めたもの、そして一本は単にわたしのそばに置いていたものと、そして一本は暗室に、全然別個のところに置いていたものと。

　で、わたしの込めたものに関しては、確実に光のエネルギーというものが吸収されるわけです。どういうことかというと、光を発しています。これはちゃんとデータがあるわけだ。

　だから、あなたが先程おっしゃった、万能主義・万能科学の中でも、きちんとわたしの超能力というのかな、力というのは証明されています。もし必要だったらそのグラフを見せてもいいよ、それは。

――そういう超能力を少しでも普段の生活に生かしていく

方法はないのでしょうか。

（尊師）オーラというのは、何が原因でできているかわかりますか。

――精神力ですか。

（尊師）そうです。逆の言い方をするならば、精神力が強いときはエネルギーを発していると。精神力が弱いときにはエネルギーを吸収している状態になるんですね。まず、それは理論的にわかりますか。

そうすると、例えばオーラの使い方というのは、例えば自分が疲れているときにはエネルギッシュな人のそばに行けばいいと。で、逆に自分が、エネルギーがあり余って、ちょっとイライラしているとか、そういうときは、逆に病人のそばに行ってあげると。そうすると精神的に安定すると。そういう働きはありますね。実験してごらんなさい。

それによって、それを実践することによって、心がすべての原因であると、そして、その心が発しているオーラというものは、言い方を換えれば、プラーナの現われにすぎないんだということがわかってきます。よろしいでしょうか。

だから、あなたがもし、豊かな心で、例えば子供さんに接しられたら、例えば子供さんのちょっとした病気も治るでしょうし、そういう使い方はできるでしょうね。

つまりどういうことかといいますと、ここにあなたの心があって、その周りをエネルギーが取り巻いていると。それはまずいいですか。

そうすると、そのいい心を持っていますと、その周りのエネルギーというものは、いい方向に変わるわけです。それはいいですか。人を幸福にしてくれる方向に変わります。

そうすると、例えば子供さんが、ここにいらっしゃって、子供さんがなんらかのエゴの働きによって、病気になっていらっしゃった場合、そのエネルギーの流れというのは非常に悪いです、これは。それはいいですか。そうすると、あなたがいい心で、いいエネルギーで接したならば、この子供さんは良くなるでしょうと。すべては心の現われです。

ではここでね。正しい食事があるとしましょう。正しい食事を正しい心を持って実践なさる人は、ものすごいスピードで健康になっていくでしょう。ところが正しい食事を間違った心で実践なさる人は、なかなか良くならないでしょう。それは、正しい食事というものは、正しいエネルギーなんですね。ところがそれがいったん人体に入って、間違った心を持っていたら、間違ったエネルギーに変わってしまうんですよ。だから例えば、ある人は正しい食事をすれば治ると、ある人は正しい食事をしても治らないということになりますね。

それと同じように、あなたが正しい心を持っていらっしゃれば、そのあなたの周りのエネルギーは豊かになりますし、それから、幸福な波動を出しますし、その波動を受けられて、子供さんにしろ、ご主人にしろ、とにかくそれと感応して健康になって、幸せになれるんですね。それがオーラといわれているものです。そして、強い願望持てば、オーラは大きくなります。意気消沈すればオーラは小さくなります。よろしいでしょうか。

「麻原彰晃の世界」PART9 第一部（91年10月8日）より

●潜在意識のけがれに対して

（質問者A）修行を進めていくと潜在意識が出てきて、それにとらわれてしまって、何度も何度も、修行があるところまでいっては失敗しているっていう感じがあるんです。

それで、今日の尊師の説法で思ったのが、要するにとにかく尊師の歌にもあるように、自分の五蘊というものをとにかく高い世界の五蘊に合わせていくというのがポイントであるなというふうに思いました。それで、そういうふうにある程度まで深く入っていって自分の汚いものが出てきたときにそれにとらわれないように注意するということについてアドバイスをお願いいたします。

（尊師）まずM君の質問を要約すると、修行が進んでくると潜在意識へ到達する。まあ、これは実際正しいわけです。で、潜在意識へ到達してきたときに、それを自分だと考えてとらわれてしまうと。これをどうしたらいいかという質問だと思いますが、これは先程も述べたとおり、M君のエネルギーが、オウム真理教のタントラヤーナとヴァジラヤーナに関する修行、これを並行して行なっているがために潜在意識へ到達するスピードが速いと。で、その潜在意識にあるけがれとぶつかり、そしてそれを自分だと考えてしまう。

で、これについては、もっと土台であるヒナヤーナ、あるいはマハーヤーナ的な土台を固めていくことによってのみ乗り越えることができると思います。例えばそれはどういうことかというと、まず戒律の遵守、あるいは戒律を毎日唱える。あるいは、先程述べた骨の瞑想、あるいは筋肉の瞑想等の四念処の基本的な瞑想を徹底的に行なうと。

これを土台として行ないながら功徳をひたすら積むうちに勝手にアストラルの低位から上位へと意識が移行されますから、そして気づいたときには今度は上位の素晴らしい意識状態の経験ができるということになるということですね。ですから、基本的な四念処観の瞑想をもっとしっかりやるようにしてください。

（質問者A）はい。どうもありがとうございました。

●カルマの背負い方

（質問者B）カルマのことなんですけど、カルマは全部自分でしょわなければならないということを聞いたんですけど、また別にシャクティーパットなどでカルマをしょっていただくというようなことも聞いたんですけど、そこのところが曖昧なんですけど。

（尊師）カルマは原則としたら自分でしょわなければなりませんが、例えばグルとのパイプ、あるいは高い成就者とのパイプができている場合データの入れ替えは起きます。ですから、まあよく利得と供養と名声によって阿羅漢まで到達したものが落ちるという話がありますが、これは明らかにけがれたデータをまた内在させたがために光の世界から落ちるわけです。

　ですから、一般の凡夫はカルマを自分でしょわなければならないと。しかし、オウム真理教の信徒であって、しかもしっかりと教学、ザンゲ、あるいはイニシエーション等を受けている人は、当然カルマの入れ替えは起きるんだと考えていいです。ただし、それはあくまでも阿羅漢に到達した人のみがそれを行なうことができるようになっています。つまり、受想滅を経験した者のみがそれを行なうことができます。よろしいでしょうか。

（質問者B）はい。よくわかりました。ありがとうございました。

●高い世界の音の効果

（質問者C）四無量心の瞑想について、簡単なことなんですけども、四無量心の瞑想をするときにアストラル音楽とか先生の歌を使ってもよろしいでしょうか。効果を高めるために。

（尊師）初めのうちは使ってもいいですが、集中が進んでくると、逆にそういうものが邪魔になります。ですから、ある段階までは使っていいです。で、完全に集中した状態に入ると使わない方がいいと思います。つまりその状態とは何かというと、外側の音、いろんなものが一切気にならなくなった状態と。その状態に到達したら使わないでください。

（質問者C）じゃあ、よろしかったら、何か選曲というか、それに何か適した曲はありますでしょうか。

（尊師）それは、もちろんわたしの歌であれば何でもいいと思いますし、あるいは、そうですね、特に音楽であれば「アストラルへの旅」なんかは最高だと思いますね。

（質問者C）はい、わかりました。どうもありがとうございました。

●感覚が幻影であることを悟るプロセス

（質問者D）プラーナーヤーマによって感覚器官が幻影であることを悟るというふうに先程おっしゃられまして、そのことについて、その、幻影であることを悟るまでのプロセスを詳しくお聞かせいただきたいので、よろしくお願いいたします。

（尊師）呼吸の長さによって、徐々に感覚器官が感じなくなってくるんだね。エネルギーは充実しているんだけども、感覚が生じなくなってくるんです。で、それがある段階に入ると、完全に感覚は制止します。止まってしまいます。で、その止まってしまったときは一種のトランス状態なんだよね。全体が止まって見えると。で、これはよく涅槃と間違える人がいるわけだけど、これはまだプラティヤハラの段階です。

　で、それをもう少し進めていくと、今度は内側のアストラルへ没入するようになります。もうそのときには内側の感覚器官しか生じない、つまりこの肉体ではなくて、内側の身体がいろんな経験をします。で、それが過ぎてくると、今度は内側の感覚器官も制止して、一切の感覚が消えます。よろしいでしょうか。

（質問者D）はい。ありがとうございました。

●感覚器官のとらわれを消すプラーナーヤーマ

（質問者E）先程、感覚器官のとらわれを消すことに対して、プラーナーヤーマによって感覚器官が幻影であることに気づくというお話があったんですが、で、そのプラーナーヤーマなんですが、僕は尊師のおっしゃられた瞬間にアヌローマ・ヴィローマ・プラーナーヤーマとか、スクハプールヴァカ・プラーナーヤーマといったものを思い浮かべたんですが、これは実際、例えばヴァヤヴィヤ・クンバカというような激しいプラーナーヤーマでないと、こういった感覚器官から離れることは難しいのでしょうか。

　それとも、スクハプールヴァカのような比較的簡単なものでも、長時間続けることで感覚器官からのとらわれは消せるんでしょうか。そのへんをお伺いしたいと思います。

（尊師）すべてクンバカの長さによって決まりますから、例えばスクハプールヴァカでも、一分とか二分とか三分とか、平気で止められるようになったならば、そのときの感覚器官というのはもう既に人間の感覚器官ではありません。これは試してみたらいいと思う。だから、確かに一つずつのプラーナーヤーマにはそれぞれの目的があります。しかし、ただ単に制感に入ると、プラティヤハラに入るためには、どのプラーナーヤーマでもそれを修習すればだいたい達成できます。よろしいでしょうか。

（質問者E）はい、わかりました。ありがとうございました。

◎善業と悪業の量と質

(質問者F)今回インドにあたり、短い期間でこちらに出発することを決めたのですが、いろいろと問題が出て、朝出発するときまでいろいろと迷いました。でもここへ来まして、皆さんがインドにあたり、いろんな個人個人の修行があったことがわかりました。

でも、わたくしは今、輸入の仕事をしています。それにおいてこの一週間、人様に方便とはいえ、違う形で仕事を休んできていることに非常に申し訳ない心がありますが、そのへんの心をどのように処理をしていいのか、今ここへ来ていても判断しかねます。教えてください。

(尊師)今の質問は、オウム真理教と一緒にインドに来るんではなくて他のことで来るんだということを言ってらっしゃるわけですね。

(質問者F)ええ、おばの方に不幸があったということで、師たちにも協力していただきまして来ました。インドに来ているということは言っておりません。

(尊師)うん、それについては、まあ確かにそれは嘘という意味においてのカルマを積まれたと思いますが、つまりそれは、まあそうですね、瞬間的な言葉におけるカルマになったと思いますが、しかしあなたがインドに来てより多くの功徳、より多くの深い瞑想、あるいはより多くの善行、これを実践なさる、あるいはなさったということは、それはそれでまた利益になるわけですから、つまり、善業の量と悪業の総量を比較したら、悪業の量というのは本当にもう微々たるものです。

それに比べて、善業というのは千倍も一万倍も価値があることであると。あるいは、十万倍も価値があることかもしれない。そう考えた場合、まだ心が完成なさっていらっしゃらないわけですから、その弱い部分は弱い部分として認識しながらね、未来においてそれを捨断しようという気持ちを持ちながら、大いに善業と徳の修行をなさったらいかがでしょうか。

(質問者F)はい、かしこまりました。どうもありがとうございました。

(尊師)はい。ですから積極的に、今回のインドの修行の旅において利益を得られるように頑張ってください。

(質問者F)ありがとうございます。

『麻原彰晃の世界』PART9 第一部(91年10月11日)より

◎エネルギーのロスについて

(質問者A)今回のこのような本当に素晴らしい旅のチャンスを与えてくださり、尊師本当にありがとうございました。

で、今回の旅は、本当に今生だけじゃなく、未来際においてもずっと永遠に記憶に残る重要な何か旅であったような、そんな気がします。そして、今回本当に毎日、何度にもわたって、尊師のエネルギーの入ったお供物をくださり、我々はものすごくエネルギーがアップして、すごくいいヴァイブレーションになったような気がします。

それとともに、各聖地を回ってサキャ神賢のエネルギーにも触れて多くのヴァイブレーションを受けたんですが、日本に帰ってから、我々は在家ですから、世の中のまた多くの人に接していってエネルギーをロスするという可能性があります。それをできるだけないように、よりいっそう修行を進めるように、何かできることがありましたらアドバイスをいただきたい。

それともう一つ、カルマの解放がもし遅れて起こった場合、その対処の仕方もお教え願いたいんです。よろしくお願いいたします。

(尊師)はい。まず、エネルギーのロスについては、ロスをするものだとお考えください。で、逆にそれは言い方を換えれば、綺麗な水、浄水をもらってきて、それを多くの人に分け与えているんだという気持ちと同じ気持ちになってほしい。

つまり、神聖なものを独り占めするのではなくて、それを分け与えると。それを分け与えることにより、より崇高な祝福、より崇高なエネルギーがまた満ちてくるはずです。ですから、それについてはこだわらないで。

で、じゃあ、どのような形で分け与えるのが最も理想的なのかというと、やはり単にエネルギーだけを分け与えるのではなくて、しっかりした、例えば、苦しんでいる方がいらっしゃったら、その苦しんでいらっしゃる方に対して真理にかなった法を説いてあげるのか、あるいは迷妄に迷っていらっしゃる方がいらっしゃったら、その迷妄を取り払うために真理にかなった法を説いてあげるとか、そういう形でしっかりと法を説いてあげる。

あるいは、その他の布施・奉仕・持戒の実践を行なうことによって、よりエネルギーの受け皿として大きく、そして深く、そして広く、清らかな受け皿をつくると。これをなさってエネルギーをばらまかれると、よりいっそう多くの、そしてよりいっそう清らかなエネルギーが満ちてくると思います。ですから、そのように実践してください。

それから第二番目のカルマの解放についてですが、カルマの解放が起きましたら、とにかくできるだけ早く担当の師を通じて教団の方に連絡するようにしてください。というのは、カルマの解放というのは、例えば来世地獄のカルマがあった人の場合、その地獄のカルマが現象化する、そ

の現象化というのは大変ある意味では恐い部分が伴っていまして、それについて適切なやはり指導が必要ですので、決して自分でそれを対処しようとしないようにしてほしい。よろしいでしょうか。

（質問者A）はい。ありがとうございました。

（尊師）はい、しっかり頑張りましょう。

◉サキャ神賢当時の真理施・奉仕活動

（質問者B）サキャ神賢当時の、真理施の方法と、どのような奉仕活動を行なっていたのか教えてください。

（尊師）まずサキャ神賢の当時の真理施というのは、これはよく仏典に多聞とあるわけですが、多くの説法を聴いて、そしてその説法を自分の中で咀嚼（そしゃく）し、咀嚼してまた元の形に戻し、そのとおりに伝えるということを繰り返していました。これが真理施の方法です。

例えば例を挙げるならば、「無明ありて行あり、行ありて識あり、識ありて名色あり」、これでは何をいっているかわからない。しかしその例えば、「無明」というものが全く光のない状態で闇であるとか、例えば「行」というものが経験のデータの集積であるとか、そういうものをしっかり理解した上でそれをまた元に戻し、「無明ありて行あり、行ありて識あり」というふうに説明するわけです。で、その意味合いとはこうであるという説明をするわけですね。これが真理施の方法です。

で、できるだけ多くの人に、例えば特に行なわれていたのが外道と凡夫に対しての真理施です。これは、真理を実践していらっしゃる方々というのは、どの宗派に例えばまみえたとしても染まることはありません。なぜならば、真理以上のものはこの世に存在しないし、あるいは真理より絶対のものはこの世に存在しません。

ですから、わざと外道や凡夫のところに行き、外道や凡夫の法の話を聴いてその問題点を指摘してあげ、そして正しい法はこうなんだよと説いてあげる。そのような形で救済活動は進められました。これが真理施の方法です。

それから第二番目の在家の奉仕の活動についてですが、これは前期と後期では違いまして、前期は、托鉢に必ず僧が来るわけですが、その前に必ず食事の用意をして、托鉢僧が来るとその人に対して必ず食の供養をする。

あるいは衣服、あるいは座具、あるいは雨安居（うあんご）、つまり雨のときなど外を歩くと、例えば、水に濡れる、体が濡れるということがありますし、あるいは多くの虫たちを殺生するということもありますし、いろんな悪条件によって雨安居のときには家の中で瞑想するわけですが、その瞑想の空間を貸し与えるとか、あるいは医薬品を提供するとか、そういうことが前期に行なわれています。

後期においては、まずできるだけ多くの人を道場へ連れてくる。これが第一です。それから第二は、食事についても在家の方々が道場へ持っていき、そしてそこで、修行者に対して食の供養をするという形を採っています。あと、衣服、あるいは座具、あるいは雨安居のときの瞑想空間、生活空間、あるいは医薬品とかは変わりません。これが在家の奉仕行です。よろしいでしょうか。

（質問者B）はい。日本に帰りましたら、信徒一同真理施を頑張りますので、どうか加護ください。

（尊師）はい。頑張りましょう。

◉グルと一緒に転生するために

（質問者C）まず初めに、このインドに尊師と共に来れたことを大変うれしく思います。ありがとうございました。

今まで、単に感じていた無常という言葉が、この地に来て強く心に響きました。物乞いに来た貧しい人たち、しかし無智だった自分の前生において、永遠の愛を誓った恋人もいたことでしょう。すべては無常ですね。

来世、別に地獄でも悪趣でも構わないのですが、尊師がこのカルパの終わり、マイトレーヤとして降誕なさるとき、今生は失敗してしまったのですが、そのときこそ優秀な弟子として転生したいのですが、連続して転生していく過程において、いろんな転生、例えばグルがいない転生とか、あと宗教とかけ離れた転生、もちろん三悪趣もあるわけですが。

これは自分の見解なのですが、いろんな弟子の人を見て単に徳があるとか、カルマがよかっただけじゃないような気がするのですが、どうすれば優秀な弟子として転生できるか、また初めから大いなる長い菩薩としての封印を尊師からされるのか、どうすればよいかアドバイスをお願いします。

（尊師）まず、「来世は」という考え方は修行者向きではありません。この瞬間から素晴らしい弟子に変わると。そして、S君は大変優秀な修行者としての素質、あるいはタントリストとしての素質を持っているわけですから、それをもっと自覚なさったらどうかと思います。

それから、S君のいうとおり、確かに徳があるからグルと一緒に転生するわけではありません。これは仏典にも書かれているとおり、一つの法一つの法を実践するとしたら何をなすんだと。これは覚者に対する記憶修習であると。で、この覚者に対するというのは大変わかりづらい言葉で、今のオウム真理教の言葉を使うならばグルに対する記憶修習であると。つまりグルグルグルと、グルに対する記憶修習を行なっている人は、必ずグルと一緒に転生することになります。

ただし問題は、カルマがよければ人間として転生しますが、例えば悪ければ、まあわたしの前生の息子であった、これは猫のマースというのがいるわけですけども、その猫のような転生をすることもあります。この猫は、結局死ぬまでわたしが面倒を見ることになり、そして第一天界へと転生していきましたが……。

次に、より効果的な方法は、皆さんの功徳とか善行とかをそちらの方向へ思念して向ける、要するに一切の功徳が、一切の善行が、あるいは一切の寂止の行が、未来際においてわたしの転生に大きな影響を与え、そしてグルと共に転生できますように等の廻向をなすならば、例えば皆さんが地獄へ落ちた場合、その縁のある魂が落ちた場合、例えばグルが天界へ転生できるカルマがあったとしても、それは自然と地獄へ行きます。

ですから、そのような形の発願、祈念というものをもっともっとS君が取り入れられたら、間違いなく転生を間違わずに修行者としての道を歩き続けることができると思います。よろしいでしょうか。

（質問者C）どうもありがとうございました。

◉サールナートで初転法輪する理由

（質問者D）サールナートは、多くの真理勝者の方が法を説かれ、尊師もここでこのカルパの終わり初転法輪をなさるとおっしゃっていましたが、その土地で初転法輪をなさる理由、つまり条件をお教えください。といいますのは、ご説法中で気候なども心の現われとのことでしたので、このことも含めて詳しくお願いいたします。

（尊師）まず、今ジャンブ州はどんどん暑くなっていると。これはジャンブ州だけではなくて、地球全体が暑くなってきていることは皆さんもご存じでしょう。で、この中間のカルパの終わり、大きな争いが起きます。これはおそらく第三次世界大戦と考えたらよろしい。そこで核兵器その他、多くのいろいろな兵器がぶち込まれる可能性が高いと。もちろん、今の世界情勢から見るとそれはあり得ないという見方の方が強いです。しかし、わたしはそう考えていません。

まあそれはいいとして、この中間のカルパは、あくまでも瞬間的なものであり、その後生き残った魂が『創世期』にも書かれているとおり、あるいは『人類滅亡の真実』にも書かれているとおり、そこから少しずつ戒律の遵守、あるいは功徳を積むことを始め、そして徐々に徐々に寿命が延びていき、寿命が延びていく段階で気候はいったん温暖化します。

そして、このカルパの終わりに近づくころに、このジャンブ州を中心として文明は今と違った形で栄えます。その段階で、まあサールナートに真理勝者が登場すると。まあそれはマイトレーヤという名前で登場します。

で、じゃあなぜマイトレーヤはサールナートでなければならないんだと。これは、こうお考えになったらよろしい。ここに一枚の壁があるとして、その壁の薄いところと厚いところがあるとして、当然薄いところの方が破れやすいと。つまり、エゴが少ない空間であるというふうに考えてたらよろしい。

で、そのエゴが少ないサールナートの空間において、より高い次元の、というよりも、大到達真智完全煩悩破壊界から祝福があり、そこで初転法輪を説くこととなるわけです。

で、心の現われと気候が関係あるというのはどういうことかというと、例えばインドと、それからスリランカは同じ仏教国です。もちろん、今ヒンドゥー教というのがありますが、これはヒンドゥー教というのはあくまでも仏教における形状界の神々を崇拝する宗教がヒンドゥー教であって、根本をなしているものはカルマの理論であり、それはヒンドゥーイズムもあるいはブッディズムも同じなわけです。

で、このヒンドゥーイズムとブッディズムの違いは何かというと、インドは大変ラジャス、怒り、熱エネルギーが強いと。よって大変暑いと。スリランカは、赤道に近いわけですが、より気温は低く、そして多湿であると。これはスリランカ仏教の方が柔らかい宗教、柔らかい仏教であることを気候が物語るんだと思います。よろしいでしょうか。

（質問者D）ありがとうございました。

◉神聖天に行く資格

（質問者E）神聖天に行く資格についてお尋ねいたします。『えんじょい・はぴねす』では、性欲を滅していて若干の食欲は残っていてもいいということですが、他の説法では貪りを完全になくした場合と言われていましたが、神聖天に行くにはどうすればいいんでしょうか。

（尊師）食欲が若干残っているというのは、貪りの状態ではないんだよ。欲と貪りとは違うんだね。例えばここに食べ物があって、これが食べられるということは、これは欲望なんです。貪りというのは、例えばおなかがいっぱいの状態でそれでもまだ食べたいといって放り込むと。これが貪りなんですね。わかりますか。

ですから、貪りは否定しなきゃならない。しかし、若干の食欲は残っていても、性欲が完全に滅されていて、そして慈愛の心が、すべての衆生のために生きようとする心が存在してれば、その魂は必ず神聖天へ転生します。

（質問者E）ありがとうございました。

●いい思索をするために

（質問者F）四つの預流支の三番目の思索についてお伺いしたいのですが、どのようにすればいい思索ができるのでしょうか。お願いします。

（尊師）四つの預流支の中の、まず第一番目の三法に対する帰依、そして第二番目の教えを学ぶ、そして第三番目のその教えに対する思索、この教えに対する思索のポイントは、まず第二番目を確定させることから始めなければならない。

つまりどういうことかというと、教えに対する思索が正確に行なわれるかどうかということは、その前の正見解がしっかりできているかどうかということになる。で、正見解がしっかりできていれば、おのずと第三番目の教えに対する思索というものは成功します。

で、それはどういうことかというと、まず自分自身の身の働き、心の働き、言葉遣い、これを日々チェックすると。そして、それをメモしといてもいいし、あるいは記憶しといてもよろしいけども、それをもとに一日一回ないし二回、その教えに基づいて反省をしてみると。

例えば、今日は言葉遣いにおいて妄語がどうであっただろうかと、綺語はどうであっただろうかと、あるいは、行為において今日は殺生はしなかっただろうかと、あるいは偸盗の心は浮いてこなかっただろうかと、このような形で思索を繰り返し繰り返し行なっていけば、間違いなく、その次の正しい身・口・意の行為がなされるようになります。

で、ポイントはね、教学がしっかりできていないと、それを行なうことによって消極的人生になります。しかし教学を行なうことによって、例えばその一つ一つの捨断が自分にとってプラスのエネルギーに働き、そして自分自身を救済することが進歩しているなということが認識できるようになる。わかりますか。だから、ポイントは第二番目の正見解を培う。これに集中しなさい。いいね。

（質問者F）はい。ありがとうございました。

●救済者の転生

（質問者G）サールナートでの説法に関してですけども、人間の寿命が八万歳になるときに、ここに集まっている魂がですね、インドにすべて降誕して救済活動を一緒に展開していきたいと。そういう場合ですね、わたしたちは今、何をしたらいいかということを具体的にお聞きしたいということと、もう一点はですね、尊師はそれ以前にこの地球に降誕される機会はないかということをお聞きしたいんですが。

（尊師）わたしは、地球にはしょっちゅう降誕しています。それは、言えない生もあった場合言っていませんけども、いくつかの大きな生が存在していることは事実です。で、なぜ言えないのかというと、わたしは宗教戦争が嫌いなんだよね。で、それを言い出すと宗教戦争になってしまうんで言えないと。だから今後も、当然それは人間の世界、あるいは天の世界を行き来することになると思います。

で、一つ言っておきたいことは、救済者というのは、例えば兜率天にずっと存在しているとか、つまりオウムの言葉でいうならば除冷淡天に存在してるとかいうことはないんだね。なぜかというと、弟子たちがあちこちに散らばっているから、できるだけコンパクトに移動しなければならない。だからまあ、わたしがこの地球に転生する回数はかなり多いと考えていいです。まずよろしいかな、それは。

それから第二段階として、あなたの言っている、その、それまで何をやったらいいのかというと、もうこれは、まず三法に対する帰依、そして真理の実践と。これをひたすら繰り返したならば、必ずその生においてわたしと一緒にサールナートで、また救済活動をやらなければならなくなると思います。よろしいでしょうか。

（質問者G）はい。どうもありがとうございました。

●死にゆく魂に対して

（質問者H）今回はインド巡礼の旅、本当にありがとうございました。今回旅をさせていただいたのですけども、そのときに駅の近くで子供がずいぶん大きな声で泣いているんで、何かなと思って見ましたら、母親が行き倒れて死んでいるようなんですね。

で、非常に戸惑いまして、何かしてあげたいと思うんですけど何もできなかったんで、そういう人だけではなくてすべての魂の死というものに、我々オウム真理教の在家信徒が出くわした場合にどういうふうにしたらいいのか教えていただきたいのですが。

（尊師）まずそれは、そこで四無量心の瞑想をしてあげるのが一番よろしい。いいかな。これは瞑想においてです。

で、皆さんにあまり話をしていないけども、オウム真理教はそういう人たちのための、例えば経済的バックアップその他を相当に行なっています。で、これは結局、国家を通してなさなければできないわけだけれど、それはそれで教団の使命だと考えてやっています。で、個人的には今言ったとおり、四無量心の瞑想、その他を行なうことによって高い世界へ転生してもらうというようにしたいと思うね。よろしいでしょうか。

（質問者H）はい。ありがとうございました。

●最高の供養

（質問者I）供養について質問します。尊師が供養されて

いる姿を目の前にして、自分も歌や踊りと香の供養ができて、サキャ神賢、シヴァ大神、神々への感謝の気持ちや帰依の心が通じるように感じました。このようなわたしたちの供養を、サキャ神賢、シヴァ大神、真理勝者、神々はどのように受け取るのでしょうか。

また今後、家においても、わたしたちが尊師や神々に供養することができるのでしょうか。そして、それはどのような方法によるのでしょうか。また、尊師に受け取ってもらえるのでしょうか。

（尊師）サキャ神賢にしろ、シヴァ大神にしろ、大変喜ばれておりました。というのは、まあここに集まっていらっしゃる方のかなりの人たちは本当に一生懸命今まで真理の実践をなさってきていらっしゃる方々であると。で、その心が現象化した状態であると。その踊りとか、あるいはお香の供養というのはね。

で、グルに対する供養、神々に対する供養、これはグルが最も望んでいるものを供養することが理想です。ということは、わたしの望んでいるもの、あるいはシヴァ大神、あるいは真理勝者方が望んでいらっしゃるものは真理の伝播、真理の布教です。ですから、最も最高の供養は真理の布教だと考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者Ｉ）はい、わかりました。それは、具体的に信徒が増えるっていうことでなくても心を込めているだけで通じるものなんですか。

（尊師）ですから、具体的に信徒は増えなくても、例えばここに外道がいてその外道に対して法を説いたと。これは事実です。わかりますか。

（質問者Ｉ）はい。

（尊師）つまり、それも功徳になります。供養になります。

（質問者Ｉ）通じるんですか。

（尊師）それは通じます。

（質問者Ｉ）はい、わかりました。ありがとうございました。

『麻原彰晃の世界』PART10より

◉五蘊から「離れる」ことと五蘊を「超す」ことの違い

（質問者Ａ）五蘊から離れるということと、五蘊を超すということについてお伺いしたいんですけど。

（尊師）それは、ドブ川のたとえを考えたらいい。どういうことかというと、五蘊から離れるというのは、ドブ川に入らないということです。これは、ドブ川と自分とが別個であると。けがれませんね、決して。ところが、五蘊を超すというのは、ドブ川の中に入ってもけがれないということです。

例えば、わたしたちは、目、耳、鼻、口、そして触覚というものを持っていますよね。で、この一切の感覚を使わないようにしようと、そして使わないで、内側の内的心理器官を使おうとするのが、五蘊から離れるということです。超すというのは、普段使っていても、それが今度は内側の心、あるいは魂というものに影響しないような状態をつくっていくこと。これは、五蘊を超すということです。

（質問者Ａ）で、オウムの修行システムっていうか、初めに四念処の瞑想とかいうのがまず出てくるということで、まずは離れることから始めるんですか。

（尊師）そうではないです。ヒナヤーナ・プロセス、つまり小乗の仏教とか、小乗のヨーガといわれているプロセスを、まずわたしは説いたわけです。そして、去年は大乗のプロセスを説いたわけです。マハーヤーナ・プロセスといってますね、これは。そして、今年はタントラヤーナ・プロセスを説きます。つまり、この三つの間には共通の部分もあるし、矛盾している部分もあります。ただ、ステージは下から上へと上がっていきます。

（質問者Ａ）あと、五蘊から離れるという段階は、アストラル・ヴィジョンを遠ざけてしまうというか、消すっていうことですよね。

（尊師）ええ、消すまでいかなくてもいいですけどね、遠ざけると。

（質問者Ａ）そういうヴィジョンに対する強さというのは、やっぱり離れる、じゃなくて超すという形でつくっておかないといけないんですか。

（尊師）いや、それは、強さはそれは出ませんね。超すというプロセスでいったならば強くなります。

（一九八八年一月十日　名古屋支部）

◉五蘊とプラーナ、心の関係

（質問者Ｂ）五蘊とプラーナ、それから心とプラーナの関係を詳しくお願いします。

（尊師）難しい質問だね。この前も話したと思うけども、まず五蘊というのは、色、受、想、行、識、これはＯＫだな。そうしたら、例えばここに肉体があったとして、これが死んだとしても、一応色であることは間違いなかろう。どうだ。

（質問者Ｂ）あ、ちょっとわからないです。

（尊師）例えば、ここで人が死んでいるとするよ。しかし、そこには魂は内在していないよね。よって、この肉体は単なる物質でしょ。でも、肉体であることは間違いないでしょ。それはわかるね。

ところが、その真我とその肉体をつないでいるもの、それがプラーナなんだよ。つまり、プラーナというのは何か

というと、要するに、そうだな、電線みたいなもんだな。あるいは、電波みたいなもんだ。わかるか。そして、この肉体をロボットのように操っていると、そう考えよう。だから、もし発信人が電波を止めたならば、その肉体は動かないよね。わかるかな。それと同じだ。それが、プラーナと色との関係だ。

同じように、感覚もそうだ。死んだ場合、耳は残っているけども、もうプラーナが介在していないから、その聴覚は働かないよね。

表層、ね、それから意志、意識と呼ばれているものも、すべて同じです。で、わたしたちがね、一般的に心といっているものは何かというと、いいかな、表層意識を心といっています。あるいは、受、感覚から生じる意識、これも心といっている。わかるね。

ただ、その心というのはもっと深い部分があって、それには先程の潜在的な意識も含まれるんだよ。わかるかな。そして、その心をコントロールしているもの、といったらいいのかな、心の内奥にあるもの、それが真我です。そして、その真我と心をつないでいるものが、先程言ったとおり、プラーナだということができると。いいかな。

（質問者B） はい。心がプラーナを制御することはできますか。

（尊師） 心がプラーナを制御することはできないけども、真我がプラーナを制御することはできます。だから、解脱をするとプラーナを制御できるようになるんだね。しかし、それはあくまでも瞑想というね、技術を使わなければできないということだ。いいか。

つまりどういうことかというと、心が完全に静止した状態のときに真我が現われ出ると考えましょう、ね。で、その現われ出た真我、つまり、それがまあ我だけどね、実際のところ。その我に到達した者は、プラーナをコントロールできると。いいかな。かなり難しいね。それは、体験的に理解するようにしなさい。

（質問者B） はい。ありがとうございました。

（一九八九年五月五日　富士山総本部）

◉「識」と「行」の意味

（質問者C） 五蘊の色、受、想、行、識の最後の識の意味は、潜在意識と超潜在意識の両方のことを意味するんですか、それとも潜在意識だけのことですか。

（尊師） まず、Tに聞きたいのは、潜在意識、超潜在意識という意味はわかるか、体験的に。

（質問者C） 潜在意識は、アストラル……。

（尊師） 体験的にわかるか。

（質問者C） 体験ですか。超潜在意識の体験はわかりません。

（尊師） わからないよな。修行をしていけば、その識という意味はわかります。

（質問者C） ということは、三昧に入るということでしょうか。

（尊師） そうだ。

（質問者C） はい、わかりました。あと、もう一つお願いします。行の意志という意味は、欲望とか欲求の意味と同じということでいいんでしょうか。

（尊師） そうです、それでいいです。

◉プラーナの種類

（質問者D） 真我と五蘊をつないでいるプラーナと、サットヴァ・プラーナ、ラジャス・プラーナ、タマス・プラーナという三つのグナというのは、全く別と考えていいんですか。

（尊師） 同じと考えていいです、それは。ただ、例えば大学という名前があると。いいかな。そして、例えば、一つの大学があると。そして、その大学の中に一人一人生徒がいると。まあ、その前に学部があるでもいいけども。

何をいいたいかというと、まず根本プラーナがあって、それは三つに分かれると、ね。だから、その三つを一つということもできると。そして、その三つはまた細分化されると。だから、例えば一概にプラーナについて説明することはできないと。例えばね、何が何種類あって、何が何種類あって、何が何種類というのは説明しても構わないと思うけど、ただ、今ここで弟子たちにそれをやったとしても何の利益も与えないから、今わたしはそれを話さないと。いいかな。

（一九八九年六月一日　富士山総本部［質問者C&D］）

『麻原彰晃の世界』PART1　気象大学（91年11月4日）より

◉創造神を経験した後、真理勝者に

（質問者A） キリスト教とかイスラム教においてはですね、一神教ですのでね、神というものが、超越的な神というものが存在するわけですよね。仏教の場合っていうのは、その仏陀っていうのはね、神というふうなことじゃないわけですよね。一応すべてを悟った人ということで、神という形で表われてないわけですけど、オウム真理教においてはその神ということに対して…。

（尊師） いや、それは大変な誤解でして、まず、キリスト教、イスラム教における神というものは、千宇宙、千の宇宙のただ一つの創造主ということになってきます。で、こ

れは、確がに正しいと。なぜならば、彼らの定義は、まず性的交わりをしない神である。そして、創造主であるといっています。これは、インド・ヨーロッパ語族に伝わる宗教的な見地からいくと、ブラフマン、つまり創造主は、そういう要素を持っているわけです。まずよろしいでしょうか、これは。

そして、仏陀とはどういうことかいうと、最終的な真理勝者に至るときは、三千大千世界にただ一つの魂といわれてます。三千大千世界とは、千の三乗です。つまり、十億宇宙の中でただ一つの魂、ただ一つの神だといわれてます。で、現に経典の中にそういう創造主といわれている――神聖天とまあオウムでは訳していますが――大神聖天のね、魂を教化する場面が多く出てきます。よろしいでしょうか。

（質問者A）そうしますと、その仏陀っていうのは、何回か生まれ変わって、仏陀、まあ釈迦牟尼ですか、それになったわけですよね。

（尊師）正確な言い方をしますと、五神通を有してから、四アサンキャ十万カルパ。十万カルパというのは、この宇宙が十万回破壊されて後に仏陀となっています。

（質問者A）ですので、そのいわゆる創造神というのとは、またニュアンスが違うんじゃないかという…。

（尊師）創造神は、その間に何生も何生も経験しています。わかりますか。創造神を経験した後に真理勝者となっていくんです。

（島田裕巳氏：以下島田）そうすると、仏陀の位置というのは、世界の中でどういうものとして考えたらいいのでしょうか。

（尊師）無上、最上、これ以上のものはないということですね。はい。で、要するに、十億宇宙で、ただ一つの魂と。

（島田）それは、あるようでいてないようなものなんですか。

（尊師）要するに、服をすべて脱ぎ払った状態であり、しかも、いつでもどんな服でも着ることができるという状態だということです。

（島田）よく仏教では、「空」とか「無」とか、そういう考え方もありますけれども、そういうのと通底してくるようなものでは…。

（尊師）無を超越しまして、空を超越しまして、それで最終的にすべての生存の要素を完全に止めてしまっている状態。ですから、逆にいえば、その心の働きが、生存したいと考えれば、どの世界へも自在に生存できるという魂だということです。

（島田）創造神というものは、そういうようなものの中で起こってくるというか…。

（尊師）ええ、実際は、例えば、あしたカレーが食べたいというように考えた場合、まあ例えば、それは自分で考えているのか、あるいは奥さんが考えているのかわからない場合がありますね。で、実際、次にカレーが出てきたと。

で、それによって自分の願望がかなったんだと考えるのか、あるいは、それは、例えば奥さんが考えていた要素であって、自分の要素ではないと考えるのかという、その発想的違いというか、要するに、キリスト教、あるいはイスラム教は、その出てきた、自分が思ったからできた。よって、自分は創造主だという考え方ですね。これを唯一神としてとらえてるわけです。

仏教はそうではなくて、もともと宇宙が破壊されまして、破壊されて一番初めに、その宇宙ができて、その宇宙にただ一つ現われた魂、その魂は、早く別の衆生がここに来いと思念し続けるわけですね。で、上から他の魂が落っこってきたと。よって、自分がそれを創造したんだと考えてるわけですけども、そうとらえるのかの違いですね。

つまり、視点が、どちらの方がより巨視的な見方をしているかということになると思います。

◉霊が亡くなった場合

（質問者B）今宗教とかね、それとはまた別に、いわゆる霊の世界が見えるっていうふうなね、そういうふうなこともあるというふうなことを、最近テレビなんかでもね、亡霊とか、そういうのが、あなたのそばに霊がいるとか、あるいはまた、もっと前は霊障とかね、そういうことで、戦国時代の武将があなたのご先祖の何代かの前にいて、それが非業の死を遂げてどうのこうのとかっていうふうなことがありますけど、そういうふうなことからしますと、いわゆる仏教の輪廻転生っていうかね、そういうのと別な世界になっちゃうんです。

（尊師）ならないよ。それは、仏教を知らないがゆえの質問です。説明しましょう。

欲六界というのは、まず一番下の地獄界と。これは、激痛地獄といわれている地獄があるんです。その次は動物の発生があります。その次は、一般的にはプレータ、これは餓鬼といわれていますが、実際は低級霊域といわれている世界です。つまり、低級霊域というのは、まあわたしもそういう経験があるわけだけど、実際にそういう低級霊が見えます。その上が人間界、そして意識堕落天という天界があります。これは、皆さんがよく言っている宇宙人です。その上が戯れ堕落天という世界だね。

だから、霊の世界云々というのは、包括概念として存在していることは事実です。ただその人たちが、その低級霊域をしっかり霊視してるかどうかは別問題であるというふうに理解してください。よろしいでしょうか。

(質問者B) いや、ってことは、霊が亡くなった場合でも、他に転生することはないってことですか。霊が亡くなったっていうか、死んだ場合…。

(尊師) 違う違う。霊が亡くなった場合、霊の世界へ転生するんだよ。で、霊の世界からまた、その場合、だいたい動物か、地獄か、人間界へ転生するんです。そういう世界であると考えたらいいよ。

(質問者B) あ、霊の世界があるという…。

(尊師) 霊の世界があると。で、その霊の世界も無常であるから、転生するんだと言ってるんだよ。

●在家信徒拡大もコツコツと

(質問者C) キリスト教を信じる人というのは、例えば教会の中に入って修行する人たちと、それともう一つ、日曜ごとに教会に通って教えを聴いて、それが生活の中に入ってしまっている人とだいたい分けられると思うんですけれども、オウム真理教の場合、そうやって中に入ってしまって修行している方々っていうのは、こういうふうにいらっしゃるっていうのはわかるんですけれども、なんか敷居が高いと感じられるゆえに、一般の人っていうか、日曜ごとに教会に行くって感じの信者とか、そういうふうな姿があんまし見えてこないので…。

(尊師) たくさんいます。結論からいうと、たくさんいます。出家は一部です。在家はそれよりもたくさんいます。

(質問者C) あ、いるんですか。

(尊師) います。

(質問者C) そういうのを広げる活動とか、そういうのはするんで…。

(尊師) コツコツとやっています(笑)。

(質問者C) あ、どうも。

(尊師) はい。

「麻原彰晃の世界」PART11
京都大学(91年11月24日)より

●オウム真理教は性善説か性悪説か

(質問者A) オウム真理教の教義は、いわゆる性善説、性悪説というと、性悪説的な立場を採っておられるんですか。

(尊師) いや、性善でも性悪でもない。つまり、その人が前生において善行をなすならば、それは当然性善になるだろうし、前世において悪業をなすならば、当然それは性悪になるだろうし、前世において善行も悪業もなさないならば、それは性善でも性悪でもないということだよね。つまり、固定的にものを見るのではなく、その人が前に何をなしたかで決まるということです。

●尊師が説く神の定義

(質問者A) それで、いわゆる、尊師が説かれる神というのを定義していただきたいんです。神とは何でしょうか。

(尊師) 神というのはいろんな神が存在する。ただ、まず、そうだね、神についての説明をするとするならば、かなり時間がかかるんだよ。というのは、例えば十七形状界にそれぞれ神は存在しているし、この愛欲の世界にも七つの神が存在しているし。まあ要するに、神というのは人間より優れた生命体と。当然、その中には創造主も含まれると考えてください。

(質問者A) 創造主とは、別なわけですか。別な神も存在するわけですか。

(尊師) うん。つまり創造主というのはね、形状界の神聖世界の大神聖天を創造主といっているんです。これは、インド・ヨーロッパ語族に伝わる宗教の創造主はすべてその神を指します。これは、キリスト教もまあ実際インド・ヨーロッパ語族的な影響があるわけだけど、例えばヒンドゥー教でいうところのブラフマン、ね、これは創造主っていう意味だけど、このブラフマンと、それから例えばキリスト教でいうヤハウェっていうのは全く同じ定義として経典には書かれています。ですから、それはわたしたちが到達できる範囲の一部であるということもまた間違いない、これは。

●世界救済のヴィジョン

(質問者A) 世界救済のヴィジョンをぜひ語っていただきたいと思います。

(尊師) これだもんね。

(質問者A) つまり、万民救済なのか、一部の選ばれた者だけが救われるのか。

(尊師) いや、それはね、二つの考え方があって、一つは万民救済といえば万民救済であると。あるいは、一部を救済するといえば一部を救済するものであると。どういうことかというと、多くの法をできるだけ振りまくと、一般に。これはまずOKだね。

で、その法を聴いて実践する人、それは当然救済されることになるわけだから、その聴く人が万民であれば万民救済であると。しかし、その法がそこに存在するのにそれを実践しないで、例えばここに薬と毒とあったとして、その毒を取って毒を飲む人は、それはしょうがないじゃないかということだよね。わたしたちは当然、薬を飲みなさいという宣伝はします。

だから、そのために、まあ例えば書籍の値段を、ね、破格の値段に引き下げたりとか、ビデオの値段を引き下げた

りとかいう工夫をしながら、できるだけ多くの人に、入信する入信しないはともかくとして、まずオウム真理教の教えを広める必要があるということで実践しているわけです。答えになってるかな。

そしてその延長上に、まあ最終的な救済が存在するわけだけども、まあ開かれた法であることは間違いないと。で、開かれた法イコール万民救済だというならば、それは万民救済であるということだよね。

●いろんな解脱の段階

（質問者Ｂ）尊師は、日本でただ一人の最終解脱者であるということらしいんですけれども、わたしには、解脱というのは輪廻の苦しみ、その輪廻の輪の鎖から解き離たれることであるというふうに、ま、解脱は一つであるというふうにこれまで思ってきたわけなんですけれども、最終解脱とおっしゃるからには、解脱といってもいろんな段階があって、その最終段階であるということだと思うんですけれども、ではそれはいったいどういう境地なんでしょうか。

（尊師）境地ということを説く前に、まず解脱には、そうだね、全部で九段階の解脱があるとか、八段階の解脱があるとかいうふうに、一般的にいわれています。

で、この九段階の解脱、八段階の解脱とは、これはどういうことなのかというと、一つ一つの世界から離脱することイコール解脱なんだね。例えば、わたしたちがこの粗雑な世界から離脱することイコール解脱であるし、あるいは先程述べたアストラル、つまり微細な世界から離脱することイコール解脱であり、あるいは空間から離脱することイコール解脱であり、あるいは識別から離脱することイコール解脱であり、あるいは無の境地から離脱することイコール解脱であり、あるいは認知から離脱することイコール解脱であると。

そして、最終の解脱というのは認知経験滅尽といわれてる状態であると。認知経験滅尽とは何かというと、過去における経験の因を受けないということなんだよ。つまり、例えばある行為をなしたと。例えば、飲み物があって、その飲み物が大変おいしかったと。おいしいから、次にまたその飲み物を飲みたいという心の働きが生じてこないと。一回一回新鮮な状態で動きが生じるということなんだよね。

（質問者Ｂ）あ、そうしますと、例えば、今の現代の日本の人々がまあオウム真理教に入って解脱を求めるとするならば、どの段階まで行けるんでしょう。

（尊師）いや、それはその人の機根によって、最終の段階まで行ける人もたくさんいると思いますよ。

●仏陀とイエス・キリストの教えの違い

（質問者Ｂ）で、イエス・キリストであるとか、あとゴータマ・シッダールタであるとか、そういった方々も最終段階まで行かれたということですか。

（尊師）少なくとも、ゴータマ・シッダールタが最後まで行かれたことは間違いない。キリストというのはね、イエス・キリストというのは、そういう解脱を目的としたんではなく、微細な世界の神の息子になることを目的として法を説いてるんです。

つまり、それは『タターガタ・アビダンマ』、多分、今日配られると思いますけども、その『タターガタ・アビダンマ』の中の、形状界の神になることを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

特に、この宇宙が存在しているときには神聖世界へ生じ、宇宙が存在していないときは光音天の世界へ生まれ変わるということを目的として説いたのがキリストの教えなんです。

ところが、ゴータマ・シッダールタ、つまり仏陀の教えというのはそうではなくて、その形状界を超えて、空間、識別、それから無、そして認知ね、これを完全に超越し、最終的には経験まで超越したところに自分自身を置こうと。つまり、自分自身を構成しているものすべてをゼロにすることを目的として説いたのがゴータマ・シッダールタの教えなんです。

だから、そういう意味でいったら、ゴータマ・シッダールタの、仏陀の概念の中にキリスト教の概念は含まれるというふうにとらえていいと思います。

●尊師の来世

（質問者Ｂ）少し失礼な質問なんですけれども、尊師もこの世に肉体がある以上は、いつかはその肉体も滅ぶときが来ると思うんですけれども、そうするとその後、その尊師の魂――といっていいのかわかりませんけれども――はどうなるんでしょうか。

（尊師）経典からいくならば、俗にいうところの創造主の世界へ行くことになっているけども、しかしわたしとしては、まあ人間の世界へ行くのか、あるいは第一天界へ行くのか――つまり、そうだね、龍とか、あるいはガンダッバとか、まあいろいろあるわけだけど――そういう世界に行くのか、まだ決めてないと。

（質問者Ｂ）あ、いや、尊師がもう決められるわけですか。

（尊師）もちろん、わたしが決めます。

（質問者Ｂ）は、はい。

（尊師）というか、最終の解脱というのは、あなたが決められる権利があるんです。というのはなぜかというと、つまり、例えばね、そうだね、ここに一から百までのカード

を持ってる人と、一しか持ってない人との違いなんだよ。その一から百までのどのカードを選ぶかというのは、持ってれば選ぶことができるよね。持ってなければ選ぶことはできないよね。ところが、一般の人はそのカードを一つしか持ってないんだ。つまり、今生で人間としての完全に業が切れた、その業の切れた段階で、それまで経験してきたものが次の生を形成するんです。

（質問者B）ありがとうございました。

◉分析し、合成するのはだれか

（質問者C）真理というものは、シンセシスとかアナリシスを経て得られるものだということですが、分析、それから合成するというのは、だれがいったい分析し、だれがいったい合成いたすんでしょうか。

（尊師）あ、すごく難しい質問だね、それは。まあ結論からいうならば、そうだね、真我のオーダーということになるわけだけど、その真我というのは最終地点で純粋化されるわけだけども、ま、その真我のオーダーというふうに考えていいんじゃないかと思うね。

（質問者C）その真我のオーダーっていうのは、人間だれしも普遍に持っているものなんですか。それとも…。

（尊師）いや、みんな持っているんです。

（質問者C）みんな持っている？

（尊師）はい。昔から、永遠の昔から持ってるものなんです。

（質問者C）尊師の見解の、人間は人生、生きていると苦というものを味わわなければならないということは、それと同じく、主観的な考えにすぎないと思うんですけれどもどうでしょうか。

（尊師）うん？ 主観的な考えにすぎないってどういうことかな。

（質問者C）つまり、いろいろな考え方がありますから、真理とおっしゃいましてもいろいろな到達点が考えられるんではないかと思うんですけれども。

（尊師）うん、だからそれを突き詰めていけば一つになっちゃうんだよ。例えば、人間は死ぬものであると。これはどうかな。

（質問者C）はい、それは正しいです。

（尊師）生まれて死ぬものである。これはどうだ。

（質問者C）はい、そのとおりです。

（尊師）正しいよね。じゃ、生まれて死ぬ中間状態で老いるものである。これはどうかな。

（質問者C）あ、それも正しいです。

（尊師）つまり、そういうだれが見ても正しいことを突っ込んで考えて、それが果たして苦なのか楽なのか、つまり幸福に導くものなのか不幸に導くものなのかということを行なうこと、これが分析なんだよ。だから到達点は一緒なんです。

（質問者C）ああ、わかりました。

◉高い生命体が生きていると判断する論拠

（質問者C）それではもう一つ、質問させていただきます。高い生命体というのは、どういうことでそれが生命かと、つまり生きていると判断しているのか、その論拠を教えていただきたいんですけれども。

（尊師）これは難しいところで、経験だね、結論からいうならば。

（質問者C）あ、あなたの経験ですか。

（尊師）わたしの経験だけではなく、ま、それはキリストも経験していることだし、仏陀も経験していることだし、それは経験だよ。

（質問者C）経験からそうお感じになる？

（尊師）感じるのじゃなくて、そういう経典がたくさんあって、そして実際それを経験してると。それからもう一つ別の言い方をするならば、その生命体が生きてないとしようじゃないか。じゃ、わたしたちは生きてるんだろうかという、次に論議が出てくるわけだよ。

（質問者C）つまり、わたしはですね、科学っていうか、生物を勉強してますが、今のところ、それで考えますと、つまり生きてるという状態は、物質の秩序を保つ方向に動いているという状態を生きていると考えていますが、高い生命体っていうのが精神世界のものであり、そういう秩序に向かう方向の働きっていうものがどういうものなのか想像できないんですが、そこのところをおっしゃっていただきたいんです。

（尊師）例えばね、ある神がいたとしましょう。で、その神にわたしが会ったと。そのときに、わたしだけじゃなくて他の人もそこで会ってたとしましょう。で、その神との会話をわたしが記憶していて、その人も記憶してたとしましょう。ね。じゃ、この経験は正しいか正しくないかと。これはどうかな。

（質問者C）それを判断できるのは、その会った人っていうか、そうおっしゃられた会った人たちだけだと思うんですが、我々には判断不可能だと思うんですけれども。

（尊師）いや、だからそれが、そこでのまやかしがないとするならばの話をしてるんだ、わたしは。

これは何を言いたいかというと、例えばあなたがね、BさんとCさんと会ったとしましょう。で、ところがBさんとCさんが会ってないのに会ったと言って、あなたも会ったと言ったならば、これは正しくないけども会ったことに

なるよね。どうかな、それは。

（質問者C）それは、でも、真理とおっしゃられるに不十分…。

（尊師）いや、不十分じゃなくて会ってないことになるねと言ってるんだ、わたしは。それはどうですかと言ってるんだ。

（質問者C）あ、はい。

（尊師）だよね。で、それと同じ次元で、嘘をつくとするならば、それはそうかもしれないけど、この人間の世界ですら、そういう意味でいったらわたしたちはマーヤ、つまり幻影だと思ってるわけだよ。つまり、そういう世界と同じレベルで見るならば、そこで生じる現象はすべて同じであると。

（質問者C）あ、わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

◎形からものを見る見方を離れて

（質問者D）神ですけれども、神が最終的な何ものなわけですか。

（尊師）いや、だから神を超越して、神ですら永遠じゃないんだと。例えば、最も長い神といわれているものは、六万カルパ、つまりこの宇宙が六万回創造され破壊される間、生きることができるといわれてるわけだけど、それでも六万回後にはまた生まれ変わるわけであって…。

（質問者D）そういうふうにいわれている神は、生命体としてある意味で形を持つんですか。

（尊師）形を持つものと持たないものがある。つまり、形を持たないものを非形状の神といい、形を持つものを形状の神といいます。

（質問者D）我々はもう形からものを見る見方にすごいひたりきってますから、そういう言い方をすると、何かすごい実体的な何かを想像してわからないだの何だのこう考えがちですよね、神といった場合。

（尊師）でもね、例えば、そうだね、光ファイバーの中を光が通って情報伝えてるね。この光を、例えば光として認識することはできるけども、形状として認識することはできないよね。どうかな、それは。

（質問者D）はあはあ。ええ。

（尊師）しかし、わたしたちは、それを通常の生活の中で使ってるわけでしょ。

（質問者D）あ、そうですね。どうもありがとうございました。

◎神様が試練を与えたのはなぜか

（質問者E）ちょっと一つ教えていただきたいんですけども、人間っていうのは生まれてきて修行して、それが真理に近づくと、いいところというか、より優れた生命体になれて、で、もし真理から外れた生活とかをして死ぬと、まあ地獄っていうかそういうところに行ってしまうっていうことなんですが、まあやっぱり今の世の中っていうのは真理どおりに生きるのは非常に難しい世の中だと思うんですが、神様が僕たちにそういう試練を与えたのはなぜかっていうのをお伺いしたいんですけども。より高い生命体に上がるっていうのが、どういうふうな意義があるのかっていうことをお伺いしたいんですけども。

（尊師）それを話す場合、宇宙の創造から話さなければならないわけだけど、もともとわたしたちは純粋な真我と、そして三グナと呼ばれている、これは動性、善性、暗性という三つのエネルギーが存在していたと。そして、その動性、善性、暗性といわれる三つのエネルギーと真我が干渉し合うことによってこの宇宙が生じたという考え方があるわけだね。

　で、この三つのエネルギーと、それから真我のぶつかり合い、これを生じない真我も存在していると。で、そのエネルギーのぶつかり合いによっていろんな経験が始まるわけだけど、その経験こそが本来真我が持っている、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの状態を破壊するものであると。で、だとするならば、そういう三つのエネルギーの干渉がどのような形で起きたにしろ、それに対して全く耐えることのできる真我の状態にしていくことこそが最高の状態であるということだよね。

　そうすると、例えばわたしたちが、じゃなぜその干渉によって巻き込まれるのかと。例えばだよ、例を挙げよう。ここに性欲の大変強い男性がいたとして、その男性は性欲を満足させるためにどのような女性でもいいからつきあいたいと。で、まあどのような女性でもいいからまあ寄っていってつきあうことになったと。次に、あまり性欲は強くないけど性欲を持っている男性がいたとした場合、まあその人は好みの女性が近づいてきたら、当然つきあうだろうと。次に、全く性欲がない男性がいたとした場合、いかなる女性が寄ってきてもおつきあいしないだろうと。

　これと同じように、大いなる経験をさせることによって、そのいっさいのエネルギーの干渉を完全に遮断してしまうと。これがもともとの意味合いなんだよ。理解できるかな。

（質問者E）まあ、少し理解できました。

（尊師）今の理解できないというのは、どこが理解できないかな。

（質問者E）いや、だからそのより高いところに上がれるというのはわかったんですけども…。

（尊師）より高いではなくて、その真我の独存位というのは普遍なんです。つまり、より高くもなければ、低くもなければ、要するにその中に絶対的な自由・幸福・歓喜が内在されていると。で、その状態は壊れないということなんだよ。
（質問者E）わかりました。で、もう一つお伺いしたいんですが、そしたらまあわたしらが呼んでるところの、その究極の神様というのも、昔は人間だったこととかはあるんでしょうか。
（尊師）はい、あります。
（質問者E）わかりました。どうもありがとうございました。
（尊師）はい。

●人間が行くことのできる世界

（質問者F）尊師はよく欲六界ということをおっしゃられますけども、現在我々が相互作用できるのは人間界と動物界だけということでよろしいですか。
（尊師）いや、餓鬼界にも行けます。
（質問者F）というか、我々は動物だったら、あ、犬がいるなって感じで認識できますけども…。
（尊師）餓鬼界というのはね、低位霊域というふうに正確にいうと訳することができてて、例えばあなたがめちゃめちゃに疲れたと。そのとき金縛りに遭って行く世界、これが低位霊域です。ですから、わたしたちはこの人間界、それから低位霊域、動物の世界、三つに行くことはできます。
（質問者F）ということは、天界とかそれから地獄界とかっていうものは、現象することは絶対ないわけで、我々がいわゆる一般に認識と呼んでおるような状況で現象することは…。
（尊師）難しいね。それは難しいね、それはね。
（質問者F）難しいですか。はあ。下位ということであれば、真我の集合体ってこと考えてると認識してよろしいわけですか。動物界とか、それから天界とかっていうのは。
（尊師）どういう形で生じるか、まあ世界の様子というふうに考えてほしいんだけど、例えば地獄の場合は激苦地獄というふうに表現されてるし、動物の場合は動物の発生というふうに表現されてるし、餓鬼の場合は低級霊域というふうに表現されてるし、それから人間の場合は人間の世界というふうに表現されてるし、それからまあ一つ上の世界は意識堕落天というふうに表現されてるし、それからもう一つの上は戯れ堕落天というふうに表現されていますと。これが愛欲の…。
（質問者F）ええ、それは知ってるつもりなんですけれども。

●生命の寿命の長さは普遍

（質問者F）じゃあ、ちょっと変わった質問しますけれども、人間界の寿命というものは、麻原さんの本にも書かれてますけども、地獄界とかの場合も寿命とかいうのがあるわけですか。何年とかいうふうにいえるわけでしょうか。
（尊師）それは、その人の苦しみを生じさせるカルマが切れるまでですから、まあ一応表現としては何カルパとか何十カルパとかいう表現はあります。
（質問者F）それは寿命みたいな形でとらえていいんですか。一般的に、確かにカルマというものはあるんだと思いますけども、人間界だったらば、現在だったら例えば八十年とか、そういうふうにだいたい決まってると思うんですよ。カルマの大小はあるのかもしれませんけども。
（尊師）いや、それは違うよね。例えば、インドは平均寿命は五十歳以下だし…。
（質問者F）ええ、それはそうですけど、例えば一億年生きる人間というのはきっといないと思うんですよ、現在の寿命で。例えば、まあだいたい何年というオーダーではかられるようなもので、あんまりこうかけ離れた数字って出てこないと思うんですよ。三千年生きるとか、ちょっとこれはオーダー違いますね。そういう形で出てくることはないと思うんですけれども。
（尊師）ただ、『聖書』とか仏典にはそれが載ってるし、そしてもう一つは、人間の寿命の最長は何歳まで生きられるんだという場合、例えば今でも百五十とか二百とか生きる人と、それから逆にまあ五歳十歳で死んでいく人と考えるならば、少なくとも二十倍、四十倍のカテゴリーで生きることはできると。そうすると、最長の二百から、それからまあ二十倍、あるいは四十倍とするならば、四千歳、八千歳という寿命があっても当然であると。そういう形の、どちらかというと、そうだね、段階的発想でいくならば、生命の寿命の長さというのは普遍といっておかしくないと思うんだ。
　例えば五歳しか生きられない人は、二百歳まで生きたいと考えるだろう、絶対。どうですか、それは。
（質問者F）え？
（尊師）例えば五歳で死が決まってる人がいたとしてね、長生きしたいと――例えば、二百歳まで長生きする人がいたとして――その人はやはり、ものすごい長命、想像もつかないような長命に見えるよね、当然。
（質問者F）ああ、はい。
（尊師）同じことが、例えばいえると思うんだよね。だから二百歳、それから、二百歳を起点とするならばまあ二十倍、四十倍のカテゴリーが成立していいとするならば、四

千歳、八千歳というのは当然いけるわけでしょ。だから、そういう生命体が存在して当然であるとわたしは考えるけど。

（質問者F）ああ、その生命、存在するってことはまあ存在してもいいと思うんですけれども、知らないですから判断は保留ということで。

◉ニュートンの法則が成立しない世界がある？

（質問者F）それでは、例えば我々の現実世界において、例えばニュートンの法則とか、それからまあ何でもいいんですけれども、いわゆる自然法則というのが成り立ってますけれども、これはどうして成り立ってるわけですか。これは管理存在とかあるわけですか、やっぱり。

（尊師）いや、そうではなくて、エネルギーの流れによって成り立ってるんだよ。例えば、経験したらわかるわけだけど――まあ、ここらへんはほんと経験の世界になるけどね――例えば意識堕落天というのは、だいたい地上から、そうだね、五〇センチとか一メーターとか浮いた形で動いています。これは例えば、ギリシャ神話なんかの神も地に足が着かないという話があるわけだけど、それと同じです。ということは、その世界においてはニュートンの法則は成立しないと。

　ところが、この人間の世界は、多くの魂、ほとんどの魂が下へ落ちるわけであって、よってその落ちるという法則が中心に働いていると。これが仏教的な考え方です。だから、もし上流、つまり上に向かう魂が多くなれば、その分だけ、当然エネルギーの流れの変化は生じるはずです。

（質問者F）で法則は、例えば、百年前も成り立ち、今も成り立ってるっていう、そういうことがあると思うんですけども…。

（尊師）だから、それは短いよね。

（質問者F）ええ、それは短いですけれども。

（尊師）うん、短いよね、要するに。もっと長い…。

（質問者F）こういう法則自体を管理してるような存在というのはないんですか。

（尊師）法則自体…、まあそれは夜摩天――支配流転双生児天という双子の神様、日本では閻魔大王といわれてるわけだけど――がいらっしゃるわけだけど、その魂が管理してると一応いわれてるけども、わたしはそれより心の働きであると考えてます。

◉同じ行為でも基準によって

（質問者F）もう一つだけよろしいですか。例えば、盗みをしてはいけないとかいうことあると思うんですけども、これが、例えば同一の現象を行なったとしても、ある社会の基準というのがあって、おんなじ行為でも盗みと判定されるかされないかというのは変わってくると思うんです。

（尊師）それは素晴らしい質問だね。

（質問者F）これは変わってくると思うんです。

（尊師）なぜ素晴らしい質問といってるかというと、ここは一つのポイントになるわけだけど、意識が低位に至れば至るほど、その条件というものは甘くなります。しかし、その分、裁きも大きいと。例えば、例を挙げるならば、動物の世界でお互いがかみ殺し合うと。この殺生は認められています。しかし、彼らはその分苦しみも大きいと。同じように、盗みもそうであると。

（質問者F）あ、どうもすいません。どうも長いことありがとうございました。

◉真理の奥の深さ

（質問者G）次の世代で上位になりたいとか、解脱をしたいとか、そういうようないろんな人間の欲、感情はどういうふうに構成されているのでしょうか。

（尊師）これは、仏教にも欲知足というのがありまして、つまり欲の船に乗って欲を消滅するという教えがあります。これはどういうことかというと、例えばね、アメリカに行きたいと考えている人がいたとして、で、例えば飛行機を使ってアメリカまで飛んだと。そして、アメリカに着いてしまったら、アメリカに行きたいとは考えないだろうと。どうかな、これは。

　つまり、解脱したいと考えてる人がいて解脱してしまったら、もう解脱したいと考えないと。ところが、解脱に至るためにはその欲が必要なんだということだね。

（質問者G）いや、アメリカに関していうんだったなら、なぜアメリカに行きたいのかという疑問に対する分析があると思うんです。だから、人間が感じるときの、来世上位に行きたいとかっていうときに、あのう…。

（尊師）いや、来世はみんな持ってるんだよ。

（質問者G）いや、来世に行ったときに上位に行きたいと、そういう欲に対する空しさ、やましさを感じるんですけど、それに関しても分析を…。

（尊師）いや、だってだよ、その欲に対してやましさを感じようが感じまいが、例えばだよ、ここにフライパンがあって、そこにあなたが乗っけられてて火であぶられてるとしようじゃないか。で、いや、わたしは前生においてこういう世界に、ね、行っても構わないと。つまり、あのときわたしは上位の世界へ行くことはやましいと考えたからこういう世界へ行ったんだと言ったとして成り立つと思うか、それが。

（質問者G）いや、僕はそんなのが、まだあるかないかわ

かんない感じで、僕は現実の世界に立脚をした生き方をしたいと…。

（尊師）うん。だから、現実の世界を分析することによってこの現実の世界の価値を正確にとらえる、そしてそれを超えるということがまず第一段階にあるわけです。わかるかな、言ってることは。例えばだよ、あなたの言うその現実を十分に満喫したいと、あるいは現実を充実した形で生きたいと考える。これそのものは悪いことではないよ。ただそこにおいて問題になってくるのは、その現実の意義、つまり来世の意義を考える前に現実の意義を考えていないではないかと、分析していないではないかと。これはどうかな。

（質問者G）だから、もっと現実に対する分析は、日本の社会に対してどう働いてどういうふうにしていくかという方をもっと完全に変えていった方が、まあ僕は人間に立脚する考え方より重要なのではないかと思うんですが。

（尊師）いや、それは先程も言ったとおり、まず個人から発生して、個人の生とか老いとか、病とか死とかいうものについて考えること、ね、それと同等で、例えば、ま、君の今のその命題というのは、同等であるか、あるいはそれ以下だと思うんだよ。で、なぜ同等であるかそれ以下だといえるかというと、この第一の命題の生・老・病・死というのは、だれもが通過する問題であると。これはどうかな。

（質問者G）それはそうです。

（尊師）しかし、社会の諸現象というのは、ある人は関係があるし、ある人は関係がないよね。例えば、例を挙げるならば、消費税の問題があったとして、消費税は、例えば大金持ちにとっては大した影響がないと。逆に大金持ちにとって、まあ優位に展開したわけだけども、大した影響はないと。しかし貧しい人にとっては影響があると。しかし、これらの貧しい人も大金持ちも最終的には死ぬわけであって、その死について考えた方がより有意義じゃないかと思うわけだけど、どうだそれは。

（質問者G）いや、まあそこは、僕はその死以降についてはあえて考えないというか、あるかないかわかんないような世界に行ったとして、そのための生き方をするよりもという、今のある世界に立脚して生きていった方がと思ってるんで、ちょっとそこは相容れないかなあとか思うんですけど。

（尊師）いや、だからね、例えば、そうだな、ということは、君は死後の世界はあるかないかというのは、もう今生では考えないということだね。

（質問者G）いや、考えてもわからないから、それを考えてもわからない…。

（尊師）いや、だから考えてもわからないじゃなくて、その教えを聞いて実践することによって、経験ができると言ってるんだ。

（質問者G）まあ、それはそれで一回人生使ってしまうことになりますんで（笑）、それをあえてしない…。

（尊師）それは勘違いだよ。なぜ勘違いといえるかというと、例えば、サーリプッタは二週間で悟ったし、マハーモッガラーナは一週間で悟ってます。あるいは、ケーマー比丘尼は九カ月で悟ってます。だから一生は使ってません。

それをだよ、君の、この世の中を変えることは、今まで多くの人が――例えば、まあ例を挙げるならば、そうだね、マルクスが社会主義あるいは共産主義というのをぶち上げて、で、試みたわけだけど、失敗したわけでしょ。

（質問者G）まあそうです。

（尊師）何百年かかっても、結局は、みんながそういう意味で平等というか、本当の意味に幸福になるような社会というのは不可能なんだよね、この人間の世界では。

（質問者G）全員がオウム真理教の信徒になってもですか。

（尊師）いやあ、それは可能性があるかもしれないけど（笑）。いや、それは可能性があるかもしれない。でもまあ、一般的には不可能なわけでしょ。

（質問者G）いやだから、何らかの形で可能性があるというふうに今お見えになったのに、あるかもしれないですし、まあわからないというかね…。

（尊師）ただその場合、この現実の価値観よりより高い価値観を提起しない限り、それぞれが持っている利権とかそういうものは手放さないよね。これはどうかな。

（質問者G）うん、だからまあ、人間はどうしても、こう、ごたごたした存在だとは思いますけど。

（尊師）そうだよね。で、当然、この現実の生活を分析する瞑想というのも存在してるわけです。だから、先程の比喩においては、現実の生活のまあ例というのを挙げてるわけだね。当然、それは瞑想において、しょっちゅうそういう瞑想はします。そして実践します。

例えば、まあ例を挙げるならばだよ、今オウムが実践している、一冊五百五十円で本を出すためにはどうしたらいいかという検討までわたしはやってるわけだ。でしょ。というのは、一般的に出すならば、やっぱり今一冊千円ぐらい出さないと、ねえ、原価割れしちゃうわけだけど、それはどうやって出したらいいんだと。そのためには、例えばこういう機械を導入して、このような形でもっていけば五百五十円で出せるなと。で、それができるというのは、より高度な分析ができるからなんだよね。

だから例えば、例を挙げるならば、今二年間あまり、まあ社会的にオウム真理教というのはかなり強く叩かれたわけだけど、平然として組織は維持できたというのは、まあ

もともとそれだけのものが生じる、つまりオウムはバッシングされるんだということを予言して、その準備をしてたからなんだね。経済的にも、いっさいどこからも借り入れをしないで自力でやっていくということを、もうその叩かれる三年も前から準備をしていたから、平然と生きてこれたわけです。

そういう智慧というのはあるわけだけども、それはあくまでもわたしたちにいわせると低次元の智慧なんだね。ということです。

（質問者G）だいたいわかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

◉犬のウンチも神から見れば……

（質問者H）教えの方でちょっとお聞きしたいんですけども、そもそも人間と神とはどのように位置づけられるものだとお考えになりますか。

（尊師）いや、それは、要するになしてきた部分の違いであると、過去において。

（質問者H）確か、幸福の科学の教えでは、ま、それを信じている信じてないは別としまして、確か人間といいますのは、神の創造物というよりはむしろ表現物であると。だから、神のある一面の現われが人間であると。確か、そのような教えをのたまわったと思うんですけれども、尊師としてはどのようにお考えになりますか。

（尊師）質問していいかな。

（質問者H）はい。

（尊師）人間のどの要素に、神の具現化された形があると思うか。例えば、犬のウンチを拾うことが、神の具現化した形だと思うか、君は。例えばね、例を挙げるならば、ああのときわたしは発言させてもらえなかったから発言しなかったんだけど。いや、明らかに、ね、これは――ま、こういう話、君たち好きだから、あんまり話したくないんですよ（笑）。いや、事実、例えばインドに行くよね。インドに行って、例えば果物の皮とかを投げた方がいいんだよ。なぜかというと、牛とか、実際に自由に生きてて、そういうものを食として生きてるわけだよね。わかるよね、言ってることは。

つまり、日本のある意味での、人間の感覚から見たカルチャー感覚からいくと、犬のウンチを拾うことは大変素晴らしいことかもしれない。しかし、そうではなくて、例えばもっと大きな視野で見るならばそれは大したことじゃないわけだよ。だから、条件によって違うことを教義の中枢として、例えば、マスメディアを使って報道する、あの報道のあり方にわたしは大変な疑問を持ってるわけだね。

で、犬のウンチを拾うことが神の意思なのかどうかというと、神の意思としては、要するに、犬のウンコであろうと人間のウンコであろうと、本当は自然に返って、それが肥料となって、例えば糞そのものも微生物の栄養分になるわけだから還元してあげてもいいわけだよね。

（質問者H）ありがとうございました。

（尊師）そういう考え方もあるわけですよ。

『麻原彰晃の世界』PART11
信州大学（91年11月1日）より

◉人間はなぜ生まれてきたのか

（質問者A）僕らは毎日こうして生活してるんですけれども、やっぱり一番疑問に思うのが、どうして僕たちは生まれてきて、こうして生活して、最終的には死んでしまうんですけども、こうやってお金稼いだり、勉強したりして、結局、何を目的として暮らしていくのか知りたいんですけど。

（尊師）大変いい質問だと思うね、それは。まず、人間がなぜ生まれるかというのは、十二の条件生起の法というのがあります。この十二の条件生起の法というのは、まあ君たちは正しくない言葉で、「あいつはわたしに因縁をつけた」とかいうわけだけど、その因縁、これは十二因縁の法とか、十二縁起の法とかいわれている、これは正確に訳すると、十二の条件生起の法という言葉で表わすことができると。

で、その十二の条件生起の法そのものが、わたしたちがこの人間の世界へ生まれてきたプロセスをしっかりと説明していると。よって、その十二の条件生起の法について話をしましょう。

まず、わたしたちが死というものを迎えた直後、わたしたちはまず気絶状態に入ります。この気絶状態に入るというのは、この粗雑な人間の世界をすべてであると考えている意識がそこから解き放されるときに、そのショックによって気絶をするわけです。そして、その気絶状態に入ってその次の段階で、経験の構成を認知するプロセスに入ってくると。

経験の構成を認知するとは何かというと、例えば、その前の生においてロックをたくさん聞いていたとか、あるいはジャズをたくさん聞いていたとか、あるいは科学の本をたくさん読んでいたとか、あるいは実際に科学の研究をしていたとか、あるいは、例えば食べ物で信州そばをたくさん食べていたとか、そういう経験の構成が甦ってきます。

で、経験の構成が甦ってきた段階で、次は識別作用が生じます。識別作用というのは、その経験に基づいてどの世

界へ行こうかという識別作用が生じます。で、そして自分の望む世界はここであるというそういう識別が生じた段階で、次は先程述べたとおり、形状・容姿と心の働きのみが存在する世界へと至ります。この、心の働きと形状・容姿というのは、要するに触れることのできない身体と、そして心の働きが同時に存在している世界へと移行していくわけだね。

そしてその次の段階で、その心の働きと形状・容姿の六つの器官、これは、目、耳、鼻、口、ね、そして触覚という五つと、それから心の働きの六つが外界と接することにより、というのは、この心の働きと形状・容姿の世界にはたくさんの他の生命体がいますから、外界と接触することにより、そこで感覚が生じてくると。

そして、感覚が生じるがゆえに、次はもっともっとより強い感覚を得たいと。これは、例えばおいしいものを食べたらよりいっそうおいしいものを食べたいとか、あるいはわたしたちが性的快楽に対して縛られているのと同じように、よりいっそう強い渇愛が生じてきます。つまり、欲求が生じてくるわけだね。

そして、その欲求が生じてきた段階で、その次の段階で、その欲求なるがゆえにとらわれるようになります。例えば、恋愛においても、あの人でなきゃ駄目だとかこの人でなきゃ駄目だとか、食べ物でも、わたしは例えばカレーが好きなんだけどラーメンは嫌いだとか、このような形のとらわれ、愛著が生じてきます。

で、実はその愛著が生じた瞬間に、それと同時に、裏側に嫌悪、つまりあの人は嫌いだこの人は嫌いだといったような感情も生起するわけだけど、まあそれはいいとして、その相反する感情が生起した次の段階で、それを具体的にもっともっと経験したいという心の働きが働きます。そして、子宮へと至るわけです。

子宮へと至った魂は、もう君たちも知ってのとおり、そのまま生存へと至ると。これが、わたしたちがこの世に生まれてきた意味合いです。ですから、この世に生まれてきた意味合いというのは、要するに欲望、煩悩というのがあって、その煩悩によって生まれてきてるんだということになるわけだね。よろしいでしょうか。

◉絶対的価値観と相対的価値観

（質問者B）わたしは、絶対的な価値観というものは存在するのかって書いたんですけれども、先日、人と話をしていて、二人で話をしてたんですけれども、二人の方の価値観があまりにも違うっていうか、うまく説明できないんですけれども、わたしはほんとにもうどちらが正しいかってことは自分でももちろん判断できなかったんで、こうしてこういうこと書いたんですけれども、人間が生きていく上で、どういうものに価値を置いて生きていくのが正しいのか、そもそも正しい価値観とか正しくない価値観とかそういうものがあるのか、そういうものがすべてわからなくなってしまったんで、そのへんをちょっとお聞きしたいと思います。

（尊師）価値観っていうのは、二つのカテゴリーに分けることができると。その第一の価値観は絶対的な価値観と。第二の価値観は相対的な価値観と。で、この絶対的な価値観と相対的な価値観の違いは、その超越した煩悩の状態との価値観を中継するのか、あるいは煩悩によって目的を追求することによって生じる価値観を採るのかによって違ってくると。

例えば、第一番目の例は、わたしたちは必ず死にますと。よって、長生きしたいと。あるいは、わたしたちは必ず死ぬから、苦しみの少ない世界へ、幸福の多い世界へと生まれ変わりたいと。あるいは、この人生で生きていて幸福になりたいと。このようなものは、すべて絶対的価値観に属すると。

では相対的価値観とは何かというと、例えば学校生活を実際送ると。そして、高学歴、そして一流会社といったエリートコースを歩むと。これに価値を見いだしてる人、あるいはそうではなくて、例えば人生というものはもっとゆったりと楽しみながら生きていくことの方がいいんだと考える生き方と。このような例えば価値観というのは、相対的な価値観に属するということがいえると思うんだね。

で、この相対的価値観というのは、必ずその人が何らかの精神的トライをするならば変化すると。しかし、絶対的価値観というのは、その絶対的価値観の終局である悟り、あるいは解脱をしない限り、その絶対的な価値観における満足を得ることができないと。こういうことがいえると。

そして、この相対的価値観は、瞬間瞬間、一時的には喜びを満たしてくれると。例えば、この人間の世界はわずか八十年であると。この八十年間の間において相対的価値観は有効であると。しかし、絶対的価値観は、それを超越した長い長い魂の流れにおいて有効であると。ということは、相対的価値観を捨断し、絶対的価値観を採った方がわたしたちにとってはより多くの利益があるといえると。よろしいでしょうか。

◉真理勝者の発するヴァイブレーション

（質問者C）仏陀である釈迦が悟りを開いた後に人々に法を説いたときには、人間の言葉もわからない動物もその教えに聞き入っていたというんですけれど、それについてはいかがでしょうか。

（尊師）それは事実だと思うね。というのは、真理勝者の発するヴァイブレーションというのは大変神聖なものであると。例えば、オウム真理教でわたしが法を説くときも、例えばネズミがね、わたしの体に乗っかってきて体の上で遊んでるという状態もある。

これは、全くその同じ意味合いで、仏教の修行の中に非害心というのがあるわけだけど、相手を害さない修行、あるいは非暴力・非残酷という修行があるわけだけど、そのような形で、動物界というものは完全に動物連鎖によって恐怖を覚えてるわけだけど、サキャ神賢の場合、その恐怖を全く与えない心の働きがあられたので、動物たちも神聖な気持ちになれたということだよね。

それからもう一つは、これは、そうだね、物理の話になるわけだけど、人間が聞いている可聴範囲の声ではなく、例えば低音範囲とか高音範囲には別の成分があって、その別の成分は、例えば動物とかそういうものに対しても一種のヴァイブレーションとして会話することができるといわれています。ですから、それは正しいと思います。

（質問者Ｃ）えっと、そういううんちくを聞きたいんじゃなくて、実際にネズミが体の上に乗ってきたっていうのだけじゃ信じられないので、そういうのを見せてほしいんですけど。

（尊師）君の心の中には、既に〝真理〟というものに対しての否定的想念というか、そういうものがあって、そしてそれを面白がってるよね。そういう心をまず切らないと、自分自身がそういう見せ物的な立場に置かれる可能性が高いよ。わかるかな、言ってることは。

◉サイエンスは精神科学から降りてきた一部である

（質問者Ｄ）こないだね、ＮＨＫのテレビだったんですけども、「アインシュタインの宇宙」っていうの見たんですよ。で、詳しい内容はよく覚えてないんですけども、麻原さんの考える宗教と科学——科学っていうのは、化学じゃなくてサイエンスの方なんですけども——宗教と科学の接点についてちょっと聞きたいと思うんですけども、よろしかったら答えてください。

（尊師）まず、アインシュタインが徹底したユダヤ教徒であることは知ってるよね。

（質問者Ｄ）はいはい。

（尊師）で、科学というのは、精神科学から降ろされた情報の一部を一生懸命追いかけてるということだとわたしは思うんだよ。つまり、まず先に精神科学があって、その後に実際の科学が存在してくるというか。で、それについてはね、今日、これは阪大で宇宙物理学をやってたマンジュシュリー・ミトラが来てるから、より詳しくちょっと聞いてみようじゃないか。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師）皆さんもね、ご存じのように、いわゆる偉大な科学者とおっしゃる方はね、皆、例えば瞑想の経験とか、あるいは深く思索し続ける経験を持ってるかしています。で、これは、わたしたちがね、オウム真理教の修行においてなされる瞑想その他の修行と同じなんだね。

で、そのとき、実は宇宙の構造というのがあるわけですけれども、この現象界に対してさらにその上のね、アストラル世界、それからその上にコーザル世界というね、情報の本質のあるところがあるわけですが、そこからの情報をキャッチするわけです。で、それが、例えば啓示であるとか、ひらめきであるとか、あるいは直感であるとかいう形でポッと与えられるわけだね。

で、後、それをいかにね、具体的に、例えば数学的に記述していくかとか、あるいは観測によってそれをね、証明していくかというのが、どちらかというと技術的な問題になる。だから問題は、要するに、いかに根本的な情報にわたしたちが触れるかということになってくるわけです。で、それをね、直接的に扱っているのが、まあ精神的な科学ということですね。ですから、その成果の一部を利用していくのが物質的な科学ということになると思います。

（尊師）で、そのアインシュタインのね、言葉の中で有名な言葉があるわけだけど、自分は科学の大きな波の一部を経験したにすぎないと。そして、真理の本当に一部を経験したにすぎないという有名な言葉があります。しかし、わたしはそれは事実だと考えています。なぜならば、先程言ったとおり、サイエンスというのは、精神科学から降りてきた一部なんだということだよね。まあ、それについては、これから徐々にオウム真理教の方でもいろんな形で証明をしていきたいと考えています。よろしいでしょうか。

◉科学的な疑問は差異を背景にしている

（質問者Ｅ）基本的にはいいんですけど、科学というのは、サイエンスの方は、今精神科学から降りてきたものの一部と今言いましたよね。もうちょっと詳しく説明していただくとうれしいんですけども。何か具体的なことで。よくわからないんですが、はっきりはそのへんが。

（尊師）例えばね、電話があるとしましょうと、ね。そうすると、電話というのは、ここからある場所に対して瞬間的に話をしたいという発想から起きてきてるね、当然。

ところがそういうのは、例えば、教団内においては日常茶飯事で起きるわけだよね。つまり、テレパシーです。で、例えばそれはどういう形で起きてくるかというと、先程マンジュシュリー・ミトラが言ったように、アストラル——

つまり、このアストラルというのは音の世界なわけだけど、その音の世界を使って速く伝播するというか、例えば今の電話を考えた場合も、一応電気を信号に変えて、そして対象に対して送るわけでしょ。それと同じように、例えばアストラルで、あるエネルギーを信号に変えて対象に送るわけだよね。で、そこに気づいたのがベルではないかと、あるいはエジソンではないかということだよね。例えば例を挙げるならば。まあこれは、科学技術の問題に入るわけだけどね。

もっと典型的な例をいうならば、アインシュタインが相対性理論の理論背景の中でこういう表現を使ってるよね。例えば、一般の生活の時間のスピードと、それからある人が、例えばまあ、ものすごく熱い、そうだね、鉄板の上に座ってる場合とでは時間の流れが違うじゃないかと。つまり、時というものは絶対的スケールではないんだと。

（質問者Ｅ）ええ、聞いたことありますけど。

（尊師）あるよね。わかるよね。こういうこともすべて、先程言ったとおり精神科学から出ていることでしょ。

（質問者Ｅ）それは、精神科学かどうかよくわかんないんですけども、ちなみにアインシュタインは、普通の人間といる場合は時間の経ち方は同じですけども、美人といるときは時間の経ち方が速いと言ったように記憶してるんですけど。

（尊師）その一つだけじゃないよね。それはもっと読んでちょうだい、しっかりと。だから、例えばそういう、まず心に対してしっかりと洞察すると。心に対してしっかりと洞察することによって、その差というものをこの現象界に降ろした場合、それが科学でしょ。

（質問者Ｅ）そんなもんですかね。

（尊師）じゃあ、君にとっての科学はそうじゃないんだ。

（質問者Ｅ）いや…。

（尊師）つまり科学というのは、必ず差異というものを起点として…。

（質問者Ｅ）差異って何ですか。

（尊師）例えば、ある理論があるとしましょう。その理論と例えば現象との間にどのような関連があるのかと。まず、これが第一段階で考えられると。

（質問者Ｅ）あ、それはそうですね。

（尊師）でしょ。ところが、その理論とそれから現象の間に疑問を生じない人というのは、そこから発展しないよね。

（質問者Ｅ）当然ですね。

（尊師）でしょ。つまり、その理論と現象との間の差、つまり相違点を追究していくのが科学じゃないの。

（質問者Ｅ）あ、そうです。っていうか、その疑問の追究ですよね。

（尊師）いや、だから単純に疑問の追究ではなくて相違の追究じゃないのかな。まあ、そこで君のいう曖昧語の疑問というものと、それからわたしのいう差異というものとの間におそらくズレがあると思うんだね。つまり、疑問というのは何かというと、もともとわかっていることを疑問として生じさせる場合と、それからわからない部分について、あるいはズレについてしっかりと押さえる場合と二つあるよね。

（質問者Ｅ）ああ、おそらく後者の方を僕は疑問というと思うんですけども。わかってることっていうのは疑問じゃないと思いますけど。

（尊師）いや、わかってることも疑問だと思うんだよ。

（質問者Ｅ）え、どういう、例えばどういうような感じなんですか、わかってる疑問というのは。

（尊師）ここに、例えば先程言ったオウム真理教の教えがあると。そして、オウム真理教の、要するに、そうだね、デモビデオが流れたと。それに対して疑問を生じさせたと。しかし、これはしっかりと考えていけばわかる内容だよね。

（質問者Ｅ）あ、あ、そういった類いの疑問ですね。

（尊師）そうです。だから、科学的な疑問っていうのは、あくまでも差異を背景とした疑問であると。

（質問者Ｅ）あ、言ってることわかりました。

（尊師）ということなんだよ。で、それをまず精神世界において、精神科学において追究して、それが降ろされてくると、科学というのは。わたしは科学技術を言ってるわけじゃないから。

●大脳は受信機、データバンクの働きをしている

（質問者Ｆ）人間がものを考えたりするときには、大脳を使って考えてるとかと思うんですけど、魂とか、例えば死後の世界とかっていわれた場合、体がなくなった状態で、例えば魂とか――死後の世界でまだ意識があるというようなとらえ方をしている話を聞いたことがあるんで、体がなくなって人間の脳自体で思考が行なわれていないときに、果たして魂っていうのがあり得るのかどうかっていうの、そこらへんはどういうふうにとらえてらっしゃるでしょうか。

（尊師）いや、もちろんそれは存在するよ。そして、意識も存在するし、思考も存在する。というよりも、思考を最も鋭くしている状態というのは、死後のある段階だと。これは仏典にうたわれてるし、わたしの瞑想体験においても同じことがいえます。

（質問者Ｆ）ということは、人間がこういうふうにものを考えたりしているっていうのは、すべて大脳によるものばかりじゃなくて、それ以外の何かによってもいえるという

ことですか。
（尊師）大脳というのは、単なる、そうだね、思考をするときの、まあ例えばデータバンクであったり、あるいは、そうだね、データバンク、あるいは――ちょっと難しいな。何が難しいかというと表現が難しいわけだけどね――要するに、考えてるということそのものは大脳で考えてるんじゃないんだというのが仏教の考え方なんだよね。で、その例として挙げるならば、例えば、もし大脳で単純に考えてるんだったならば、精神的コンディションによって、例えば記憶力とか、あるいは思考のレベルっていうものが狂ってくるはずないじゃないかと。これはどうだ。
（質問者F）うんと、そのへんは学者じゃないんで詳しくはわかりませんけど、例えば体調が悪くて、血の巡りが悪くて頭が鈍くなるとか、例えば貧血を起こしたときにはものを考えられる状態ではないとか、そういったことはあり得ると思います。
（尊師）うん、だから例えばね、たくさんものを食べたときと、それからある程度空腹なときと、どちらの方が思考力があるのかといった場合どうかな。
（質問者F）ある程度空腹なときですか。
（尊師）だよね、やはりね。で、じゃ例えばそのときだよ、大脳に対する血液の量というものが変化してるのかと。あるいは逆に、次に血液の量を変化させることによって思考というものは鋭くなるのかという問題があるよね。
（質問者F）はあ、その点に関しては実際自分で確かめたわけじゃないので断言はできませんが、ものを食べた後っていうのは、胃や腸、肝臓の方に血液が流れていて、空腹時に比べたら大脳っていうか頭の方に回っている血液量っていうのは多少、少ないという話を聞いたことがあります。
（尊師）じゃあ逆にだよ、じゃあ血を多く流すことによって、大脳の働きは正常になる、あるいはそれ以上になるというデータはあるかな。
（質問者F）それは聞いたことがないです。
（尊師）ないよね。だからまあ、マイナスの情報というか、血液の流量が少ないがゆえに大脳の働きが鈍くなる、あるいは血液の流量が正常なるがゆえに大脳の働きは良くなるとか、あるいは正常になるという単純な問題ではないと思うんだよね。例えば、例としては植物人間を考えたらわかるとおり、植物人間で、例えば大脳のある部分が全く損傷がないとしても、結局その人の知性というのは止まってしまってる場合もあるわけでしょ。だよね。
（質問者F）まあそうですね。
（尊師）だから、大脳でものを考えるということに対する反証というものはいろいろあるわけだけど、でも逆に今度は、医学的実験において、例えばある大脳の一部分を切り落とした場合、それによって思考力が停止するとか、あるいは記憶力が停止するということがあるわけだから、それから考えるならば、大脳は何らかの受信機の働きをしている、あるいはデータバンクの働きをしていると考えるのが妥当じゃないかと思います。
（質問者F）あ、よくわかりました。
（尊師）はい。

●本質的な能力に限界はない

（質問者G）いろいろな修行によって人間の能力が開花するって言ってましたけど、その能力に限界はあるんでしょうか。
（尊師）例えばね、人間が執筆をするスピードがあるとしましょう。例えばまあ、一人の作家が書ける限界っていうのが一日原稿用紙四十枚だとしようじゃないか。ね。ところが、修行によって、例えば、一日原稿用紙三百枚五百枚のものが出せるとしましょう。
　しかし、それは粗雑な肉体を使っている以上、例えば口の限界とか――つまり、口を動かすための時間的な限界とか、あるいは手を動かすための時間的限界に制約されることによって、その能力というものはある段階で制約を受けることになる。しかし、本質的な能力については限界はないと考えていいと思います。わたしの言いたいことわかるかな。
　つまり、ソフトの部分については限界がなくて、ハードの部分について限界があるんだということだね。

●サキャ神賢はヨーガを実践していた

（質問者H）今ビデオを見せてもらったんですけれど、そこでヨーガのことが出てきたんですけど、オウム真理教というのは、ヨーガなんでしょうか。
（尊師）質問していいかな。仏教は、君は何だと思うか。君たちは仏教というものが存在していると考えてるかもしれないけど、仏教というのは、釈迦牟尼が亡くなられた後に仏教徒たちがまとめた教え、これが仏教です。そして、例えばサキャ神賢の、釈迦牟尼の教えの中で仏教という言葉は一度も使われていません。では、彼は何を実践したのかと。彼はヨーガを実践してたんだよ。
　ということは、オウム真理教の中で、ヨーガという言葉が出てきても当然だし、例えば、インド・ヨーガの大家である聖者アカンダナンダは、原始仏教の研究をしているということから見ても、わたしの言っている意味合いが理解していただけると思います。つまり、日本というのは、完全に仏教国といいながら仏教音痴なんだね。よろしいでしょうか。

●宇宙人は意識堕落天の神

（質問者I）単純な質問なんで端的に答えていただきたいと思います。宇宙人はいますか。

（尊師）います。

（質問者I）いるとなると、それはいわゆる――いろいろ本読んだんで、欲六界ですか、現象界っていうんですか、それの属するあれだと思うんですけど、前世が宇宙人だったっていう人がやっぱりいるわけですか。

（尊師）はい、います。宇宙人というのは、欲六界の中の意識堕落天を指してるんです、今は。

（質問者I）どうもありがとうございました。

『麻原彰晃の世界』PART11
東京大学（91年11月23日）より

●高い世界へ生まれ変わる実践法

（質問者A）僕がまず聞きたいのはですね、例えば講演の最後におっしゃられましたよね、この真理をお聞きになった方は信じて実践してみてくださいと。それはどういう実践なんでしょうか。

（尊師）先程も言ったと思うけども、例えば、この肉体イコールわたしではないんだというふうに考える訓練をするとか、あるいは、例えば人生についていろんな疑念がある場合は、あるいは現象に対して疑念がある場合は、それを徹底的に検討するとか、あるいは、それは例えばあなたが何かの教えを実践している場合でもしていない場合でもいいわけだけども、もししている場合、まあしてない場合にしろ、あなたの人生論というのがあると思うんだけど、その人生論について徹底的に検討を加える必要があるとかね。

例えば、性的な憤激、興奮に対して、それを鎮める努力をする必要があるとか、あるいは、例えば害心、他人に対して害をする、まあ他人を傷つけるような心の働きというか、それを止める訓練をするとか、そういう努力をしたらどうだという話をしたわけだ。

（質問者A）あ、そうですか。それについて、ちょっとじゃあお聞きしてもよろしいでしょうか、今おっしゃったことについて。

（尊師）はい。

（質問者A）性的興奮を鎮めるなり、まあそのような欲望を鎮めるなりといいますか、特に僕はその性的なものについてお聞きしたいことがありまして。人間というのは、まあここにいる皆さんもちろん人間ですから、生殖器持ってるわけですよね。当然ですね、それはね。

で、そういうものを持ってる以上、これはとりあえずは、まあ神というものが存在するにしろ存在しないにしろ、僕は仮に神という言葉を法則というもの――法則っていうのはどういうことかというと、当たり前のことです。例えば、重力というものがあるということとか――例えば、そういうものと同じようなレベルとして見た場合、例えば人間がこうして生殖器を持って生まれているということは、わざわざそれを、性欲を抑える、ま、異常に、う－んとそれを興奮させてはいけないとは思いますけれども、日常的な人間のレベルで、それを行使するというか、まあ行使するという言葉は変だと思いますけれども、それ自体は別に抑止する必要はないと思いますけれども。

（尊師）うん、確かに君の言うとおりだ。ただし、ただしだよ、何を言いたいかというと、人間が生まれ変わるとき、人間として生まれ変わるとき、必ずその性的憤激が因となるんだよ。原因となるわけだ。つまり、性的憤激が原因となるとするならば、それを捨断しない限り人間界へ転生してしまうじゃないかと。だから、転生を捨断したければそうしなさいよということなんだよ。だから、下位に結びつけると言ったでしょ。地獄から始まって意識堕落天の五つの世界に生まれ変わらないための条件を話してるわけだから。そうじゃなくて、人間として楽しんで、まあ次、他のことを捨断して人間界へ生まれたいと考えるならば、それはいいんじゃないか、好きにして。

（質問者A）あ、すいません。あ、それは先程のお話がちょっと僕にとって難解でしたから、ちょっと解釈の仕方を間違えたかもしれませんけれども。

（尊師）ということなんだよ。

●「とらわれ」の起源は？

（質問者B）わたしは、人類学という学問を通して、人間の宗教とか文化とかについて、それほど長くはありませんけれども勉強してきまして、やはり仏教的な論理の優越性みたいなものは、まあ感じずにはいられないと。例えば、どこの本だったか忘れましたけども、ニーチェがキリストは仏教徒だったというふうに言ってるようなことなんていうのはそういうことなんじゃないかなっていうふうに解釈してるような…。

（尊師）そのとおりです、それは。

（質問者B）そういう人間なものですが、まあそういう立場からちょっと質問をさせていただきたいんですが、尊師は先程人間というか、まあ魂といいますかは、いくつかのステージに分類できて、それは執着の種類によって分類されるのだと、こういうふうにおっしゃられたということでよろしいんでしょうか。

（尊師）段階を正確に分けるならば、まず、そうだね、執着というよりもとらわれの方がいいかもしれないけど…。

（質問者B）とらわれ？　わかりました。

（尊師）はい。まず、第一段階で自分の経験したものだけにとらわれる場合と、それから自分の識別、つまり判断にとらわれる場合と、それからこの肉体ではない、夢で生じる身体があるわけだけど、その身体と心の働きにとらわれる場合と、それから感覚器官にとらわれる場合と、それから渇愛にとらわれる場合と、それから愛著にとらわれる場合と、生存にとらわれる場合という段階があるよね。

（質問者B）それで、質問したいことは一つだけなんですが、そういったそのとらわれっていうものですか、それに対する、それの起源っていうものは、いったい何なのか、結局こういう宇宙というものが、そういうとらわれによって構成されてしまっているということはなぜなのか、もしくは、まあ他のもので構成される可能性というのはなかったのか、こういうことについて、もし今の日本語で説明が可能でしたならばお答えいただきたいと。

（尊師）一言でいうならば、非神秘力と。非神秘力というのは何かというと、わたしたちの本質――まあこれはアートマンっていってるわけだけども――これは仏教でもアートマンって使ってますから、アートマンって使わせてもらいたいわけだけど、真我、つまり〝真実の我〟がすべてを見通すことなく、瞬間的に――まあ、仏教でいう貪・瞋・癡、ヨーガでいうところのラジャス、タマス、サットヴァという三つのエネルギーがあるわけだけど――その美しさに翻弄されたがためにそこから落下が始まったということだね。

（質問者B）それは、その三つの要素に翻弄されたということが起源であると。

（尊師）そうです。

（質問者B）なるほど。その三つのものの起源は、たどることはできるんですか。

（尊師）いや、っていうか、その段階から二元論が始まるんです。

（質問者B）なるほど。その前までは一つであったという…。

（尊師）その前は別個の要素が存在して、真我という存在と、それから先程言った、まあグナとか、あるいは三つの要素、貪・瞋・癡といわれる三つの要素とが別々に存在してたと。

（質問者B）それが一つになったときが宇宙の始まりであるということ？

（尊師）そうです。

（質問者B）わかりました。

（尊師）はい。

◉水子の魂の存在理由

（質問者C）まず一つ質問ですけど、例えば水子のように生まれることさえできずに死んでいった魂というのはどうなるのか。それと、あと…。

（尊師）一つずついこう。まずそういう魂は、人間としての要素が不完全な状態で入ったわけだよね。で、殺生、まあ前生の殺生のカルマによって殺されるということにより、まあ低位霊域で存在するか、あるいはもう一度人間の身体に生まれ変わるか、あるいは動物へ生まれ変わるか、この三つの要素だと考えていいと思います。

（質問者C）はい。それじゃあ、そういう魂の現世における存在理由っていうのは何なんでしょうか。

（尊師）存在理由は、先程も述べたとおり、その先程言った、非神秘力から始まって、経験の構成、そして識別、それから心の働きと形状・容姿と、まあ段階があるよね、先程説明した。その段階、つまり執着、あるいは愛著というものがこの人間に生まれる要因であるということだね。

　だから、例えばあなたが今人間として生まれているわけだけど、今いろいろ心に浮いてくるそういう愛著をすべて捨断した場合、この人間界に存在する意義を見いだすかどうかといったら、どうかな。

（質問者C）見いださないでしょうね。

（尊師）でしょ。

（質問者C）はい。

（尊師）ということだね。

◉運命をつくりあげるのは日々の積み重ね

（質問者C）それと、日本における最終解脱者が、尊師お一人だとすれば、最終的に他の人たちの魂の向かうところっていうのは何なのかって……。

（尊師）他の人たちも最終解脱に向かってるんです。

（質問者C）あ、それじゃあ、いずれはすべての魂が解脱できるんでしょうか。

（尊師）はい。それを目的としてます。

（質問者C）目的っていうことは、でも、それはやっぱり生きているっていう状態で何らかの努力をしていないといけないわけですよね。

（尊師）あのね、太陽が七つになるって話があるわけだけど、この宇宙が崩壊するときに魂が二分化されるんです。これは仏教で説いていることも同じだし、キリスト教で説いていることも同じだし、あるいはユダヤ教で説いていることも同じだし、そうだね、どの宗教も同じことを説いてるね。もちろん、オウム真理教も同じように説いています。

　その段階で、この破壊されるときに、例えばまだ未成熟の魂は他の宇宙の地獄へと追いやられ、そうじゃない魂はこの宇宙を超えた光音天の世界へと至りますと。いいかな。

(質問者C) あ、それじゃあ、まあ例えば、尊師のお話を聞いて一歩でも解脱に近づけたであろう、例えば地球の裏側で不慮の事故によって死んだ人っていうものはただ不運だったんでしょうか。また、不運だとすれば、解脱は運によって左右されるもので、人間性が反映されないんじゃないかっていうような気がするんですけど。

(尊師) それは簡単だよね。例えば、ここに種があると。ね。この種の中で、どれかはまかれ、あるいはどれかは日干しにあったとしようじゃないか。でも、種の状態のときは両方とも成長する、あるいは花となる可能性があったわけでしょ。で、一方は、それが例えば日光によって完全に焦がされてしまい、一方は花として成長すると。これは何かというと、条件だよね。条件っていうのは、だから縁といってるんだよ。

　で、日本では条件といわず縁といってるからわからないわけだけど、まあ人と縁があるというのはそうではなくて、出会うという条件があったんだというふうに考えたらわかる。

　で、そっから考えると、例えば地球の裏側にいた人はわたしと会う条件になかったと。ところが、君は会ったということだよ。

(質問者C) あ、それじゃあでも、運命論になっちゃわないですか。

(尊師) いや、運命論ではなくて、その運命をつくり上げているものは、わたしたちの日々の身の行ないであり、心の働きであり、言葉の働きなんです。だから、運命論じゃないんだよ。それを、運命をつくっているのは自分たちだから、そういう運命論、固定的な運命論としてとらえないわけだね、仏教は。

(質問者C) わかりました。どうもありがとうございました。

●上座部と大衆部

(質問者D) ちょっとお見受けするところから考えまして、このオウム真理教っていうのは仏教の流れを継いでいるものと考えてよろしいですね。

(尊師) 仏教の流れ、うん、ま、はい、いいでしょう、それで。はい。

(質問者D) そうですか、すいません。そしたら、いろんな仏教の新興宗教がありますね。例えば、鎌倉時代にできた浄土宗とか、そういうものも含めていろいろな流派がありますけれども、それらとは具体的にどこが違っているのでしょうか。そのへんをちょっと詳しく聞きたいんですけれども。

(尊師) まず、お釈迦様の教えというのは原始仏教、しかも、それは、今スリランカに伝わっている経典を最も古いものとします。これはまずいいかな。

(質問者D) はあ、それでいいです。

(尊師) はい。で、その教えを——まあ、仏教には大きく分けて二つの弟子のタイプがいたわけだけど、一つは上座部といって一生懸命学び修行した人たちと、それから、まあ学ぶことよりも、どちらかというと実践によって法を広めた大衆部という二つの流れがあったわけだね。

　で、その大衆部というのは、要するに、上座部というのはただ個人の解脱・悟りだけを求めてという批判を土台として大乗の教えというものを展開していったわけだよ。

　で、例えばその鎌倉仏教など、浄土宗、あるいは浄土真宗等の教えというのは、その大乗部の教えの阿弥陀信仰に属するわけだね。これはいいかな、まずそこまでは。

(質問者D) はい、だいたいいいです。

(尊師) で、ただ、例えば道元が持ち帰った宗教というのは、どちらかというとまあ上座部に属するわけだけど、しかしそれも北伝系の教えであって、上座部の教えの一部を持ち帰って日本に伝えたと。ところが、もともとお釈迦様は完璧な人だったわけだから、そのもともとの原始仏典にはそのすべてが説き明かされていると。つまり、大乗部といわれてる教えも、それからタントラ・ヴァジラヤーナといわれてる部分もすべて上座部の教えの中に含まれるんだというのが、今のわたしの見解なんだよ。

　これは、おそらく世界でもわたしだけが採っている見解だと思います。それはなぜかというと、一般的には南伝に伝わったものイコール小乗という教え、つまり小さな乗り物という教えで否定されてると。しかし、それは日本にその南伝のパーリ三蔵が正確に翻訳されていないがための悲哀であると。

(質問者D) あ、そういう見解で…。

(尊師) ということだね。現に、北伝の最高峰であるチベットにも、その南伝のパーリ三蔵に記されている大乗、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの教えというのは伝わっていないということが判明してるわけだよね。

(質問者D) はい、わかりました。

(尊師) ということだ。

●救いの十三段階

(質問者D) そしたら、もうちょっと具体的な話に落として、いろいろ昔につくられた宗教でしたら、お題目を唱えるだけだとか、それで救われるというものもありましたが、そこのことについて、例えば踊って悟りが得られるとか救いが得られる——題目を唱えて救いが得られるということに対して、尊師はどのように…。

（尊師）いや、それはそのとおりだと思うよ。つまり、救いにも段階があるんだよ。十三の段階があるわけ、救いには。

その一番低い段階は、信を持つ段階と。これは、例えば、要するにマントラを唱えるとか、あるいは題目を唱えるだけで救われるという人たちだね。

で、次の段階が何かというと、要するに裕福な家から家へと――あ、そうだね、その前に、この現象の世界、愛欲の世界に七回転生して救われる、救われるというか最終の段階に至る救われ方と。

それから、家から家へと三回、四回転生して、つまり、豊かな家から家へと、三回、四回転生して――これは人間界ということね――で、救われるタイプと。

それから、人間に一度だけ転生して最終的な段階に至る魂と。

それから、天界に一度だけ転生して最終的な段階に至る魂と。

それから、形状界の最上位である超越頂子天へ転生して、そこから最終段階に至る魂と。

それから、形状界に転生して、そこでまあ修行しながら最終段階に至る魂と。

それから、形状界に転生し、何もしないで最終段階に至る魂と。

それから、形状界にいったん入り、そこから瞬間的にポワされて最終段階に至る魂と。

それから、修行して死に、それから中間状態に入り、で、最終段階に至る魂と。

それから、死後、即意識を移し変え、最終段階に至る魂と。

それから、死後、即最終段階に至る魂と。

で、生きながらにして最終段階に至る魂と。

この十三あるんだよ。だから、その十三のどのパートに属するのか、つまり、この信というのはすごく広い意味が含まれてるから、例えば南無阿弥陀仏とか南無妙法蓮華経――南無妙法蓮華経、これは例えば、妙法蓮華経に帰依しますよという意味があるわけだけど、南無阿弥陀仏というのは、阿弥陀如来に帰依しますよという意味があるわけだけど――そういうマントラを一生懸命唱えることによって信を培い、いずれかの生でそういう真理の流れに入り済度されるとするならば、第一段階の済度の段階ということになるよね。いいかな。

（質問者D）はい。わかりました。

◉原因不明の病気に対して

（質問者E）個人的な話になってちょっと申し訳ないんですけども、今日はわたし、妻とですね、妻の母と来てまして、妻の母がですね、目の病気っていうか、病気と断定されるわけでもないんですけれども、目がちょっと悪くてですね、ふだん集中したりしてるときには非常によく見えるらしいんですが、集中してなかったりとか人と話をしたりとか、そういうときに目が開けられないというかパチパチしちゃうんですよね。

それで、いろんなお医者さんにかかってですね、診てもらったんですけれども、目も全部綺麗だし、病気もないと。要するに原因がわからないというようなことで、今までカイロプラクティックとかですね、いろんなところに行って病を治そうとしたんですけども、結局わからずじまいであると。

で、オウムでもですね、病院持ってますよね。そこで医学というものを検討されてると思うんですけれども、そういう原因不明の病気ですね、こういうものをどうしたらいいのかちょっと…。

（尊師）いや、それについては、意識の緊張が原因だと思いますから、生起のサマディと究竟のサマディ――つまり、精神集中と弛緩のプロセスを繰り返し繰り返し行なうことによって、大丈夫だと思いますよ、それは。

（質問者E）あ、治る…？

（尊師）ええ、治るというよりも病気でも何でもないと思いますから。

（質問者E）あ、そうですか。

（尊師）え、病気だったら大変ですけど、病気じゃないと思いますから、単なる心の緊張だと思いますから。

（質問者E）あ、じゃあ心の状態が正しい状態になれば消えていくということで…。

（尊師）なぜならば、精神集中によってそれが起きるとするならば、つまりふだんの中途半端な緊張状態が続いてる状態から解放されて、集中することによってそれが生じるとするならば、それは明らかにふだんの生活の状態が中途半端な緊張状態であると見るべきなんだよね、それは。だからそれについては、逆にリラックスを徹底的にさせる、つまり集中を強烈にさせて、その後リラックスさせることを繰り返すことによってそれは普通の状態になります、それは。

（質問者E）あ、そうですか。はい、わかりました。どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

◉キリスト教でいう最高の「愛」が仏教の「慈悲」

（質問者F）よろしくお願いします。キリスト教とか仏教でよく――キリスト教では「愛」とか呼ばれまして、仏教

では「慈悲」ということをですね、よくいわれると思うんですけども、それは違いがあるのかどうかということについてお教え願いたいんですけど。

(尊師) キリスト教でいう最高の愛が慈悲だよ、結論からいうならば。つまり、ヨハネとか、あるいはマタイとかが実践した愛ではなくて、キリスト自身がすべての魂のカルマをしょって十字架にかかったと。あの状態が慈悲です、結論からいうならば。で、あれを目的として修行してると。

(質問者F) 仏教の方では、愛という言葉あまり聞いたことないんですけど…。

(尊師) あります。

(質問者F) あるんですか。

(尊師) つまり、四つの偉大なる心の訓練というのがありまして、その第一番目にくるのが聖慈愛です。で、これはどういうことかというと、すべての魂に本当に真理の実践をしてほしいとか、すべての魂に本当に高い世界へ至ってほしいとか思う心、これが愛なんです。

で、二番目が哀れみです。聖哀れみっていわれてるもので、これは例えば真理と巡り合っているのに、それに気づかない魂に対する哀れみとか、あるいは真理を知っていて、それを否定する魂に対する哀れみとか、あるいは、真理の邪魔をする魂に対する哀れみとか、これが聖哀れみといわれるものです。

で、第三番目が、聖称賛です。これは、要するに、自分より徳の優れてる人、智慧の優れてる人に対して、心から称賛する心を培うと。

で、最終的には、第四番目が聖無頓着といわれてる心の働きがありまして、これはいっさいの現象に対して、例えば非難されようが、罵倒されようが、殴られようが、それに対して頓着しないと。そういう修行があるわけだね。

この四つをもって偉大なる心の実践、四無量心といってます。

(質問者F) で、慈悲というのは、キリスト教でいえば…。

(尊師) 一番目と二番目なんだよ。聖慈愛と聖哀れみを合わせて慈悲というんです。慈というのが愛なんです。悲というのが哀れみなんです。

(質問者F) わかりました。

(尊師) はい。

●死後の世界は心・口・行為の悪業の蓄積によって決まる

(質問者F) あともう一つお願いしたいんですけども、あの世の、死んだ、死後の世界ですね、それに天国とか地獄とかよく聞くんですけども、そういうことについての、どういう状況なのかっていうことがわかりましたら、ぜひ教えていただきたいんですけども。

(尊師) わたしも、地獄・天国両方に何度も行ったことあるんだけども、説明をどうしたらいいのかな。こういう地獄がありますよとか、こういう天国がありますよというのか。それとも…。

(質問者F) 天国とか地獄に、死んだらみんな行かれると思うんですけども…。

(尊師) いや、行かないで人間に生まれ変わる魂もいますし、例えば動物へ生まれ変わる魂もいますし、例えば修行することによってそういうものから完全に超越した、高い神々に至ることもありますし。

(質問者F) あ、それはもう、自分が死んですぐにもう生まれ変わるということですか。

(尊師) そうです。だいたいまあ四十九日間と規定されてますけども。

で、これはね、こう考えたらわかるよ。ここに、例えば油の入ってるツボがあったとしましょう。これを水の上に置いといて叩き割ったと。そしたら、どうなるかというと、ツボは下に落ち、ところが油は上に上がるよね。これは、天界に行くパターンです。ところが、例えばツボの中に砂が入ってたと。それを叩き割ったら、そのツボも下に落ちるし、当然砂も下に落ちると。これは地獄へ至るパターンです。

何を言いたいのかというと、わたしたちが日々、身の行為について、言葉の働きについて、それから心の働きについて悟正に生きるならば、先程言った油の状態をつくりあげることができると。その場合は天界であると。逆に、怠惰というものを条件として、もしわたしたちが身の行為について悪業をなし、言葉の働きについて悪業をなし、心の働きについて悪業をなしたならば、先程の砂を蓄積することになるから地獄へ落ちるということだ。

(質問者F) やっぱり、自分の生きてる間のこの心の状況によって変わるということですね。

(尊師) 心と、言葉と、行為です。

(質問者F) で、天国とか地獄に行かれたって先程聞いたんですけども、そういう、どういう人々がっていうか、どういう感じでいるのか、ちょっとわかりましたらお聞きしたいんですけど(笑)。

(尊師) いやあ、それはもう長くなるから……、っていうのは、ものすごい天界も大きいし、いろんな世界があるし、地獄もいろんな地獄があるんです。

(質問者F) あ、例えば代表的なので結構ですので。

(尊師) じゃあ、それが載ってる本(『タターガタ・アビダンマ第一踊品』『真実！六道輪廻』等)を差し上げるよ。わたしが書いたやつを。ね。

(質問者F) わかりました。どうもありがとうございまし

た。

◉植物は第一天界の管轄下にある生命体

（質問者G）生き物の中で植物っていうのはどのように考えたらいいんですか、位置づけというか、そういう…。

（尊師）植物は、第一天界の管轄下にある生命体であると考えてください。それでいいかな。

（質問者G）あ、いいです。どうもありがとうございました。

◉だれにでも解脱はできる!

（質問者H）宇宙のサイクルと、カルパっていうこと言っておられたんですけれども、自分もどちらかっていうと、一応文学部にはいるんですけど、科学的なことで頭がちょっと埋まっていまして、目で見たとかそういう点でかなり縛られているっていう偏見を持っているような人間なんですけれども、十万カルパとか六万カルパとか言っておられましたけれども、それもさっき言われた経典に書かれてあられたんでしょうか。

（尊師）はい、それは経典に載ってるね、それは。

（質問者H）その教えを尊師は広められているということなんですか。

（尊師）わたしもだから、その経典の——まあ、こうしたら解脱するよという教えがあるわけだよね。で、こうしたら解脱するよという教えを実践して解脱をしましたと。わかるかな。

（質問者H）はい。

（尊師）だから、要するに、まあ君たちの側から見るならば同じ穴のむじななんだよ。

（質問者H）同じ穴の…ですか。

（尊師）つまり、ある教えがあって、その教えに傾倒し、実践し、解脱したと。ということは、その経典が正しいということになるよね、わたしにとっては。

（質問者H）ああ、そうですね。はい。

（尊師）絶対ということになるよね。だから、自分で経験したことを説いてるわけだよ。

（質問者H）僕たちのような、まあ凡人——といったらいいのかどうかわかりませんけれども——にも、尊師さまのようになる可能性というのは…。

（尊師）もちろんあります。

『麻原彰晃の世界』PART11 東北大学（91年11月3日）より

◉学校の勉強と修行の関係

（質問者A）僕は高校生なんですけれども、毎日学校とかで勉強していることっていうのは、麻原さんのおっしゃる修行においては意味があるもんなんですか。

（尊師）修行に対して意味があるかどうかというのは、高い知性を有すればそれだけ高い理解力を有することができるわけだから、マイナスであるとは思わない。ただ、教科の内容そのものにもしズレがあるとするならば、それが間違った観念を形成することになるから、そこのところは選択の余地があるということだね。だから、勉強というものを一つの土台として集中力を身につけるということにポイントを絞って勉学に励むならば、決してマイナスではないと思います。

（質問者A）どうもありがとうございました。

◉表層意識・潜在意識・超潜在意識

（質問者B）よく酔っぱらうと意識がなくなる人がいます。例えば、自分がどんなことを話したか覚えてないとか、どうやってうちに帰ったか覚えてないとかいうことですが、それは心理学的に見たらどういうことでしょうか。

（尊師）人間の意識の層は、大きく分けて三層に分けることができます。それは、表層意識、それから潜在意識、超潜在意識といわれるものです。そして、わたしたちが通常〝わたしである〟と考えているものは表層意識であるわけだが、しかし、わたしたちを動かしてるもの、例えば衝動的行為等は、表層意識ではなく潜在意識の影響を受けています。

そして、この酔っぱらっているときには、この潜在意識が活動を始めると。例えば、わたしたちが生まれ変わりをするときの中間状態に入った場合、つまり死から次の生へ至るときの状態、このときにも潜在意識が働きます。つまり、酔っぱらっているときと、その転生を繰り返すときの意識というのは、大変似ているということになる。

今の質問の中で一つ面白いポイントがあるんで、それについて少し説明をしたいと。それは、例えば全く意識していないで例えば家に帰る、あるいは酔っぱらった後にいろいろしゃべるという人がいるわけだが、この人は明らかに他から見れば生きてるわけだし、そしてしっかりと活動してるわけである。

これと同じように、わたしたちの死後も同じ現象が起きると。つまり、表層意識の止滅の後、潜在意識へと移行し、そして死から生へのプロセスのときにはっきりとした意識状態に到達するわけである。ところで、ここで一つ付加しておかなければならないことは、この表層意識が止滅し、潜在意識に入ったとき、それは酔っぱらったときにもそうだが、その潜在意識に入ったとき、その状態というものは、

その人が瞑想体験によって潜在意識に自由に入ることができればはっきりと覚えているものです。よろしいでしょうか。

（質問者B）わかりました。ありがとうございました。

◉マルクス主義と新興宗教

（質問者C）わたしは、この東北大学で、学生運動のはしっこで闘ってる者なんですけど、いわゆるマルキストっていうか、マルクス主義の人たちは、新興宗教っていうのを一般に否定するわけですけど、そんなにも僕自身は、まだ海のものとも山のものともわからないと。それで、どれだけのものを持ってるのかっていうことを、今日ここで少し参考にできればと思って聞きにきました。

それで、今日話されたこととちょっとズレてるっていうか、今日聞きたかったこと、全然話していただけなかったんでズレてるかとは思うんですけど、今日話されたのは個人的な修行による個人の集中力、まあすなわち充実感だとか、そういうふうにいった幸福っていうもんですかね、そういう個人の、修行して幸福になるという、そういう個人的なことしかお話しにならなかったと思うんですけど、僕らとしては社会を対象にしているわけで、僕の考え方では、個人の幸福っていうのは社会体制とは無関係にいられない、社会体制が悪ければ個人の幸福っていうのはあり得ないんじゃないかと、そういうふうに考えてるわけです。

で、例えば、この前っていうか、あまり皆さん知られないかもしれないんですけど、日雇い労働者の方が九月の十七日かに千葉の松戸で、台風の何号かで水が増水してるにもかかわらず仕事を続けろってこと言われて、それで七人が溺死してるんですよね。

で、いったい、オウム真理教っていうか、麻原氏の考え方によっては彼らの幸福っていうのはどうやって得られるのか。で、その問題と僕ら自身の問題っていうか、僕ら自身も日々ね、受験勉強だとかから、まあ僕はもう四年生なんで同僚の連中が全く新聞とか読む暇もないっていう、今、世の中何起こってるのかっていうことさえ知らない、知り得ないっていう、そういうふうな環境に置かれてるわけですけど、この環境を変革することなくして修行だけで果たして幸福が得られるのか、こういうことをお伺いしたいと思います。

（尊師）結論からいうなら、できますと。それはどういうことかというと、まず一人一人の意識革命がなされない限り、全体の革命はできないとわたしは思うんだけど、それはどうかな。つまり、社会的にいかに今の権力とぶつかり合ったとしても、それははっきりいって、ものすごい力対小さな力のぶつかり合いで、結局もみ消されてしまうと。それだけではなくて、社会は多くの情報を流す権利を与えられていると。

よって、例えばあなたの思想が正しいとしても、その思想が日本全体に浸透することはなかなか難しいと。ところがだよ、ここに、もしその個人個人が意識革命していって、例えばすべての魂のために生きるんだという、まあこれは大乗の思想という思想があるわけだけど、そこに根づいた場合、つまりそれに気づいた場合は、その人たちは少なくともその周りの人たちに対して、何らかの干渉、干渉という言葉は正しくないね、何らかのいい影響を与えることができると。そして、その個人個人がそういう形で変化しない限り、今の物質社会からより高度な社会形態への以降はできないと考えるわけだけど、それについてはどう思いますか。

（質問者C）いや、そのとおりでしょう。

（尊師）うん、だよね。だから、例えば今実際のところ、ロシアが求めてるものは宗教なんだよね。で、なぜ宗教なのかというと、マルクス主義が一応崩壊したと。で、理想社会をつくるためには、どうしてもそれを支えるだけの偉大な宗教が必要であるということをいってるわけです。まあ実際に、いくつかの教団が入り込んで布教を始めてるわけだけど――まあもう少ししたらおそらくオウム真理教もそうなると思いますが、それは先程言ったとおり、結局個人個人、一人一人が高い意識状態、要するに神の意識状態に至らない限り、この世の中を神の世界に変えることはできないんだということなんだよ。

だから、例えば、その先程の労働者七人の方、これは確かにかわいそうな方だと思います。しかし、そういう問題というのはたくさんあると思うんだよね、日本では。どうかな、それは。

（質問者C）まあ、それはたくさんありますけど…。

（尊師）だよね。つまり、一つずつ、それに対して対処していらっしゃる方々っていうのは、確かに犠牲的な精神を持ってそれはそれで素晴らしいと思います。しかし、オウム真理教の方向性というのはそうじゃなく、一人ずつがそういうことに対してしっかりと考えられる智性だとか、あるいはそういう現象を起きなくするようなそういう力とか、智性とか得るために修行をしてるんだというふうに考えてください。そして、その方がわたしたちは早いと考えてるわけだよ。理解してもらえるかな。

（質問者C）まあ、麻原氏が社会変革ってことも目指してるってことをまあ言われたんで…。

（尊師）それでね、あなたに、わたしの弟子、これはよく知ってるアパーヤージャハという、青山弁護士という人がいるわけだけど、その人が『理想社会――共産党宣言から

真理へ』という本を書いています。その中に、共産主義に対してオウム真理教はどのようにとらえてるのかということがしっかりと書かれていますから、それをわたしの方であなたに差し上げますので、それを読んでください。よろしいでしょうか。

(質問者C) ありがとうございます。

●宗教、そしてオウム真理教の目的

(質問者D) オウム真理教の目的は何であるのか、また、キリスト教、仏教、ヒンドゥー、イスラム、ラマ教等々の宗教を否定したところにオウム真理教はあるんでしょうか。

それとですね、宗教とは何であるのか。人がまだ動物というか、獣の域を出ないうちは神や仏といった思考は浮かばなかったはずで、その時代、動物たちの恐れの対象は自然の力でしかなかったわけで、それがいきなり脳の容積が大きくなって思考が深い領域まで入っていくようになったからといってなぜいきなり神仏の登場の必要があったのでしょうか。そのへんをお聞きしたいんですが。

(尊師) まずオウム真理教は、すべての宗教――ま、といっても、一つの流れに属する宗教は肯定しています。で、オウム真理教の目指しているものは何かというと、それらの中に統一性があるはずであると。そして、その統一された部分こそ真理であるというふうに考えてるわけだね。

というよりも、別の見方をするならば、オウム真理教の教えというのは、今から二千五百年前にお説きになった釈迦牟尼の、サキャ神賢の教えこそすべての教義を内在しているというふうに考えてるわけです。で、それを証明しようとしてるわけだね。で、これが、だからオウム真理教の存在であると。

で、じゃあオウム真理教の目的とは何かというと、要するにその教義体系というものは、現実に可能な、わたしたちを人間から神にし、そして――まあ、仏陀というのは実際あるステージであるから、ここではそれを包含する概念として、十の力を有する魂という言葉を使いますけども――この十の力を有する魂へと人々を変革していくことを目的としていますと。

で、次の段階で、なぜ動物から人間へ移行したとき云々ってあるわけだけど、ここで一つ疑問があることは、人間の、例えば大脳イコール、生命体において最高の容積じゃないわけだよね。それはあなたも知ってると思うけども。例えばまあ、クジラの大脳の容積は当然人間よりも大きいわけだし、あるいはサル系統の中にも人間よりも大脳の容積の大きいものはいますと。

で、そこから考えると、大脳の容積の変化によって生じたのではないと。で、これについては魂の落下のプロセスを正確に説き明かした『創世期経』という経典があります。で、その経典を現代的にわかりやすく説き明かした『創世期』(オウム出版)という経典がありますので、それを差し上げますので読んでください。

それによって、魂がどのような形で落下したか、というのはね――笑ってるけど、それ一つ説明するだけで一時間以上かかっちゃうんだよ。だから、それをここで答えちゃうと皆さんに迷惑がかかるでしょ。それで、ね、差し上げますから、それを読んでください。ということだね――そうすることによって、もともとわたしたちは高い世界にいたにかかわらずこうやって落ちてきてるわけであって、で、よって、ふと気づいたときにまた元の、ちょうどそれは先程、ね、質問にあったように酒を飲んだときに自宅に帰るのと同じように、ふと気づいたときに、いや、このままではいけないと。元いた自分の高い世界に帰りたいという、ね、心が生じてそちらの方向に向かうわけだね。いいですか。

(質問者D) ああ、いいですけども、誤解されていた部分があったので、大脳の容積が増えたからといって、神仏が登場したっつうわけじゃなくて、思考がより何ていうかな…。

(尊師) 高度になったということでしょ。

(質問者D) ええ、そうですね。そういうことです。

(尊師) うん。

●精神と物質の違いと共通点

(質問者E) 精神と肉体っていうか、物質との違いと、共通する点をわかりやすく話していただきたいんで。

(尊師) はい。それは、その話をする前に定義を述べておかなければならないと。それは、大きく世界を分類すると三つに分けることができると。それは、先程も述べた、心だけでできあがっている世界と。それから、例えばあなた方が夢で経験するように、形はあるのだけども触れることができない、あるいは触れたとしても実体のない身体と心によってできあがっている世界と。そして、この世の中のように、粗雑な元素と心と、それから先程述べた幻影の身体と三つを共有している世界。この三つがまず存在します。

そして、まずこの粗雑な世界から説明をするならば、この粗雑な世界を五つのカテゴリーに分類します。それは、第一のカテゴリーが、固体、つまり固形だね。第二のカテゴリーが液体と。第三のカテゴリーが熱元素と。第四のカテゴリーが、そうだね、風、空気――まあ空気といっても気体成分と考えた方がいいだろう――で、第五のカテゴリーが空間と。この五つの要素によって形成されていると。

例えば、人間の肉体を見るならば、骨というものは固体に属するし、例えば血液は二番目の液体のカテゴリーに属

するし、例えば体温を発生させるもの、これは火のカテゴリーに属するし、例えば呼吸は風、気体のカテゴリーに属するし、例えば鼻孔とか口腔とかいわれている空間、これはすべて空のカテゴリーに属すると。

　そして、これらの五つの要素と、そして内なる幻影の身体と、心の構成要素――まあ、この心の構成要素というのは、感覚を生起させるもの、つまり感覚を生じさせるものと、それからイメージを生じさせるものと、それから経験によって次の行動を起こさせるものと、そして識別、つまりいろいろと判断を加えさせるものと。この四つ――が存在していると。

　で、この物質的な元素、この固体、液体、熱元素、そして気体元素、そして空間。これらは、三つの要素から構成されていると。その三つの要素とは何かというと、熱の要素、そして振動の要素、そして光の要素と。この三つから構成されていると。この熱の要素、振動の要素、光の要素、これがすべての物質の根本であるというふうな考え方を持ってるわけだね。

　で、第二の世界、より深い世界に入ると、先程述べた心の構成要素、感覚から識別に至るまでの要素と、それから形状しかない世界に入るわけだけど、ここでは熱の要素が完全になくなり、そこに存在するのは光の要素と振動の要素によってできあがった形状と、そして心の構成要素しか存在しないということになると。

　そして、最も深い世界、最も心の本質に近い世界は、その振動の要素がなくなり、光の要素、この光の要素によって心の構成は形成されてるわけだけども、その光の要素のみが存在すると。

　そして、最終的な段階では、その光の要素も存在しない状態へ至ると。

けれども。

（質問者E）は、はい。いや、といいますか、ただ単純に、浮きますよね、なんかテレビとかで見ると。その、精神が肉体に作用するっていうことは、ある程度相互作用があるということは、共通点がなければならないと思ったんです

（尊師）いや、だから先程言ったとおり、心の本質が、そのどの要素に影響を与えるかということなんだよ。先程三つ、三つを五つに分けたわけだけど、その三つ、あるいは五つをどのような形にしろ影響を与えることができると。

　例えば、ここは東北大学だから、あんまり神秘的な話をしても皆さん信じないとわたしは思ってるんで、それで、実はかなり、ね、下がって話をしてるわけね。下がって話をしてるっていうのは、学問的に話をすることによって、今日のところはわたしの役目はそれでいいんじゃないかと。っていうのは、深く突っ込んで学びたい人は、いろいろなオウムの出版物があるわけだし、それは入信すれば済むことだから。

　というのは、もともとここで講演を行なうということは、布教活動をしてはいけないと。で、布教活動をするとするならば、それは今回担当してくれた、オウム真理教の、この大学にいる信徒さんに大きな迷惑をかけることになるんで、それでわたしとしては下がって話をしてるんだよ。

　だから例えば、ね、制約のないところでやるならば、もっと具体的な話ができるんだけども。例えばだよ、まあ例を挙げるならば、わたしが君たちの額に手を触れただけで、君たちの火元素、あるいはエネルギーの流れは変わってしまいますよと言っても信じないでしょ。でも、これ実際、先月の終わりに二百五十名ぐらいに対して行なったわけだけど、ほとんどの人はその体験してるからね。

　だから、そういう具体的な話をすると布教活動になるから、だからやりたくないわけだよ、わたしとしては。約束は守らなきゃならないと。

（質問者E）あ、じゃあ、どうもありがとうございます。

（尊師）ごめんなさいね。

●オウム真理教の理想像

（質問者F）オウム真理教の理想像とはどういうものですか。

（尊師）いや、それはすべての魂が神になることだよ。そして、神を超えて、先程言った十の力を有する魂へと至ること、これが理想です。で、そのために、例えば一人で、ね、活動したとしても社会的に広がりがないので、教団というものを作って、その教団の組織的な力によってその教えを浸透させようとしていますと。

　で、理想としては、その教えがすべての魂に浸透すればそれは理想です。よろしいでしょうか。

（質問者F）どうもありがとうございました。

（尊師）はい。

「麻原彰晃の世界」PART12より

●真我が三グナに巻き込まれた理由

（質問者A）十二縁起の無明と行について質問します。まず、無明とは、未熟な真我が独存位の状態から三グナに巻き込まれてしまったことと説明されています。ということは、三グナに巻き込まれてしまった真我というのは、集中力が足りずに三グナという雑念に巻き込まれてしまって、苦悩の世界に巻き込まれてしまったと見てよいのでしょうか。

（尊師）それについては、「マハーヤーナ」で何度も説明

していると思うけどな。どうだ。比喩を使った説明が何度もあると思うけど。M君は、質問はするけど、教学ができてないんじゃないか。

（質問者A）あ、すみません。

（尊師）例えば、その内容については、こういう比喩が一つあるよね。もう、わたしは結婚はこりごりであると思ってる人がここにいたとしましょうと、ね。ところが、ね、別れた奥さんより、もっと素敵な女性が現われ、その人の好みだったら、心はどう動くだろうかと。でしょ。当然、そこへもう一回誘惑されたら巻き込まれてしまうと。わかるかな、言ってることは。だから、未熟な魂といっているんです。そういう形で、無明から行へと落ちていくんです。

（質問者A）それから、行についてお聞きしたいんですけれども、行というのは、コーザルに落ちた真我が身・口・意の行ないを始めると説明されていて、この点でちょっと疑問に思ったんですけれども、コーザル世界は意識だけの世界なのに行の中に口の行ないと身の行ないが含まれているのはどうしてでしょうか。

（尊師）例えば、ここに透明な磨りガラスがあったとして、それに赤色を塗ったらどうなりますかと。あるいは、緑の色を塗ったとしたらどうなりますか。あるいは、白色を塗ったらどうなりますか。赤は赤として映り、緑は緑として映り、白は白として映るんじゃないか。

（質問者A）はい。

（尊師）つまり、君の中には、コーザルを物質であると、まあ考える無智があるわけだね。まず一つ言っておきたいことは、三つの世界観については、知識で入れるんではなくて経験をする必要があると。例えば、どういうことかというと、先程言った、わたしの誘惑の話。この誘惑の話を理解しようとすれば、今の質問は出ないはずなんです。あるいは、今のわたしの透明なガラスのたとえを理解しようとするならば、そういう質問は出ないはずなんだよね。つまり、真我はどこにあるかといったら、コーザルにあるんじゃないの、絶えず。どうですか、それは。例えば、真我はこの肉体のどこにありますかと。どこにありますか。

（質問者A）わかりません。

（尊師）真我は、肉体の心臓にあるんじゃないの。心臓のコーザルにあるんじゃないか。

（質問者A）ああ、『生死を超える』には、そう書いてあります。

（尊師）ということは、落ちたという表現の裏側に何を意味するかというと、その真我のコーザルの分化した意識が、他の例えばアストラル、あるいはこの現象界の肉体、粗雑な、ね、物質を、要するに我と錯覚し、この肉体を形成してる状態と考えるべきじゃないのか。

（質問者A）あ、はい。

（尊師）ということは、行ないというのは、身・口・意の三つの行じゃないのか。

（質問者A）はい。

（尊師）ということだ。

（質問者A）はい、わかりました。ありがとうございました。

（尊師）ところがね、今わかりましたと言って、じゃあ説明しなさいと。説明できるか、君は。

（質問者A）言葉の上でだけわかったということで、その本質というものは理解できません。

（尊師）ということは、もっと土台の修行を一生懸命やりなさい。

（質問者A）はい、わかりました。ありがとうございました。

（一九九一年一月二十二日　阿蘇・シャンバラ精舎）

『麻原彰晃の世界』PART20
横浜国立大学（92年11月7日）より

●カタストロフィーは人類のターニングポイント

（質問者A）先程、カタストロフィーの話が出てきましたけれども、人類のうち九割が滅ぶとして、そのときに……。

（尊師）わたしは、人類のうち九割が滅ぶとは言ってないよ。都市部がそうなると。

（質問者A）はい。

（尊師）これは仏典にもうたわれているけれども、そういう災いが起きたときには、山に逃げ込みなさいと。そして、山にある木の深い根っこを食べなさいというのが『転輪獅子吼経』という、お釈迦様がお書きになった経典の――これは後期の経典だけれども、それにうたわれています。ということは、山に逃げ込んだ者は生き残るということです。

（質問者A）そのときに生き残るということは、どういう意味を持っているとお考えですか。

（尊師）これは仏典の引用をすることによってその答えとさせていただきたいんだけど、それまでの過ち多き人生を、その生き残った人たちは悔い改めると。そして、それによって戒律を守るようになり、一つずつ戒律を守るようになり、それによって人類が発展的になり、寿命が延び、幸福になるとうたわれています。

（質問者A）それを実践できる可能性の高い者が生き残るべきであるというふうにお考えですか。

（尊師）いや、要するに、実践できるできないは関係なく、そこでのカルマの力によって、必ず選択が起きるんじゃないかとわたしは見ています。

(質問者A) はい。わかりました。ありがとうございます。

●幸福実現のカギ――悟りと解脱

(質問者B) 悟りや解脱というのはなぜ必要なのですか。

(尊師) あなたの工学部での専門はなんですか。

(質問者B) 機械ですけど。

(尊師) 例えば、歯車があったとしましょうと。で、例えばこの歯車の働きについて、もしあなたが滑車の原理を理解していなかったら、その歯車の設計を行なうときに、正しい設計はできますか。

(質問者B) できはしません。

(尊師) それと同じように、例えばわたしたちが、今生だけではなく、これから未来際において、幸福な人生を歩くとするならば、当然その原理を知る必要があります。どうかなこれは。

(質問者B) 運命にまかせるだけじゃ、幸福になれないのですか。

(尊師) じゃあ、もう一度歯車の話に戻しましょう。あなたが、自分はこれがいいんだと思って歯車を作ったとして、あなたの中にそういう機械工学を支える理論が全くないとした場合、それは機械としての機能を果たしますか。

(質問者B) なんかちょっと、簡単なのか難しいのかよくわからなくて、ちょっとよくわからないんですけど……。

(尊師) いや、だから答えてくれればいいんだ、それに。質問に。そうするとあなたの今の疑問が解けますから。

(質問者B) あ、じゃあ原理をわかっていないと幸せになることはできないっていうことですか。

(尊師) つまり、あなたが考えたとおりの機械を作ろうとする場合、その前に完璧な設計図が必要だよね。どうかな。

(質問者B) そうですね。

(尊師) だよね。そしてその設計図だけではダメで、例えば一つ一つの機械工作に対して正確な工作技術が必要だよね。どうかな。

(質問者B) そうです。

(尊師) そして、最後にそれをしっかりと組み上げて、初めてあなたの考えた物ができあがるよね。もちろん、その図面を引く前に、当然その図面を支えるための理論が必要だよね。つまり、この機械の用途はこうであると。そして、一つ一つのパーツはこのような形で使われると。どうかな。

(質問者B) あ、わかりました。だいたい、おっしゃりたいことはわかるんですけれども、僕は幸せっていうのは「こうでなくてはいけない」っていうヴィジョンがもともとなくてはいけないものだとは思えないんですけれども。

(尊師) いや、それはそれでいいと思うんだよ。つまりあなた自体が、「わたしの考え方はこうである」と。

(質問者B) そうです。

(尊師) だから別の言い方をすれば、「『こうじゃなくちゃいけない』っていうものはないんだ」ではなくて、あなたの中にあるんじゃないだろうか。つまり、「自分の思うとおり生きることが幸せである」と。どうかな。

(質問者B) ああ、なるほど。そうですね。

(尊師) そして、自分自身の価値こそがすべてであると。どうかな。

(質問者B) そこまで傲慢じゃないですけれど。

(尊師) うん。でも近いよね。でしょ。

(質問者B) それは納得できません。

(尊師) 納得できないか。だとするならば、じゃあこういう説明を最後にしましょう。

例えば、わたしは機械について何も知りません。したがって、わたしが機械の図面を引くときどうするかというと、機械の知識のある、例えばあなたのような人に質問をしながら、図面の構成要素について検討をして作ることになるでしょう。そして、目的としている最高の機械を作り上げることができると。ところがもし、わたしが単なる趣味で、つまり、用途とかはどうでもいいんだと。ただ自分のそのときそのとき思ったとおりの部品を作って、もしそれが組み上げられるなら、それでその機械は満足であると考えるならば、それはそれでもいいと思うんだよ。

しかし、もしそうではなく、用途があって、スペックがあって、その二つについて、しっかりと満たそうとするならば、まず一つ一つのパーツをしっかりと用途に合わせて考え、図面を引き、そして組み上げていくと。つまり、あなたの中の、最高の幸福を求めるか求めないかがポイントであるということだね。

(質問者B) わかりました。

(尊師) はい。

●一人一人が悟りを得るために

(質問者C) 初歩的でつまらない質問になるかもしれませんが、麻原彰晃尊師は「解脱」ということを目指して、いったいどのような存在を目指されているのかということと、仮にその絶対的な神というような存在に近づくことによって、罪を背負っているすべての存在を救えるのかというのが一点と。

(尊師) じゃあ、まずその第一点目からお答えしましょう。

(質問者C) お願いします。

(尊師) すべての魂の罪をしょうことは、これは例えばイエス・キリストでもできなかったし、それからわたしでもできません。しかし、そこへ至る道を示し、そして、そこへ至るためのデータを相手にインプットすることはできま

す。

これはどういうことかというと、例えば、工学部だったら一番わかりやすいコンピュータがここにあるとしましょう。で、そのコンピュータの、例えば、画面とキーボードの部分とコンピュータの本体と、それからハードディスクの部分があったとしましょうと。で、これを相手に与えただけで、相手はコンピュータを使えるようになるかというと、そうではないと。そこには当然、マニュアルの提供か、あるいはじかにそのコンピュータの使い方を伝授する必要があると。そしてそのどちらかによって、コンピュータの機能を理解した人のみが、コンピュータの恩恵を得ることができると。

で、同じように、例えば絶対的な状態に至らない者が、絶対的な道を説けるのかという問題があると。つまりそれは、先程のコンピュータの例に戻すならば、コンピュータのユーザーとしての達人、あるいはプログラマーとしての達人、あるいはハードの開発としての達人だったならば、そのパートについては、相手に伝授することはできると。これはどうでしょうか。

（質問者C）どうもありがとうございます。二点目なんですけれども、仏陀釈迦牟尼といわれている存在が、もう二千六百年も昔に解脱されてますよね。で、聖者とかそういうふうにいわれている人は、何千年、何万年も前に解脱されていて、そういう人は少なからずその――キリスト教的に言えば「創造主」とかそういう存在になっているはずだと僕は思うんです。

それなのに、いまだに人間界とか地獄界とか、そういういろんな世界が実際に存在して、そこに救われない魂がいっぱいいて、それをどうしてそのまま放置しておくのかというか……。絶大な力ですべてを救ってしまったら、もっと簡単に解決するのにと、僕はこう短絡的に、そう感じるわけですが。

（尊師）それは不可能なんだよ。なぜ不可能なのかというと、例えば、あなたが輪廻転生をするとき、つまりあなたが生まれ変わるとき、どのようなプロセスをたどるのかを検討してみたらよくわかる。

つまり、あなたが来世を決めるときは、あなたの意識によって決定するんです。それはちょうど例えば、ここに一番わかりやすい例を挙げるならば、ラーメン屋さんと、それからそば屋さんと、スパゲッティ屋さんがあったとしましょうと。そして、例えばあなたがラーメンが非常に好きだとするならば、他の人が「そば屋やスパゲッティ屋に行こう」と言っても、そこにいったんは行くかもしれないけれど、またラーメン屋に入るだろうと。で、これが、俗にいうところの、「経験の構成」を背景として輪廻転生を繰り返す、つまり経験の構成とは、あなたの意識の中に、自分はラーメンが好きであるという経験が完全に根づいた状態で、ラーメン屋に入るということの裏づけなんだね。

で、例えば、地獄へ行く魂、あるいは動物界へ転生する魂、あるいは低級霊域へ転生する魂――わたし自体は、六道すべてを経験しているわけだけれども――その魂の本質的な経験の土台となるものは何かというと、先程述べた、例えば地獄へ至る魂というのは一般的には、自分の仇なす者、つまり自分の敵対する対象が現われて、その対象を殺してしまおうと思って、そこで怒りが生じ、そして、邪悪な心が生じ、それを追いかけてそのまま地獄へ転生するというパターンが普通なんだね。

ということは、一人一人の心が、完全に成熟し、そういう心の働きそのものが、マイナスであることを理解するではなく、悟る――つまり理解というのは、頭の中でただ単にわかると。しかし悟るとは、それが行動に影響を与え、その自分のけがれた心の働きが、止められるようになったときに、初めて救済は成功するんだよ。

ということは、わたしたちが自分自身の意識を完全に放棄する状態があるならば、偉大な覚醒者であられる、例えばサキャ神賢や、あるいはその前に登場なさった、カッサパ真理勝者や、あるいは、コーナーガマナ真理勝者や、あるいはカクサンダ真理勝者等々の登場により、もうこのカルパは、偉大な真理勝者が四名出ていらっしゃるから、その真理勝者方によって救済されたはずなんだね。しかしそれができないというのは、わたしたちはわたしたちの意識を、わたしたちだと思っているし、経験をわたしたちだと思ってるし、感覚をわたしたちだと思っていると。あるいはイメージをわたしたちだと思ってると。そしてそのけがれによって、わたしたちはこの、苦しみの愛欲の六つの世界を流転し続けなきゃならないんだ、ということなんだよ。わかるかな、言っていることは。

（質問者C）ああ、わかりました。

（尊師）ということだ。

●未来を開くのは東洋哲学

（質問者D）最近UFOが話題になっていますが、知的生物の文明の発達を突き詰めていくとUFOを作ることはできるのだと僕は思っています。今、地球上で発達しつつある人類は、確かにテクノロジーを進歩をさせてはいますが、光速不変の原理と恒星間旅行が不可能であるという限界も示されています。

西洋的原理が現代のテクノロジーを発達させてきたのでしょうが、どうにも今ある科学技術そのものが限界にきているように思えます。人類がUFOを開発できるためには、

東洋的原理が必要なのか、このまま西洋的原理の追求が必要なのかを教えて下さい。

（尊師）これは非常に重要な問題だと思います。というのは、あるドイツの研究家が、ヒトラーは亡くなっていないということを一九八〇年代に発表しました。わたしもその内容について大変興味深く読まさせていただきました。そして、ドイツの研究――まあわたしもいろいろやっているわけですが――その中で、ヒトラーはチベット仏教と大変深い関係があり、第二次世界大戦の終わりに、ドイツの首都ベルリンでチベット僧約二千人ぐらいが輪になって死んでいたということを読んだことがあります。で、実際問題として、ヒトラーの死体は偽物であったという発表をドイツの一般誌がしています。これは一九九二年にだけどね。で、ヒトラーたちの研究の内容は、UFOの研究もその中の一つであったといわれています。

　とするならば、もともとドイツ人の集中力、それと同時に仏教的な考え方、もちろんこの仏教的な考え方のスタートは、インド・ヨーロッパ語族の宗教、つまり今の中東、あるいは中東の前のエジプト、その前の今存在しているかどうかわからないといわれているムー文明等の流れを汲む教えがあるわけだけれども、その教えの延長線上に、新しい未来を開く考え方、思考パターンが存在しているんだというのがわたしの今の意見です。

（質問者D）もう少し簡単にお願いしたいんですけど。ちょっと、頭が悪いもんで。

（尊師）いやいや、そんなことは……。つまり、あなたの質問に対して、ズバリ答えるならば、今存在している東洋の哲学があるよね。つまり、西洋哲学、キリスト教を背景とした哲学ではなく、東洋の哲学でなければ、今の枠組みを超えることはできないというのがわたしの考え方です。

（質問者D）じゃあ、僕は工学部にいるんですけど、これからテクノロジーの開発とかに関わっていくんですけれど、いかがしたらよろしいでしょうか。

（尊師）あの、まあ笑ってるけれども、例えば、マンジュシュリー正悟師、今、質問を受けた彼も、宇宙物理学を大阪大学でなし、そして大学院まで出られた方だし、それから今日は、東京大学の理学部の大学院を卒業した彼らも来ていますし、それから早稲田大学の理工学部の博士課程を進んでいる弟子もいますけれども、まあ彼らはオウム真理教の東洋的な哲学を背景として、例えば素粒子理論等をより発展させたいと考えて、研究とそれから瞑想にふけっているわけです。よろしいでしょうか。

（質問者D）あの、僕はそんな東工大とか東大とかそんな……、横浜国大ですからそんなに頭良くはないんですけど。

（尊師）いや、それは関係ないと思うね。何をいいたいかというと、それは明らかに大学のコンプレックスであって……。

（質問者D）じゃなくて普通の、僕たちぐらいのエンジニアが、どうやって技術の開発というかそういうところに、オウム真理教じゃないですけれど、宗教的な面を活かしていったらいいかってことを聞きたいんですけれど。

（尊師）それについては、まず「現象をいかに正しく見るか」ということがポイントになるよね。つまり、何をいいたいかというと、ある実験があったとして、その実験に対しての評価は個々違うでしょ。これはどうかな。例えば、実験結果を正しく自分のものにした人が最も早く最終地点に到達するとわたしは思います。つまり、それは観察に対して正しくその観察をする力、理解する力を身につけることじゃないかな。

　で、そのためのテクニックとして――まあテクニックという言葉は悪いんだけども、要するに、例えば「ザンゲの瞑想」とか、いろいろな心をクリアにする瞑想体系があることは事実です。今日はとにかく、この後皆さんに、特別な呼吸法と瞑想法を伴ったものを伝授しますから、それをまず実践なさったらどうでしょうか。

（質問者D）はい。

●既存の価値観を転倒させるオウム真理教の教え

（質問者E）麻原尊師はこのようにして、オウム真理教という宗教団体を主宰しておられますが、日本にはその他にも数知れぬ宗教団体が存在しています。で、それぞれの宗教団体に入っている方々は、それぞれ各々の宗教を真理と信じていらっしゃるんだと思います。このオウム真理教の教えというのは基本的に麻原尊師がみなさんに広めていらっしゃるものだと思うんですが、このような真理をどのようにいったいお知りになったのか、また、他の宗教団体の教え等に関してはどのように考えておられるのか、論理的な説明をしていただけるとありがたいんですが。

（尊師）まず第二の点から話をしたいと思います。第二の点の、他の宗教に対するわたしの考え方は、大きく分けて三つのカテゴリーに分かれます。

　第一番目は、宗教的教えによって現世の利益を得る教えである。第二番目は、宗教的教えによって来世、幸福に至るための教えであると。第三の教えは、来世だけではなく、永遠に、つまり最終的には「不死」を得る教えであると。この三つのカテゴリーに宗教団体の教えというのは分類されるとわたしは考えています。

　で、日本の場合、だいたいこの一のパターンがほとんどではないかと。で、まあキリスト教の場合は、この二番目に属し、そして仏教の場合はこの三番目に属するというのがわたしの考え方です。まず、第二の点についてはよろし

いでしょうか。

（質問者E）はい。

（尊師）それから第一の点については、例えばわたしの場合、三歳ぐらいから俗にいうところの魂の抜け出し――これは幽体離脱とは違うんだけれども――が起きていました。で、これは何を意味するのかというと、要するにこの人間の肉体そのものが絶対的なものではないと。人間の人生そのものは絶対的なものではないという精神的なバックボーンになる準備をしていたということがいえるでしょう。

そして、いろいろな人生の苦しみ――この苦しみというのは二つの点から苦しみがあるわけだけれども、わたしの一つ前の生というのは、人間の世界ではなく、俗にいわれているところの、神々の世界といわれている天の世界だったわけだけれども、そこに比べると、この人間の世界は寿命も非常に短いし、それから病も多いし、それから、食い物もうまくないし、まあいろいろと喜びがないという意味での苦しみ。これをずっと、経験し続けていたと。で、ある時期、そういう苦しみだけではなく、この人生における一般の人間の苦しみも集中的に現われ、それに対して、どのような解決をするかという点にぶつかったと。

それに対して、まあわたしの採った方法というのは、まず日本の既存の仏教的な教え、あるいは密教的な教えを徹底的に学びました。だから、おそらくほとんどの日本の宗教については、どの宗派、あるいはどの密教についても語ることがわたしはできると思います。で次に、中国・インドの仙道的なもの、ヨーガ的なものを徹底的に究明したと。もちろんこの日本の教えの中には当然、例えば増谷文雄先生の『阿含経典』や、中村元先生の『原始仏典』等も含まれています。

しかし、わたしの中では、どうもそれらのすべての教えに納得がいかなかったというか、これでは最終地点に行けないなという直観が絶えず随従していたと。で、最終的にはチベット仏教、そしてスリランカのテーラヴァーダ仏教に到達し、これは人間界における教えのすべてではないかなということを、そこでわたしは感じとったということだね。

（質問者E）あ、よくわかりました。そこで質問があるんですけれども、先程、麻原尊師は、日本のほとんどの宗教団体は現世利益を追求するものが多いとおっしゃってたんですが、僕も実をいうと来世が存在するということは、個人的には信じていないんです。で、一応、死ぬまでの人生ですね、自分の可能性をできるだけ活かしたいというのがあって、僕自身はお金とか権力とかそういう世俗的な幸福というのをある程度求めたいというのが僕の人生観としてはあるんですが、そういう考えについてはどうお考えでしょうか。

（尊師）あの、まあそれはそれでいいんじゃないだろうか。

（質問者E）あ、そうですか。

（尊師）というのは、例えばだよ、ここに盲目の人がいたとして、その世界の全体が見えない場合、その人は、その盲目の状態なるがゆえに、その人の価値観を決定する。どうかな。例えば、触覚による自分自身の経験等がその人の価値観の基準となると。これは仏典では象のたとえとして表現されているわけだけれども。

盲目の人が例えば五人、象をいじったと。ある人は鼻をいじったと。ある人は足をいじったと。ある人は尾っぽをいじったと。ある人は耳をいじったと。ある人は胴体をいじったと。で、この盲目の人たちは、象に対しての印象をどう言うかというと、ある人は柱のように大きなものであるとか、ある人はホースのようなものであるとか、ある人は平べったいと、まあいろいろ言うだろうと。ね。だからそれ以上の経験をさせない限り、価値観を転倒させることはできないんだね。どうかな。

で、その価値観を転倒させるための実践、それがオウム真理教の教えなんだよ。

（質問者E）あ、なるほど。よくわかりました。

『麻原彰晃の世界』PART20
大阪大学（92年11月2日）より

●予言と解脱の関係

（質問者A）今の運命学（注・麻原尊師が編み出された「大宇宙占星学」のこと）のビデオ見させていただきまして、いろいろな予言をしておられることがわかりました。あらかじめわかるのであれば、これからもいろんな事件が起こると思うのですが、それらのいっさいに対して、特に大きな事件に対しては、初めから忠告していただければ、今後いっさいそういうことはなくなると思うんですけれども、そういうことはしていただけないのでしょうか。

（尊師）例えば、『滅亡の日』の中に、ロシアの崩壊が予言されています。これは一九八八年に書いた書籍です。しかし、実際問題としてロシアは崩壊してしまったというのがあります。何を言いたいかというと、個人のポテンシャル、あるいはアビリティ、つまり潜在的な力や具体的な能力では解決できない問題が多々存在します。したがって、わたしはわたしのレベルで、予言については全力で皆さんにお知らせしているわけです。

例えば、例を挙げるならば、「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」というラジオ放送が夜の十時十五分から一四七六キロヘルツでありますが、その中で、土曜日ね、

「ノストラダムス秘密の大予言」を行なっています。これはノストラダムスの予言詩を解読し、わたしのコメントを入れています。こういう形で、皆さんに、これからどういうことが起きますよという、メッセンジャーの役割を果たさせていただいていることは事実です。よろしいでしょうか。

（質問者A）遠い未来じゃなくて、今年もいくつか事件がありましたけれども、例えば電車が突っ込んでしまって。そういう電車をあらかじめ教えていれば、そういう事件はいっさいなくなると思うんですけど。

（尊師）うん。確かにそれはそのとおりです。時間をね、例えば二十四時間すべて予言に充てさせてくれるんだったら、それも可能だと思います。

つまり、わたしの行なっている活動というものは、多岐にわたっていまして、よってその中の重要な部分だけをみなさんにお知らせする以外に、今のわたしのこの体の状況からみると、不可能であるということがいえると思います。

（質問者A）解脱しても、そうでない人々も、核戦争に巻き込まれて死んでしまったりするんでしたら、それは早い話が、泳ぐ方法を教えているんじゃなくて、溺れて死んでも苦しまない方法を教えているだけに当たるんじゃないですか。

（尊師）うん。賢い質問だと思います。ただし、解脱そのものの意味を知らない質問であると同時に、あなたの今知っているレベルにおいては賢い質問だというふうに訂正させてもらいますが。

内容としましては、解脱はこの肉体から離脱し、そして自分の来世を経験したり、あるいは自分の行為の結果を経験したりする身体を得るということがいえます。したがって、解脱をした者は、例えば、この肉体が滅びた後、別になんの問題もなく、より高い世界へ転生することができるわけですから、問題ないということがいえるでしょう。

（質問者A）なるほど。ありがとうございました。

●日本から登場するリーダーとは？

（質問者B）以前にいくつか読んだ予言に関する本の中で、いわゆるハルマゲドンの後に日本から何らかのリーダー的な人物が登場するということが書いてあったんですが、それは本当なんでしょうか。

（尊師）それは本当だと思います。

（質問者B）その人物のことについては何かわかりますか。

（尊師）大変難しい質問です。というのは、自分のことを自分でそうだとは言えませんから。いいかな。

（質問者B）はい。ありがとうございました。

●情報に流されない生き方

（質問者C）さっきのお話の中で、情報に流された生き方と、それを超越した生き方があると言われたんですけれども、予言という情報に振り回されて、例えば水中都市を造るとか、そういうのは構わないんでしょうか。

（尊師）それも大変賢い質問だと思います。今日は大阪大学は非常に賢い質問が多いと思うわけだけれども。

まず、情報には二つ存在すると。それは自分自身を利益に導く情報と、それから不利益に導く情報と二つ存在すると。で、「情報に流される」ということは、その利益になる情報と不利益になる情報両方を、自分自身がしっかりと選択することなく流された状態を表わすといえます。これはどうでしょうか。

（質問者C）それはちょっとよくわかりませんが。

（尊師）じゃあ例えば、例を挙げましょう。ここに食べ物があったとして、その食べ物を食べることによって、その人が病気になるとしましょう。例として挙げるならば、最もわかりやすいのは、例えばインドなどに行って日本と同じ感覚で水を飲むと。で、「水がそこにあるから水を飲むもんだ」という、情報における条件的な反応が成立しているとするならば、その人は必ず水を飲みます。そして、インドの水を飲んで、九〇％以上の人は必ずコレラ等の病にかかり、下痢をします。ところが例えば、「インドの水は危険である。よってこのような予防策が必要である」という情報があった場合、当然その情報は、逆に今度は利益を与えることになります。どうでしょうか、これは。

（質問者C）あ、それはわかります。

（尊師）つまり、情報には、利益を与える情報と不利益を与える情報があるということです。そして、わたしたちがなさなければならないことは、まず情報に流されないで、その情報をまず止めて見、そしてそれが自分にとって利益になるのか不利益になるのかをしっかりと選択するだけの自分自身を持つ必要があるということです。

そして、それによって考えるならば、例えば未来においていろいろな問題が起きるとするならば、当然、それに対して前もって対処する以外に方法はないじゃないかと。水中都市については、それがいえると思います。

では、なぜその必要があるのかというと、やはり人類は残らなければならない。それは仏典にも説かれているとおり、わたしたちの寿命はこれから逆転し、八万歳の寿命を得る状態に至っていくわけですから、そのための新しい種、新しい人類を残す必要があります。そのためには当然、それだけの情報の整理および処理と同時に、その情報をもとにして新しい未来を創りあげる努力をする必要があるんじゃないでしょうか。

（質問者C）つまり、情報に流されないと言っても、それは情報を判断すればいいってことですね。

（尊師）いや、だから流されるというのは、要するに情報が主体であると。情報を使うということと情報に流されるというのは別の問題だと思うけど、どうでしょうかそれは。

（質問者C）正しい判断をするというのはやっぱり情報を判断しているわけですよね。

（尊師）だからそのときには、情報に流されてはいないよね。例えば人に流されるという言葉を定義した場合、その人のいいなりになるということだね。

（質問者C）そうです。だから、流されないというのがつまり、超越するわけではなく、正しく判断するという意味なんですね、と。

（尊師）いや、正しく判断するという意味と同時に、段階があるわけだけど、もう一つは、完全に情報をシャットアウトしてしまうという道もあります。

（質問者C）だから最初、そうかなと思ったんですけれども。

（尊師）だからそれは段階的に考えていただいたら結構だと思います。それについては。

（質問者C）どういう段階ですか。

（尊師）つまり、完全に情報からのシャットアウトというのは、最終的な段階ですから、つまり解脱の段階ですから、そういう生き方を求める場合はそれは最高だと思います。それはそれで。

　しかし、そうではなくて、例えばちょっと専門的な言葉になりますが、マハーヤーナ、つまりもし大乗的な生き方を志すとするならば、情報をいったん止めて、正しく判断し、必要な情報は必要な情報として整理し処理する必要があるということです。よろしいでしょうか。

（質問者C）はい。

●科学的に証明されない宗教は偽物

（質問者D）宗教と科学とは対立する概念なんでしょうか。

（尊師）いや、結論からいうと、真実の宗教は科学的証明がある段階まではできるというのが、わたしの科学と宗教に対する考え方です。逆の言い方をするならば、科学的に証明されない宗教は偽物であるというのがわたしの立場です。

　例えば例を挙げましょう。瞑想ステージにおいて、例えば「阿羅漢」という境地があると。この阿羅漢という境地はどのような状態かというと、これは、ここに今来ているS師、あるいはマンジュシュリー正悟師、あるいはT君等の実験結果でもわかるとおり、シータ波優位の脳波の状態になると。例えばクンダリニー・ヨーガの状態になると、これはシータ波よりアルファ波優位の状態になると。それから一般の人はベータ波優位の脳波の状態になる等の実験結果でもわかるとおり、はっきりと修行ステージというものは、科学的に測定することが可能であると。

　例えば、第四ステージの場合、呼吸の停止が当然存在しますし、あるいは心臓の停止、あるいは心臓のコントロール等の現象、これが完全に存在します。したがって、科学的に宗教の最高の部分のあるポイントを証明することは可能であると考えています。よろしいでしょうか。

●最高の世界とは何か？

（質問者E）どの宗教でも世界の破滅の後に永遠の世界を築くようなことを説いていますが、永遠の世界がどうして素晴らしい世界と言い切れるのでしょうか。その価値基準はどこに置かれているんでしょうか。

（尊師）これは大変重要な問題だと思います。人間のもともと欲求している本質は、絶対的な自由・幸福・歓喜の三つです。そして、人間は望もうと望むまいと、決して魂の断滅を経験することはできません。つまり、これはどういうことかというと、わたしたちは本質的に「無」になることは不可能なわけです。したがって、永遠の生命、永遠の世界において、自分自身の魂の本質を理解し、あるいはカルマの法則を理解し、正しく生き、幸福が体現できるとするならば、その世界は最高ということになるんじゃないでしょうか。

●社会主義失敗の真因

（質問者F）社会主義はなぜ成功しなかったのでしょうか。

（尊師）もともと社会主義の思想そのものは資本主義よりも優れた点があるとわたしは考えています。しかし、人間を磨き上げる技術がなかったがゆえに、トップに立つ人たちが結局、権力の独占や物質の独占を行なったと。それゆえに、結論からいうと、社会主義のもともと目指している理念である、物質的に平等というものが達成できなかった、ということではないでしょうか。

●死を超えた生き方を――オウム真理教の命題

（質問者G）オウム真理教の与える宗教的な命題を簡単に説明してください。

（尊師）オウム真理教の与える宗教的命題とは、人は必ず死ぬものであると。そして、その死に対してどのような生き方をすれば、最もベストな人生であろうかと。特にここでポイントになってくるのは、死から次の生に至るまでの期間と、それから今の人生とを比較した場合、当然、高い世界に至るならば、次の世界の方が長いわけであると。と

するならば、今、何に集中し、何を目的として生きたら最もいいのかということ、これを解き明かしたのが、オウム真理教の教えであると思います。

『麻原彰晃の世界』PART20
千葉大学（92年11月3日）

●カルマの下に平等——生きるも死ぬもカルマ次第

（質問者A）先程、都市人口が十分の一になってしまうと言われましたけれども、もし仏様のそばで皆が平等ならば、その人たちすべてを救う方法があるのではないのですか？

（尊師）質問してよろしいでしょうか。人間は必ず死ななければならない。どうでしょうか、これは。

（質問者A）ええ、わかります。

（尊師）で、じゃあ今までだれが、その永遠の生命を与えたでしょうか。

（質問者A）わたしは、仏様かなと思うんですけれども……。

（尊師）確かに、仏陀釈迦牟尼、あるいは仏陀釈迦牟尼以前の真理勝者方である、例えばカッサパ真理勝者だとか、コーナーガマナ真理勝者だとか、あるいはカクサンダ真理勝者だとか、ヴィパッシー真理勝者だとか、多くの真理勝者が出られました。で、確かにあなたのおっしゃるとおり、永遠の生命をその信奉者たちにはお与えになりました。しかし、その与えられた生命というのは、この肉体の生命ではありません。それはどうかな？

（質問者A）わかります。魂です。

（尊師）ですね。それと同じです。つまり、わたしたちはカルマにおいて平等なんです。カルマにおいて平等とは、善行や徳の修行を行なう者はその見返りを受けますし、逆に悪業をなす者は、やはりその報いを受けなきゃならないと。

で、その都市の人口が十分の九になるか、あるいは十分の八になるか、あるいは十分の七になるか、あるいは逆に二十分の十九になるか、これはそこに住んでいらっしゃる方々の個人個人のカルマに最終的には依存すると考えていいんじゃないでしょうか。

（質問者A）わかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

●第三次大戦は人類に利益をもたらす？

（質問者B）戦争とは、善なのでしょうか悪なのでしょうか。

（尊師）戦争が善であるか悪であるかは、目的によって違うということができるでしょう。

（質問者B）目的というと、どういう目的の場合が善にみなされ、どういう目的が悪にみなされるんでしょうか。

（尊師）それは非常に難しい問題だね。なぜ難しい問題であるかというと、その人が、どのようなステージ、つまり精神的な段階にあるかによって違ってくるということがいえます。

（質問者B）戦争というのは個人の問題じゃなくて、最終的には国家間とか集団的な問題になってくるので、そういう人の意識とかでは決められない部分というのが出てくると思うんですけれど。オウム真理教の教えとして、戦争というものを肯定するのか否定するのかというところだと……。

（尊師）それは、ケースバイケースではないかと思います。例えば、これから世紀末に突っ込んで、いろいろな現象が起きるわけですが、ある部分については否定しなきゃならないし、ある部分については肯定しなければならないと考えます。

（質問者B）肯定する部分というのはどういう場合になるのかが、聞いてみたいです。

（尊師）そうだね、もし例えばだよ、人々がその死というものを契機として、死に対して新しい認識が生じ、それによって正しい生き方をするとするならば、それはそれで肯定できる材料じゃないかと思います。

つまり、人間は必ず生まれ変わりをしなければならないと。輪廻転生を繰り返さなければならないと。その場合これはわたしの人生観でもあるわけだけど、いろんな苦しみが生じると。その苦しみが、もしその人の次の利益に、大きな利益として跳ね返るとするならば、その苦しみというのは利益であると見ていいんじゃないかな。

だから例えば、戦争のあるパートにおいて、それによって人々の心が入れ替わり——まあ仏典ではそうなっているわけだけどね。つまり、今回の戦争の後どうなるかというと、人々は「さあ皆さんで戒律を守ろう」ということから寿命が延び、そして人々の容色が良くなり、それから幸福の度合いが増してくるというふうにうたわれています。これは『聖書』においてもそうです。ですから、今回行なわれる戦争が、もしそのような戦争であるとするならば、それはそれで衆生に対する利益を与えることになるんじゃないでしょうか。

しかし、それが単に、要するに国家間の土地の拡大だとか、つまり領土の拡大だとか、あるいは財物の拡大だとか、あるいは逆に軍事産業を発展させるための戦争であるだとかいう状態であるとするならば、それは悲惨な状態であるとわたしは考えます。

（質問者B）あ、はい、わかりました。

◉宗教の選び方――何を望むかによって

（質問者C）今、宗教がいっぱいあって、統一教会とか真光教とか何かたくさんありすぎて、普通の人たちにはどれも正しいというふうに聞こえるんですけれど、それを判断するということができないので、何をもってそれを判断すればいいかということを教えてください。

（尊師）宗教の目的は、三段階に分かれます。それは第一は現世利益を説く宗教。つまり、その宗教を実践することによって、病気が治ったり、現実的に経済的に豊かになったり、あるいは素敵な恋人と結婚する、といったようなものをポイントとして成立した宗教が一つです。

それから第二段階の宗教は、これよりも若干高次元で、その宗教の教えを実践するならば、その人が来世、今よりも高い世界へ生まれ変わるという教えです。これは例えば、キリスト教、あるいはイスラム教等が、このカテゴリーに当たると考えてください。

それから、もう一段階高い教えは、それらのすべての現象を超越し、「不死」に至る。不死に至るとは、これはパーリ語では「アッタ」、サンスクリット語では「アートマン」といわれている、わたしたちの真我に到達する道を説き明かす教えです。これは仏教や、あるいはヨーガ派がこれに属するということができるでしょう。

したがって、あなたが何を望むかによって、その真実という意味合いが変わってきます。よろしいでしょうか。つまり、もしあなたがただ単に、素敵な恋人を得たい、あるいは豊かな人生を歩きたい等をお考えになるならば、第一のカテゴリーに属する宗教を選んでも問題はないと。選んでも問題ないというのは、それだけ近視眼的なものの見方しかできないからです。

そうではなくて、少なくとも来世は幸福になりたいんだと考えるならば、第二の宗教、第二のカテゴリーに属する宗教を選ぶべきでしょう。これは先程の近視眼的な見方より、若干正常なタイムスパンにのっとった考え方であるということができるでしょう。

もしあなたが、永遠の幸福・歓喜・自由を求めたいと考えるならば、第三のカテゴリーに属する宗教を選ぶべきだと思います。よろしいでしょうか。

◉二つ存在する仏教の「空」

（質問者D）麻原尊師は仏教の「空」についてどう考えていますか。

（尊師）仏教の空については、二つの見解が経典に示されていますし、わたしの経験からいっても二つの空が存在すると考えられます。

これは瞑想ステージにおいて、形状界から抜け出し非形状界に入ったときの空、つまり空間無辺境、識別無辺境、それから無所有境、非認知非非認知境、と呼ばれる空の状態と。

それから大乗の修行者が到達する、すべての現象においては実体がない、つまりすべては心の働きと現象の結びつきであるということを基点としての空ですね。つまり、現象を完全に捨断したときに、実体と心との本質が切り離された空。つまり、解脱や悟りによって到達する空の二つがあると考えます。よろしいでしょうか。

（質問者D）はい、どうもありがとうございました。

◉安楽死した人はどう生まれ変わるか

（質問者E）人間は、死んだらどうなるんですか。

（尊師）この問題は、そんなに大した問題ではありません。

（質問者E）あ、そうなんですか。

（尊師）はい。まず、どのパターンから説明したらいいかな。

（質問者E）こう普通に、安楽死したら……。

（尊師）安楽死のパターンがいいかな。

（質問者E）ええ。

（尊師）じゃあ、安楽死のパターンを例に採りましょう。まず、安楽死のパターンの場合、必ず大量の薬物等が使われます。そうするとその薬物の働きによって、神経系だけではなく、脳細胞の働きが非常に鈍くなると。この状態は仏教的な言葉を使うならば、形状界が混沌とした状態、これは白い雪のような粒々の状態が現われ、現象に対する認識する力が欠如します。

次に、コーザルの働きにおいては、光が鈍くなり、闇の状態が訪れます。そしてエネルギーのセンター、まあムーラダーラ、スヴァディスターナ、マニプーラ、アナハタ、ヴィシュッダ、それからアージュニァー、サハスラーラという、七つのチァクラがあるわけですが、この中のスヴァディスターナ・チァクラ、つまり動物界へ至るためのチァクラにエネルギーが集中します。

次に、その安楽死をなす者の前に、緑のバルドーが立ち現われてきます。このバルドーは、その人にとっては、ある程度光り輝いているように見えますが、正確な観察眼をもって見る場合、どんよりした緑です。そして、その緑のバルドーに対する、大変なる愛着が生じます。そこで、いろいろな安らぎのヴィジョンや、あるいは動物的ないろいろなヴィジョンが現われ、それに吸い込まれるように、つまり意識がそこに完全にとらわれ引っかかる形で、洞窟のようなものの中を抜け出します。

次に、その洞窟のようなものの中を抜け出した後に、下に一般的に岩場のような情景が現われてきます。この岩場

のような情景には、いろいろな動物たちがうごめいているようなヴィジョンが見えてきます。例えば蛇だとか、いろいろな哺乳類だとか、いろいろな動物が見えます。そこで非常に恐怖を覚えます。そしてそこで、卵生に生まれ変わるか、あるいは胎生に生まれ変わるかの選択が生じます。そして、完全に子宮に宿ったならば、もうそこから抜け出すことはできません。これが安楽死の輪廻転生のパターンです。よろしいでしょうか。

（質問者E）で、そのときに自分の人格というのはどうなるんですか。

（尊師）つまり、あなたの例えば表層意識の人格かな。

（質問者E）そうです。

（尊師）表層意識の人格は消えますが、あなたの潜在意識——例えば、よく精神を分裂した人が別の人格を現わすけれども、そのようなもう一つ別の、よりヴィヴィッドな、つまりはっきりした人格が現われます。そして、その人格が主導権を握る形で輪廻転生を行なうわけです。

（質問者E）じゃあ次の自分というのは、今の自分とは全然別なものになるんですか。

（尊師）しかし、過去の自分を、その中間状態までははっきり覚えています。つまり、子宮に宿るまで、あるいは卵の状態になるまでは、はっきりとした認識がそこに存在します。

（質問者E）でも、生まれ変わってしまえば、今の自分とは全然関係がなくなってしまうということですか。

（尊師）関係がなくなるというよりも、一時的な気絶状態が生じるのは事実だね。

（質問者E）意識の下ってことですか。

（尊師）今あなたの表層意識が、いったん遮断されることは事実です。

（質問者E）で、今の自分というのは、生まれ変わってその後は、もう全然出てこなくなっちゃうんですか。

（尊師）そうではないです。これは、例えば修行とか始めると、過去の意識状態が甦ります。つまり、眠っている状態ということができます。

（質問者E）どうもありがとうございました。

◉「死」は克服すべき対象

（質問者F）あの、先程「死んだらどうなるか」という質問があって、それはちょっとわかったんですけれども、今自分が生きているうちに死というものをどういうふうに認識すべきなのかということをお聞かせください。

（尊師）死の軍勢というものは、わたしたちが克服しなければならない最高の敵であるというのが、仏教あるいはヨーガ、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教等でいわれる考え方です。では、それに対してどのように認識したらいいのかというと、要するに死というものは、学校の変わり目という考え方でいいんじゃないかということができます。

例えば、中学校で一生懸命努力した人は、高校は当然いい高校に行けるだろうと。しかし、いい高校に入ったとしても、その人が高校でもし努力をしなければ、大学は悲惨な状態であると。逆に、もし高校で努力をするならば、いい大学へ入ることができると。しかし、次に今度は大学で遊んでしまったら、社会に出てから苦しまなきゃならないと。

つまり、今この人間としての生を受けた以上、その人間としての生で、人生において精いっぱい自分のできる善行や、徳の修行や、あるいは心を浄化するような修行を行なうことができるならば、その大いなる力によって、次の生は、ちょうど目的の大学へ通ることができるように、目的の輪廻転生ができると考えていいと思います。

したがって死は、恐れるべきものではなく、克服すべき対象であると考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者F）それでは、自殺とか、そういう人は、次に生まれ変わるときは不幸になるということですか。

（尊師）そうだね、一般的にオウム真理教では、もったいないという考え方を持ちます。なぜならば、人間としての人生がまだ残っていると。その場合、その残っている人生を自分なりに全力で努力すれば、よりいい結果が出るのに、そこで努力を断念してしまった場合どうなるのかと。今までの自分自身の心の働きによって輪廻転生を繰り返すわけですから、もったいないよね。わかるかな。

（質問者F）はい。

（尊師）ということだね。

（質問者F）それじゃ、今の人生で努力するということは、今日本で決められている〝右側を歩く〟とか、そういう何か法律に従うということですか。

（尊師）ではないよね。これは、過去の偉大な聖者の教え、あるいは現代の聖者の教えを一生懸命実践する、ということではないだろうか。

（質問者F）はい。わかりました。ありがとうございました。

（尊師）はい。

「麻原彰晃の世界」PART20
京都大学（92年11月23日）

◉本物の宗教は科学で証明できる

（質問者A）科学と宗教の関係についてお教えいただきたいんですけれど。

(尊師) はい。科学は、例えばアインシュタインの相対性理論にしろそうですが、彼の宗教観から出た物理学理論であるということができます。それは例えば、絶対主である創造主を規定し、その創造主の存在がこうであるがゆえにこのような法則が成立するはずであるという理論、それが相対性理論であるとわたしは考えています。

で、実際問題として、科学と宗教との一般的な関係はどうかというと、科学で証明のできる宗教は、その段階においては本物であるということができると思います。例えば、例を挙げるならば仏教の場合、第四の瞑想、つまり第四の瞑想ステージへ到達すると呼吸が停止するとか、あるいは心臓が停止するとか、あるいは外的な刺激に対して影響を受けなくなるとか、まあいろいろとありますが、そのようなことが実際に客観的に達成されて初めてそのステージに到達したんだということができるわけです。

もちろん、それを神秘的なグルの力によって、その弟子がそこへ到達したかどうかをはかりしることは当然できますが、それを一般の人に納得させるためには、方便として科学を使うことは大変有効ではないかと考えております。よろしいでしょうか。

●永久に続く解脱の喜び

(質問者B) 解脱というのは、いったいどういう状態なのでしょうか。「歓喜」というふうに言われますけれど、通常の歓喜とは何か違いがあるはずだと思うんですけれど、どのような変化があるんでしょうか。

(尊師) まず解脱というのは、わたしたちの肉体と関係がある部分、それからアストラルと関係がある部分等を含めまして、「十のきずな」があります。で、その十のきずなとは何かというと、まずこの肉体を我であると思う心の働き。それから次は、この現実の生活の喜びこそすべてであると考える心の働き。次は、例えば宗教は存在するんだが、それはあくまでもその現実的な喜びを得るためのものであると考える心の働き。それから性的な興奮。それから他人を蹴落とそうとする害心。これがまず「低位に属する五つのきずな」と呼ばれるものです。

これは仏教的な用語を使うならば「有身見」、「疑念」、「戒督のとらわれ」、「愛欲の興奮」、「害心」という五つのきずながあります。これは実際問題、あるステージに到達すると、エネルギーの帯というか棒というかね、そういう形で感じることができます。

で、この五つのきずなが完全にシャットアウトされる、つまりそのエネルギーがどこにいても感じられなくなる、あるいは到達しなくなる状態。次にもう一段階高い状態で、要するに視覚的な、あるいは五感における美しいものに対するとらわれが捨断された状態。次は、美しい心に対しての影響を受けなくなった状態。次は、喜びにおける興奮が完全に止まった状態。次は、自分の達成に対する満足が完全に止まった状態。次は、自分が偉大な経験をしたとして、その経験に対しても全くとらわれなくなったような状態。これは、「形状のとらわれ」、「非形状のとらわれ」、それから「興奮」、それから「慢」、それから「非神秘力」というこの五つ――これは内的な五つですが、これも同じようにエネルギーの帯として感じることができますが、綱として感じることができますが――これが完全にシャットアウトされます。

シャットアウトされるとどうなるかというと、そこに存在していた喜びの元が上昇します。喜びの元が上昇することによって、その喜びの元は体全体を覆います。そしてその体全体を覆った喜びの元は、上昇し頭頂までいくと次は下降する、下降すると上昇するを連続的に繰り返すようになります。これは、自然にそれが起きるようになります。

ということは何かというと、つまりそのエネルギーが全く減らない状態で永久循環を繰り返す形になるわけです。この状態が解脱における喜びであると考えてください。よろしいでしょうか。

(質問者B) はい。

●予言の未来を超越する"内なる喜び"

(質問者C) "内なる喜び"などの話と予言の話との関連性がないように思えたのですが、関連性があるんでしょうか。

(尊師) これから起きるいろいろな変化、予言があるとしましょうと。で、これはあくまでも外的な世界の話であると。よろしいでしょうか。ところがもし、例えばあなたが内なる喜びに到達するならば、いかなる現象が起きたとしてもそれに影響されることなく生き続けることができる、あるいは影響されることなく高い転生を行なうことができるという意味において、内なる喜びの話をしているのです。

で、これは最も理想的な魂のパターンであると考えていただいて結構だと思います。つまり外的な変化に対して全く影響を受けず、自分自身が最終的な確定をなすとするならば、それは最高であるからです。よろしいでしょうか。

(質問者C) はい。ありがとうございました。

●戦慄の近未来――軍事政権の樹立は間近

(質問者D) 来年のことを聞きたいんですけれども、来年は異常気象とか天災とか起こるんでしょうか。それから、政治改革は本当に進むんでしょうか。

(尊師) 皆さんは東京大学の医学部の助教授が逮捕された件は知っていますか。

(質問者C) あ、知ってます。

（尊師）あの狙いは何かというと、国家の最高峰である大学の、しかも医学部の助教授を叩いたという意味合いがあります。で、まず政界を叩き、証券界つまり経済界を叩き、次に教育界を叩いたと。これは何を意味していると思いますか。そして、十月に天皇が「元首」としてNHKで報道されたと。どうでしょうか。

（質問者C）え、よくわからないんですけど。

（尊師）よくわかりませんか。つまり、これは一種のクーデターが起きる前兆じゃないかとわたしは考えています。したがって、政治改革よりもっとダイナミックな動きがこの日本に起きるんじゃないでしょうか。

（質問者C）ああ、そうですか。

（尊師）つまり、国民の信頼が置かれているものを一つ一つ消す。それによって別の者の登場を余儀なくさせて、別の者を登場させると。というのは、例えば今の経済というのは一九二九年の経済恐慌に非常に近い形で進んでいると。そしてこれを、景気を回復させるためには軍需しかないわけですよね。どうかな。で、軍需を増大させるためには、今の内閣制度あるいは議会制度ではだめと。そうなった場合、当然軍事政権が登場することは余儀なくなると。だれがかつぎ出されるかというと、それは天皇であるというパターンだとわたしは考えております。

（質問者C）あ、それじゃあ異常気象とか天災とかは起こるんでしょうか。

（尊師）まあ異常気象については、例えば今年も少しは起きているし、来年はより激しくなると考えていいと思います。

（質問者C）どうもありがとうございます。

●大破局は起きねばならないもの？

（質問者D）尊師は一九九〇年代の終わりに人類の九割ほどが死滅すると予言されております。しかし、大宇宙の法則、つまり「大宇宙においてはあらゆるものが調和している」という法則と同じく、その法則の中にあるこの人間社会、人類社会も調和、融和――人間の本質は分化していって様々な価値観が生まれてくると思うんですけれども――そういった価値観をそのまま残しながらも調和、融和へと向かって、地球および人類の危機は回避されるとわたしは思っているのですが、まずその点はどう思われますか。

（尊師）質問していいかな。例えばゴキブリが大量発生したときに、人間は何をなすでしょうか。

（質問者D）それを退治しようとします。

（尊師）そうだよね。ということは、例えばゴキブリの何割ぐらいがそのときに死滅するだろうか。

（質問者D）その捕まえる者の能力によると思いますが、完全には死滅させられない。

（尊師）そうだね。しかし、かなりの部分は死滅させられるよね。

（質問者D）はい。

（尊師）じゃ、人間とゴキブリは、どこがどう違うんだろうか。

（質問者D）智慧がある。

（尊師）今の人間に智慧があるんだろうかという質問はどうですか。

（質問者D）人間自体は不完全でありますが、その調和へ向かうといった本質は、もともと人類に計画されているというか……。例えば僕みたいな人間がたくさん増えたのでは人類は滅亡してしまうと思います。ところが、自分とは全く価値観の違うような人間がポツポツと生まれてくる、つまり何か社会に問題が起こると、必ずそれを抑制しようとする、つまりそれを粉砕していかなければならないと立ち上がってくる人々が出てくる。僕は非常に人間というのはうまくできていると思うんですね。そういった法則から考えると、何か危機が生まれてくるとまたそれを回避しようと、そういう人間が立ち上がってくる。例えば環境問題が起これば、何とかしなけりゃならんという科学者が出てくる。そういったことから考えると、危機は回避されるのではないかとわたしは思います。

（尊師）わたしたちと違った、もう一段階高い人間が存在するとわたしが話したら、あなたはそれを信じますか。

（質問者D）信じます。

（尊師）その人たちは何を考えているかというと、要するに、自分たちの生存のために価値のない人たちは死んでもいいんだと考える。これはどうでしょうか。

例えば、その典型的な例が第二次世界大戦であり、あるいは湾岸戦争であると。少なくとも湾岸戦争は、アメリカをはじめとする多国籍軍が一方的に勝ったわけですが、少なくともイラク人がかなり死んだことは事実です。そこで多くの新兵器が使われましたし、これはどうでしょうか。

（質問者D）それは、「一段階高い」と言われましたけれども、まだまだそれは不完全なレベルの人であって、もう一段階高いレベルの人であれば、そういう手段を用いなくても導けるもっと大いなる力が存在すると思います。

（尊師）あなたのおっしゃるとおりだと思います。しかし、そのもう一段階高いレベルの人が登場したとして、例えばその導こうとしている人たちの意識レベルが低かった場合どうでしょうか。

（質問者D）間違った方向に向かいます。

（尊師）ということだよね、結論からいうと。つまり、例えば東南アジア、アジアの状況を見ていただいたらわかる

とおり、仏教国は全滅に近いダメージを受けています。例えばラオスもそうですし、タイも軍事政権が今握っていますし、ビルマも同じように最も仏教的に象徴的な女性が監禁されていますし、このような状態をいったいだれが作っているんだろうかという疑問を持ったことはありませんか。というのは、最も平和を唱えている宗教は仏教です。しかしだれもそれに対して手を出すことはできません。

（質問者D）それで、あの……。

（尊師）ですからね、結局どうなるかというと、それは神々の要するに介入、先程だれかの質問にあったように、天変地異その他が一回起きなければならなくなるんだね。わたし自体も天変地異が起きることは好きじゃないから、まあいろいろとそれを止めるための瞑想法等を今まで行なってきたわけだけれど。

（質問者D）それで、人類救済のためにオウム真理教では――わたしは個人救済のための努力というか、力、パワーというものはものすごいものがあると思うんですけれども――大乗といいますか、全体的な救済をするためのパワーというものというか、具体的な方策が打ち出されていないと思うんですけれども。

（尊師）あの、自己宣伝をしてもいいかな。してもよければ相当のことをやっています。例えば、最も身近な例では、十月にザイールに行きまして、ザイールの方々にクロロキンその他の医療援助と同時にドクターを十名ぐらい連れて行きまして、そこでのマラリア対策――これは予算としては約四十万ドルぐらいを投入したわけだけれども――を行なったり、あるいはブータンにおいては、チベット仏教のカギュ派の大学をつくるために、約十万ドルぐらいの献金を実際に行って行なったり、あるいはスリランカにおいては、サキャ神賢の仏舎利が存在しているわけだが、その仏舎利塔の建設、およびスリランカの最高の瞑想家であり最高の叡智に到達したといわれているアーナンダ・マイトリー僧が今まで研究した図書館を建設することも実際行なったりとか、あるいはロシアにおいてはラジオ放送だけが今アピールされているが、二億二千万人に対して――わたし自体ロシア語が全然できないわけだけども、コンピューターでつなぎ合わせて、約三十分のね、「共産主義から真理へ」というテレビ番組の作製を行なって、これはもう一回目は放送されまして、次は二回目が放送されるわけだけれども。そういう番組を週に一回放送するということで十月から計画されていて、そういうことがあります。これは実際問題として、世界救済に対するオウム真理教の経済投資は、約十三億円ぐらい使っていることは事実です。よろしいでしょうか。

（質問者D）わかりました。

（尊師）ですから、これだけ使っていて大乗の救済活動がなされていないと言われればちょっと残念だね。

（質問者D）いえ、知りませんでしたので、すみません。

（尊師）はい。

（質問者D）ありがとうございました。

「麻原彰晃の世界」PART20
信州大学（92年11月1日）

●「南無阿弥陀仏」だけではダメなわけ

（質問者A）先程のお話において、管・風・心滴について、親鸞上人が単に「南無阿弥陀仏」と唱えればすべての人が救われるというふうに曲解した、と言われたんですけれども、それはどういう意味でしょうか。

（尊師）ヴァジラヤーナの教えの中に、グルとの合一、あるいは仏陀との合一という考え方があります。で、この「南無阿弥陀仏」とは何かというと、これをサンスクリット語で表現するならば、「ナマ・アミターバヤ」となるわけですね。で、これは何かというと、その「アミターバ」、阿弥陀如来に帰依します」、つまり「阿弥陀如来に対してすべてを捧げます」という言葉だというふうに考えましょう。

そうすると、死ぬ前に三回それを唱えるということは、つまり自分の意識が阿弥陀如来と合一するというふうにいえないことはないわけです。するとどうなるかというと、その意識は当然、阿弥陀の浄土へと飛んでいくと。これがまあ親鸞上人の説いた法則の中心です。

ところが実際には、例えばわたしたちが何かを欲求する場合、いろいろな潜在意識のけがれによって、そのポイントに集中することは不可能であると。つまり潜在意識のけがれがわたしたちの精神集中を妨げている状態が絶えず続いています。ということは、その三回の「南無阿弥陀仏」の言葉そのものが、つまり意識を阿弥陀の浄土まで飛ばすだけの集中があるかどうかということを考えた場合、それは一億人に一人も集中して唱えることはできないであろうということができます。

そうなった場合、この親鸞上人の説いた「南無阿弥陀仏」を唱えるならば悪人が救われるという考え方が正しいかどうかという問題に移行してくるわけです。よろしいでしょうか。もう少し掘り下げましょうか。

（質問者A）はい。お願いします。

（尊師）つまり例えば、ある人がラーメンが好きであるとしましょうと。しかし、その人はカレーライスは大嫌いであるとしましょうと。で、例えばその人が「わたしはラーメンが好きだ、ラーメンが食べたい」といったら当然ラー

メンのイメージがわくだろうし、あるいはラーメン屋に行くだけの気力がわいてくるだろうけども、例えば「わたしはカレーが好きだ、カレーが好きだ、カレーが好きだ」と三回嫌いなカレーの名前を唱えたとして、果たしてカレーが好きになれるかという問題と同じだということです。よろしいでしょうか。

（質問者A）はい、わかりました。ありがとうございました。

●タントラは禁欲的修行

（質問者B）タントリズムというものにおいて、禁欲とか苦行とかいうことは否定されていると思うんですけども、そのこととオウム真理教の教義の違いはどこから生じているんでしょうか。

（尊師）いえ、もともとタントリズムは、最もヒナヤーナと近いです。つまり禁欲的であり、小乗的であるということがいえます。要するに、もともとタントラというのは何かというと、「秘密のマントラ」という言葉が短くなって「タン・トラ」になったわけですね。つまり、秘密のマントラを唱える修行であればタントラということができるわけですが、その背景に仏教がある場合は、これは大変厳しい禁欲的な厳粛な修行であるということがいえます。

ところがまあ、インドヨーガにおけるヴィシュヌ派などで行なわれているタントリズムというものは、まさに快楽的な教えであるということがいえるでしょう。この二つには、だから大きなズレがあると考えてください。よろしいでしょうか。

（質問者B）密教とタントリズムの関係というのがよくわからないんですけど……。

（尊師）本質的に密教といわれているものは、仏教プラス先程述べたタントラの教えといって間違いありません。しかし、その教えが日本に伝わっていることはないといえます。よろしいでしょうか。

（質問者B）はい、ありがとうございました。

●人間を超越するためには

（質問者C）ぼくは人間を超越したいんですが、どうしたらよいでしょうか。

（尊師）人間を超越するという、あなたの「超越」の定義を聞かせていただいたら、それに対しては正しく答えることができると思います。

（質問者C）人間という、このもろい生命体であることを超越したいんですが……。

（尊師）わかりました。そのためには、第二段階のヨーガである「クンダリニー・ヨーガ」の三つ目の状態、化身を体から出すというか、別の身体に移り変わる修行をなさったらよろしいんじゃないかと思います。そのためには、今日わたしが説きました管・風・心滴の関係ですね、それを修習するといいと思います。で、単純に人間を超越して別の身体を得たいと考えるならば、『生死を超える』（オウム出版）に載っている修行法がいくつかありますから、それを毎日三時間程度行なわれたら、そういう経験が生じてくると思いますので、それを一生懸命行なってください。

（質問者C）変わったこととかはできないんですか。

（尊師）いや、だから例えば、これは今ロシアの放送で実際に科学的な検証をオウム真理教は行なっているわけですが、その中でいろいろな科学的実験データが出ています。必ず人を超えることはできます。

●大変動は目前に迫っている

（質問者D）わたしは長野市に住んでいるんですが、この世紀末に特に長野県とかは、どのような状態になるのでしょうか。

（尊師）そうだね、日本の人口は激減するということはまず間違いないと。第一段階で。それから世紀末と、あなたが言っているのはおそらく九九年とか九八年とかそういう年代だと思うけど、核が相当ぶち込まれると考えていいんじゃないかと思います。というのは、例えばこれはわたしたちが九月に「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」というラジオ放送をモスクワから行なっているわけだけども、その土曜日に「ノストラダムス秘密の大予言」というのを行なっています。で、この中で、今の天皇が、要するに、また国家の元首的な立場に立つと予言していたわけだけれども、これはみんなも知ってのとおり、今回中国に天皇が行ってどうなったかというと、NHKでは「元首」というような表現を使っていて、それをまあ『朝日新聞』が叩いたっていう実態があるよね。それからもわかるとおり、着実に世紀末に向かって突っ込んで行っているというのがわたしの印象です。

ですから、もしそれが正しいとするならば、ここで世紀末を笑ったり、あるいは自分の人生を嘲笑していらっしゃる方々もいらっしゃるが、大変悲惨な状態が待っていると考えて間違いないでしょう。

（質問者D）はい、わかりました。ありがとうございました。

●人類大破局へのプロセス

では、日本とそれから世界がこれからどうなるかについて少しお話をしましょう。まず、日本のこれからの状態は、皆さん自体の生活そのものも、今よりも貧しくなる傾向に

あると考えていいと思います。それから、今の日本の動きそのものは、これは繁栄した大国が滅びゆくパターンをとっていると見て間違いないでしょう。これについては二つの根拠を挙げることができます。

一つはまず、今の現象に対する分析と。それからもう一つは、予言の解説という二つを挙げることができます。もちろん、ここではわたしの見た未来ヴィジョン等について話をするつもりはありません。なぜならば、それは我田引水になるからです。

まず第一点。なぜ日本はこれから貧しくなるのかと。それはまず、今まで日本が、なぜ島国でしかも資源のない国であったにかかわらず繁栄したのかというのは、二つの要素があったからです。その一つは、他の国の人よりもよく働くと。これはわたし自体、世界を歩いてみて日本人ほど働く国民はいないということを実感しています。もう一つは、知識という意味において均一された知的レベルがあり、それだけではなく、特に抜きんでた教育を受けている人たちの一群があったということがいえるでしょう。

この二つは何を意味するかというと、他よりも優れた労働力と、そして知的水準の保持という二つのメリットを生み出すことができます。では現代はどうかと。まず働かされないような状態が作られていると。それは週休二日制、あるいはものによっては週休三日制といったような状態と。それからもう一つは、学生のレベル、つまり知的レベルが非常に低下していて、遊びを行なう者こそ人生の勝者であるというような風潮が、この日本にどんどんはびこってきていると。

で、これは何を意味するのかと。まず、第一段階で、わたしたちの労働に対する意欲の欠如なるがゆえに、当然労働力は外国へ移行しなければならないし、現実問題として中国、台湾、香港、あるいはシンガポール、マレーシア等に企業は労働力を移転させている事実があると。そして第二段階として、例えば最先端技術についていうならば、まあ最もわかりやすいコンピュータ等もそうだが、アメリカに、もちろん今日本は勝っている部分と負けている部分があるわけだが、その他にシンガポール等の追い上げを、あるいは韓国等の追い上げをくってきている事実があると。

これから見るならば、これから先の日本が何によって他の国より多くの利益を上げることができるかといったら、まあほとんどないと。なぜならば資源もないわけだからと。

次に、カルマというものがあると。このカルマの法則からいった場合、今までの生命の周期みたいなものがあるわけだが、九四年から九七年くらいにかけて大きな日本の変動が起きると。この大きな変動とは何かというと、少なくとも、かなりの人が苦しんだり、あるいは死んだりしなければならないような状態が訪れるということができると。

そして、それだけではなく、外国との関係、貿易問題を含めた関係が悪化し、孤立する状態が形成されると。まあ、わたしの読みでは、この天皇が中国へ行った理由というのは、戦争の準備をいよいよ始めているんだなという印象が強いと。では日本は果たして勝てるのかと、今のままで。今のままでは先程も述べたとおり、国民そのものが特別に優秀なわけでもなくなってきているし、それから国民そのものが特別に働き者というわけでもなくなってきているから、戦争には負けるだろうということがいえると思います。

そしてまあ大都市、あるいは世界の大都市というのは、ほとんどABC兵器によって、つまり原爆あるいは生物兵器、化学兵器によってメチャメチャになるというのが、わたしのノストラダムスの分析、および現状の分析によって得た結果です。だから、あなた方は笑うかもしれないけど、水底都市とか、あるいは地下都市を建設しようかという話もあるんだよ。それは撃ち込まれたときに、どの程度の人間が生きられるんだろうかという検討に、もうすでにオウム真理教では入っています。

まあ、これはね、大変暗い話だけれども、しかしもう一つ別の予言があって、それは日本から盟主が立つという予言であるわけだけれども、これについてはいろいろと研究結果もあるが、ここでね、わたしが話すことそのものが、この場の雰囲気を壊すと思いますから、話さないことにしたいと思います。

はい、では以上をもって終わりたいと思います。

「麻原彰晃の世界」PART20 東京工業大学（92年10月18日）

●修行ステージを科学的に検討するオウム真理教

（質問者A）麻原先生は、確か一年くらい前にテレビ朝日の『朝まで生テレビ』に出演なさったと思うんですが、僕は麻原先生が、討論相手にですね――「幸福の科学」ですか、それと栗本慎一郎などのインテリの方々などに対して論理的にですね、バタバタとやっつけているのを見てすごく感動しました。

そのときに一つだけちょっと引っかかったことがあるんですが、「仏教を科学的に証明できる」ということが麻原先生の口から出たと思うんですけれども、そのことについて、よろしかったら少しお聞き願いたいと思っているんですが。

（尊師）今日のこのサマディの話もその一つに属するわけだけれども、例えば例を挙げるならば、解脱をしていく上においては――解脱というのは人間を超えた意識状態に

至るためには四つの精神的なプロセスを経験しなければならないと。で、まあこれを「第一静慮」から「第四静慮」という言葉を使う、あるいは「第一サマディ」から「第四サマディ」という言葉を使っているわけだけれども、この状態において、例えばこの第四の静慮あるいはサマディと呼ばれる状態は、まず先程述べた呼吸停止を伴わなければならないし、あるいは感覚遮断といったものを伴わなければならないと。感覚遮断とは外的な感覚がいっさい入ってこない状態ということができます。

　で、この前者については、先程もステンレスチェンバー等についての話をしました。で、後者についてもオウム真理教でいろいろな実験をしているわけですが、例えば生身の人が、体全体がね、首から上は出して四八度あるいは四九度のお湯の中に十五分とかあるいは三十分とか、ずっと浸かった状態で瞑想し続けるという瞑想法があるわけですが、これなどはまさにその感覚遮断ができていないと火傷をしたり、あるいは非常に危険な状態に陥るということがいえます。

　で、こういう仏教に説かれている瞑想のプロセスや、あるいは心の発達等について科学的に検討し、そしてそれを実験器を使って実験しているというのが今のオウム真理教ですし、またそれを皆さんに視覚的にあるいは聴覚的にお知らせすることによって、科学的検証の部分については納得していただけるんじゃないかと考えております。よろしいでしょうか。

（質問者A）わかりました。どうもありがとうございます。

●科学者に最高の生き方を提供するオウム真理教

（質問者B）私事で恐縮なんですけど、よろしくお願いします。

（尊師）はい。

（質問者B）わたしは小さいころから、現代科学が本当に絶対的なものだと思って、その科学を通じて本当に普遍的なものを求めようと思って、大学も躊躇なく物理学を選びました。で、実際その研究の方に携わってみると、研究の幅の狭さとか、一生をかけての仕事量の少なさとかが感じられて、本当にもう先が見えてしまうような状態なんです。

　で、今研究室の方にいるんですけれども、これが例えば企業に就職した場合だとか、例えば企業に就職したにしても、企業ですから単なる利益追求のために自分の成してきたことを注がなければならないわけです。そういうことを考えると、本当に今までやってきたことの虚無感というか、空虚な気持ちというか、本当に何か信じていたものが足元からすくわれるみたいなものがあるんですけれども、もしアドバイスがあればよろしくお願いします。

（尊師）はい、わかりました。科学者、まあ科学技術者として生きようとする場合、これはわたしは半分冗談のような形でよく話をするわけですが、これは具体的に実態もそれに伴うと考えてください。三つのパターンがあると考えたらいいと思います。

　その第一はオウム真理教に出家し、そして科学技術の研究をすると。で、第二は、企業に就職し、その企業の専門的な分野についての研究を行なうと。で、第三の場合は、大学に残り研究すると。まあだいたいこの三つを考えることができると。

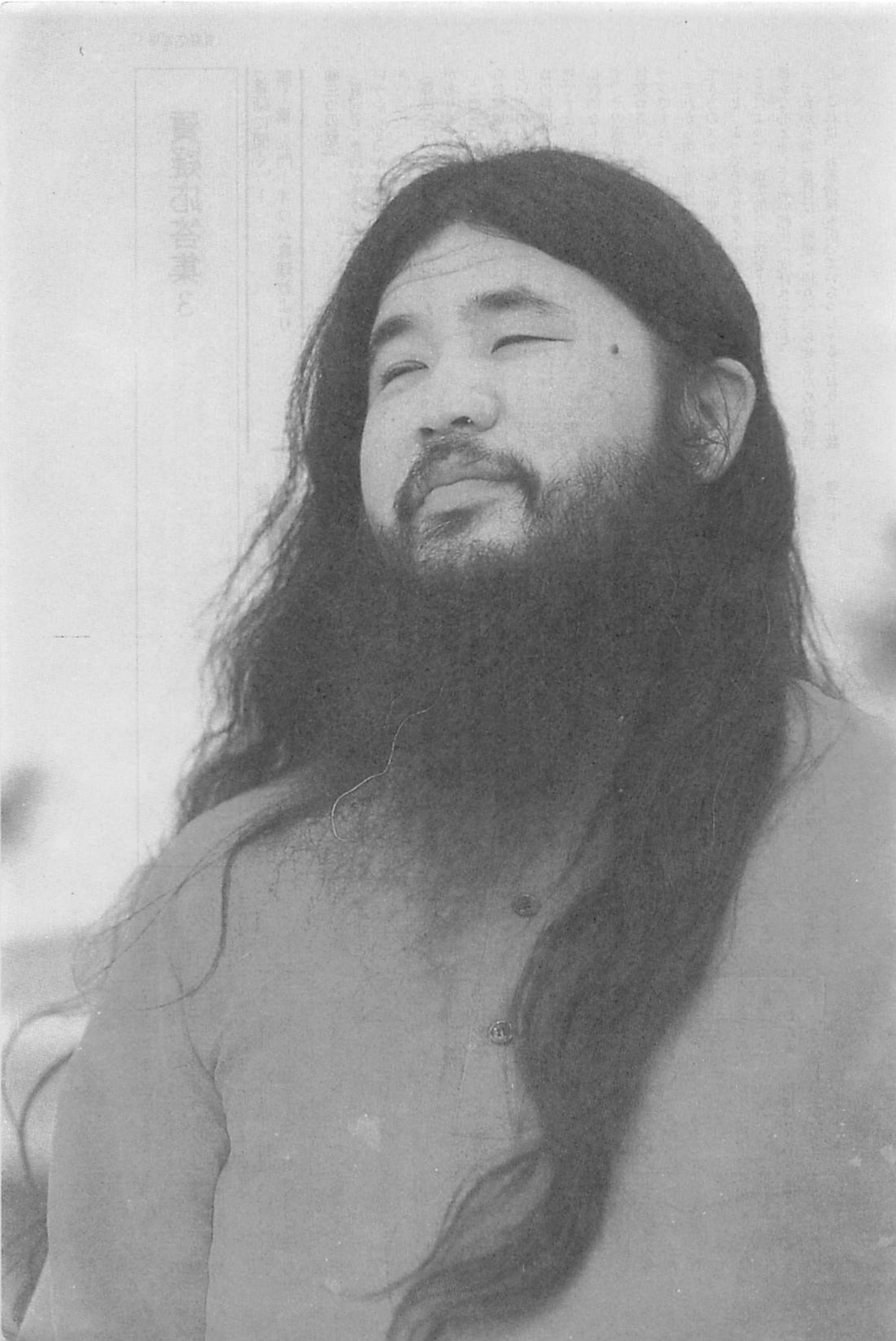
　で、まずこの三つの相違点を見るならば、研究の自由さ、つまり自分がこれを研究したいんだということに対しての自由な研究の場としては、やはりオウム真理教が一番であると。で、次に予算についても、これは同じようにオウム真理教に出家して、実際問題としてその科学技術あるいは自分の論理を追求した方が、かなり自由な立場で出してもらえるということがあると思います。

　で、次に企業とそれから教団での研究との差という点から考えると、企業の場合はあくまでも利潤追求であるがゆえに、人類のためになるかどうかわからないと。しかし教団の場合は、すべては人類を高い世界へ誘うための方法論の一つとして科学技術あるいは科学を取り入れていると。そうなった場合、自分に対するメリット、つまり功徳の返り方は違ってくると。

　確かに大学の研究室に残り、そして研究をすることも素晴らしいと思います。しかし大学の研究室と教団での研究との違いは、先程も述べましたとおり、研究費の出し方が違うと。例えば、この東京工業大学を出たG、Wさんですね、彼の研究費といったら年間にそうだね、何億といった金額を使っていますし、これらはすべて、これからの人類のための教団の投資であると考えていますから、もしそのような自分の今の人生に対して疑問があり、そして自分の科学者としての生命というか、それを賭けてみたいとお考えになるんでしたら、それはぜひとも出家をして修行と同時に先程述べたアインシュタインの道ですね、つまり瞑想とそれから実践的な研究と両方を行なっていただいたらいいんじゃないかと思います。よろしいでしょうか。

（質問者B）もしお世話になることがありましたら、よろしくお願いします。

（尊師）はい、わかりました。



質疑応答集3

（「尊師に聞く」より）

「尊師に聞く」１
第１章 入門！オウム真理教より

◉三つの救済

（質問者）尊師がオウム真理教をお始めになられた動機というか、きっかけのようなものがありましたらお教えください。

（尊師）オウム真理教の基本的な考え方に「三つの救済」があります。

この三つの救済とは何かというと、まず第一に、病苦からの解放。これは今、野方の方に「オウム真理教附属医院」というのがありまして、実際問題としてガンを死滅するための特別な治療法ですとか、あるいはエイズに対しての研究ですとか、あるいはその他の難病に対して、ヨーガ的・仏教的なものを取り入れながら病気の治療を行なっています。その病苦から解放することをきっかけとして、真理に目覚めさせ、そして高い世界へと転生させるということが一つですね。

それから第二番目は、現世の苦悩からの解放と。これは、生き方のスタイルが間違っているがために苦しみが生じていると。よってそのスタイルを、少しずつ変えていただくことによって、現実的な生活をより良くし、それによって豊かな心とそして高い転生へ向けさせると。

それから第三番目は、解脱・悟りへ至らせるための救済と。これは、お釈迦様も説いていらっしゃるとおり、十数段階の段階がありますから、その段階に合わせた形での救済計画を展開すると。

そして、この三つを展開していくためには、どうしても団体が必要であると。それは、例えば本を一冊作るにしろ、著者がいればすむわけではないと。例えば、現代では売れる本しか出さないと。売れる本ということはどういうことかというと、当然煩悩的な、皆さんの煩悩を満足させるような本しか出せないと。ここで、思想的な、あるいは宗教的な本を出す場合、当然本を書き、それを編集し、そしてデザインし、そしてそれを写植に打ち、そしてスキャナーを使ったり、あるいはレタッチを使って、次は刷版に至り、そして印刷すると。そして印刷したものを裁断し、一冊の本に仕上げるといったような本を作るまでの過程と、そしてその本を書店に並べる人たち、そういう人たちが必要になってくると。

そういう救済計画を展開するためには、教団が必要であるということで、オウム真理教は発足したわけです。

（九二年六月六日・神奈川薬業会館）

◉真理

（質問者）オウム真理教は仏教をベースにしているということですが、大乗の教えなのですか。それとも小乗の教えなのですか。

（尊師）オウム真理教の教えは、大乗でも小乗でもなく真理です。というのはどういうことかといいますと、まず小乗の教えを完成したら、大乗の教えへ入るべきである、しかし、入らない魂は、そこでニルヴァーナに入ると。そして、大乗の教えをより積極的に実践するためには、秘密金剛乗の教えに入るべきであるというふうに考えています。

つまり、できるだけ早く高い悟りへ到達し、高い解脱をなし、そしてそれを衆生に還元することが修行の目的であるということです。ですから、オウム真理教の教えは、小乗、大乗、それから真言秘密乗、それから金剛乗すべてを兼ね備えていると考えてください。

（九二年六月十三日・京都教育文化センター）

◉伝播か実践か

（質問者）本をたくさん出版したり講演会や説法をいっぱいやって法を説けば真理というものは表現できるとお考えなのか、それとも先程紹介していただいた呼吸法とか修行とか技術的なものをやっていって、その人自身が真理を見つけていかなきゃならないのか、どちらなのでしょうか。

（尊師）それは両方です。つまり、個人的には体験がなければしょうがないという考え方がわたしの中にあります。

ですから、皆さんが今日の話だけではなく、今日伝授した入息出息の仕方をマスターすることによって、内側の体験をどんどん深めていくということが達成されれば、それはそれで個人的な真理の探求というものがより発展的に行なわれているんだなと理解することはできると思いますし、逆に、このような多くの人に対する講演会とか、あるいは、モスクワ放送を使っての日本の多くの人に対するアプローチというのは、それによって精神的な悟りを得たり、あるいは実際的に苦しみから解放されたりする人が多ければ、それもまた一つの真理の実践であると考えています。

（九二年六月四日・北海道大学）

●成就者

（質問者）仏教の本場ともいえるインド、スリランカで何人もいない成就者が、オウム真理教では大勢いるということなんですが、そのへんの違いはどういうところからくるんでしょうか。

（尊師）結論からいうと、不放逸そして極限、この二つを今のオウム真理教では実践できるだけの場があると。それからもう一つは、日本人という特質、この二つが絡み合って、そういうことが可能になっているんだと考えます。

というのは、もともと日本人というものは大変な努力家であると、本質的に。それと同時に、先程言った修行のできる場というものが提供されているとするならば、教えが存在し、場があるのですから、当然達成できるわけです。

（九二年六月六日・神奈川薬業会館）

●神通力

（質問者）オウム真理教というと超能力が有名ですが、そういうものは本質的なものではないと考えているのですか。

（尊師）はい、おっしゃるとおりです。超能力には二つあります。一つは、要するに煩悩を満たすために初期の段階で開発される超能力。要するに心の成熟しない状態で、煩悩優位の状態で現われる超自然的な力ということだね。これはオウム真理教では完全に否定しています。

そして、もう一つは〝超能力〟と呼ぶにはふさわしくない偉大な力、神通力です。この神通力の方は、肯定しています。なぜなら、こちらの方は、心が成熟した状態で現われる、要するに神々の力だからです。

（九二年六月七日・杉並道場）

●真理は一つ

（質問者）僕は、真理は一つしかないと思っています。で、世の中にはいろんな宗教団体がありますが、オウム真理教は真理なんでしょうか。

（尊師）イエス・キリスト、あるいは仏陀釈迦牟尼、あるいはノストラダムス、まあいろいろな予言者たちがいたわけですが、その予言者たちの予言のいろいろな項目を分析すると、次のことが浮かび上がってくるのです。本当の意味での真理の灯明を灯す救世主は日本から現われる。そして、それは七千年期、つまり、千九百年代の終わりである。そして、その救世主の灯す法則こそが真理である。

加えて、その救世主の特徴としては、例えば半眼、つまり目が半分しかない、つまり見えないとか、あるいは盲目であるとか、あるいは髭もじゃであるですとか、いろいろな形の表現形式がとられていますから、おそらくわたしのことを指しているんじゃないかなと。これは、九十九パーセント間違いないだろうが、まだ百パーセント確定していません。でも、間もなくしたら、その内容についても皆さんにお知らせすることができるのではないかと考えています。

（九二年六月十七日・東京大学）

●宗教の条件

（質問者）尊師の考えておられる体系というものが他の宗教団体のものを包括できるから、オウム真理教は正しい宗教だといえるのですか。

（尊師）包括できるから正しいのではありません。

つまり包括概念であるという単純なそういうものだけではなくて、例えばだよ、人間の構成と宇宙の構成のその両方の要素がミックスされた状態において、完璧なそこに理論が存在していると。そして、その完璧な理論を実際に体験しているという人たちがいるとするならば、それは完璧だよね。

つまり、何を言いたいかというと、わたしは、宗教というのは五つの要素が必要であると考えているわけだ。

そのまず第一は、完璧な教義であると。第二は、その教義を具体的に現象化する、つまり、実際に体験できる修行体系が存在していることと。第三は、個人個人に対する完璧なアドバイスができるグルが存在しなきゃならないと。そして第四番目は、現代人はいろいろな煩悩のデータをたくさん持っているから、それを瞬間的に変える、あるいは時間をかけて変えるようなイニシエーションが存在しなきゃならないと。そして第五番目は、その説かれた世界を各段階において経験している魂が存在していなきゃならないと。

これだけの五つの条件がそろって初めて、真の宗教といえるのではないかと思います。

（九一年十一月二十三日・東京大学）

●オウム真理教の由来

（質問者）原始仏教と深い関連があるそうなんですが、あえて仏教ではなくオウム真理教として伝道活動を行なっているのはなぜですか。

（尊師）では、〝オウム真理教〟という名の由来をご説明しましょう。まず〝オウム〟というのは、サンスクリット語のア・ウ・ムという三つの音を合わせたもので、〝無常〟、つまりこの世の中のすべての現象は、変化し続けているものであって実体でないということを表わしています。

それから、〝真理〟というのは何かというと、これはお釈迦様も仏教をお説きになったわけではないんです。というのは、お釈迦様の初転法輪、つまり初めてお釈迦様が弟子たちに説法をなさったときに、これは「絶対の真理」であ

ると、そして「真理」とは「苦しみ」、「苦しみの生起」、「苦しみの滅尽」、「苦しみの滅尽に至る方法」であるという言葉を使っていらっしゃるわけですね。ですから、当然原始仏教と同じ法則を説く場合、それは仏教ではなくて「真理」でなければならないということで、オウム真理教という命名がなされたわけです。

（九二年六月十七日・東京大学）

●超伝統的宗教

（質問者）オウム真理教は、伝統的な宗教だということなんですが、今までの日本では、そういった伝統的な宗教というのは、根づいていなかったのでしょうか。

（尊師）そんなことはないよ。例えば、道元なんかは明らかに仏教の一部、禅の教えを持ち込んだ人であるし。ぽつぽつと禅的な教えを持ち込んだ人はいます。しかし、それは一部です。

オウム真理教の場合は、それを全体的に、伝統的なものを現代にわかりやすく説き明かそうとしているということなんだよ。

だから、オウム真理教は超伝統的な宗教ということだよ、そういう意味でいったら。

（九一年十一月四日・気象大学）

●経典

（質問者）オウム真理教ではチベット語やパーリ語の仏典の翻訳をされていると聞きましたけれど、日本には昔からたくさんのお経があるのに、なぜ今オウム真理教でそのようなことをされているのでしょうか。

（尊師）なぜ日本に漢訳の仏典があるのに、漢訳から訳さないのかということですね。実は、漢訳の仏典についてもある程度の翻訳はしています。

しかし実際問題として、漢訳だとサンスクリット語が中国語になり、中国語がそのまま移入されると。ところが、この中国語というのはクセモノで、その意味というのは時代によって変わってくると。とするならば、サンスクリット語→中国語→日本語という流れはあまりにも訳者の意図が入りすぎているがあまり、本質が理解できないということになるわけですね。

よって、原典といわれているパーリ語の最も完成された形で残っているスリランカの経典、パーリ三蔵の翻訳、あるいは、その経典の教えから多くの成就者が出、その成就者によって展開されたタントラ・ヴァジラヤーナの教え——これはチベットに伝わるわけですが——その教えを翻訳することによって、世界の仏教の本質というものを探ろうとしているわけです。

結論からいうならば、この"探る"という言葉は正しくないですね。わたしも多くの真理勝者の弟子だった生があります。例えば、例を挙げるならばヴィパッシー真理勝者だとか、あるいはカッサパ真理勝者だとか——わたしの前生では、カッサパ真理勝者のとき、わたしとサキャ神賢は法友だった生もあるわけです——そういう前生の流れから、今日本に伝わっている仏典というものは、衆生の済度に役立っていないというのがわたしの見解です。

だから、衆生を済度するのに必要な経典、あるいはわたしが過去世において習い、そして修習した経典をできるだけ多く翻訳し、それをわかりやすい形で日本語に翻訳し、そして日本の人たちにそれを伝えること、これはオウム真理教の一つの使命だと考えているのです。

（九二年六月二十一日・大阪阿倍野区民ホール）

●出家は現実逃避か？

（質問者）オウム真理教で出家した方々を見ていると、宗教イコール生活みたいな部分がかなり見えるんですが、その一方で、現実問題にクエスチョンマークを投げかける形で出家をするようなところがあるのじゃないでしょうか。それがともすると現実逃避というふうに見えてしまうように僕は感じてしまうのですが。

（尊師）あなたが言うとおり、現実逃避をして出家した弟子はいます。これは認めよう。しかし、そういう弟子は一部であると。というのは、あなた方が普段生きている生き方と、オウム真理教で出家した後に生きる生き方というのは、それは本当に雲泥の差ほど大変だから、出家の方が。わたしは、それで答えになっていると思うんだけれど、どうですか。

それからもう一つは、これは、五つの愛欲の構成要素があるわけだけれど——それは、形状・容姿、感覚、イメージ、それから経験の構成、そして識別と五つあるわけだけれど——この中の三番目のイメージ、君たちが得ているオウム真理教のイメージというのは、まさにマスメディアがつくり上げたイメージだと思うんだよね。その、イメージによってつくり上げられたオウム真理教に対してだよ、中身を知らないで、つまりパッケージで、オウム真理教の出家修行者がどうだと発言するのは軽薄であるような気がするんだけれど、どうかな、それは。

（九一年十一月四日・気象大学）

●現世での成功

（質問者）日本の他の宗教は、皆現世での成功とか、現世で経済的にいかに利益を得るかということをいうんですけれども、オウム真理教では、そういう現世での成功と信仰

とはどのような関係を持っているかをお聞かせ願いたいのですが。

（尊師）まず、現世での成功というものは、宗教的な価値観からいったら遊びのようなものであると。これがまずオウム真理教の見解です。言い方を換えるならば現世での成功もできないようでは、仕方がないと。よろしいでしょうか。で、それに飽きた人が、解脱・悟りを得るんだということですね。

（質問者）ということは、ある程度現世で成功しなければ、その解脱なり悟りも得られないということですか。

（尊師）というよりも、それぐらいの徳と知能というものがなければ、解脱・悟りはあり得ないということです。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

●尊師の宗教性

（質問者）尊師も明日交通事故で亡くなられるかもしれませんよね。そうした場合、尊師が死ぬのと一緒に尊師の宗教もなくなってしまうのか、あるいは修行の仕方などに尊師の考え方はもう完璧に残っているのか、それについてのお考えをお聞きしたいのですが。

（尊師）結論から言うと、まだわたしの本質的な宗教論の一部しか表現されていないということは事実です。ただその一部が表現されているということは事実ですから、例えば、明日交通事故でわたしが仮に死んだとしたら、今まで表現したそのすべてが、わたしの宗教であるととらえていいんじゃないでしょうか。

（質問者）では、著作とか今回のような講演とかをされていくことで、尊師の思想は、非常に長い時間をかければ表現できるとお考えなんでしょうか。

（尊師）こういう講演の対象というのは、初めて会う人だよね、ほとんど。だから、そういう意味においてはベースの教えを、その段階では説き明かすことになると。そうではなくて、要するにわたしの宗教性がどこに出るのかというと、例えばモスクワ放送から流れてくる、ちょっと高度な内容とか、あるいは、実際に在家、つまり一般の生活をしながら修行していらっしゃるような信徒の方々に対する講話とか、あるいは、今回数人連れてきているような出家している弟子たちに対する講話とか、段階的な教えがあるわけだけれど、そのどの部分をもってわたしの宗教性かというと、やはり、全体的なものであると。

で、その全体をカバーするためには、やはりこのような講演会も必要だし、それと同時に弟子たちのステージがもっと上がって、今わたしが経験していることのより高い部分を経験したら、当然それよりもう一段階もう二段階高い教えを説かなきゃならなくなるわけだから、そういう意味でいったら、全体的に広がりと高さが生じたときに、初めてわたしの宗教性のすべてが出るというふうに考えていただいたら結構だと思います。

（九二年六月四日・北海道大学）

第2章「これが宇宙の実相だ」より

●天界と地獄

（質問者）尊師の著作の仏教の心の問題を説いた部分などは非常に素晴らしいと思いました。ただ一つ、納得できない部分は、天界や地獄が存在するかということなのですが。

（尊師）一つ質問していいかな。例えば飢餓によって苦しんでいるアフリカの国があるとしましょう。ここの生き物たちは、つまりこの人たちは、小さいときからほとんど食べることができず、そして死んでいくとしましょう。この人たちの世界は、当然、食べるものすらないわけだから、乗り物その他の現代文明をほとんど理解することはできないと。ところが――まあ一番いいのは、堤さんかもしれないね――個人資産一兆円以上の人がそこにいたとして、その人たちの生活を、アフリカの食べられないで死んでいく子供たちがね、理解できると思いますか。

（質問者）できないと思います。

（尊師）だよね。そのアフリカの子供たちの経験と、それから、堤義明氏の経験とには大きな差があるよね。しかし堤義明氏は確かに、善行の結果としてそれだけの大きな財を得たのだろうけれども、それよりもより大きな功徳を積む魂があって、そして心がより清らかな魂があるとしたら、あなたはどう思いますか。堤氏以上の世界を経験すると思いますか、しないと思いますか。

（質問者）経験するんじゃないかなと思います。

（尊師）それが仏教的実践なんです。そして、その結果をまず瞑想で体験していくことなんだよね。真理の実践を行なうと、まず夢見が良くなると。夢というのは何かというと、短い時の流れの自分の経験を総和したものであると一般的にはいわれています。例えば、生き物をよく殺す、そして悪いことをなす人たちはほとんど夢を見ることができません。夢を見ることができないというのは、自分の内側にある要素を知っているがゆえに、それを知りたくないと、見たくないという拒絶の意識が働くために夢を見ないんだよ。その時の流れが長くなればどうなるかというと、当然、そういう蓄積の世界へと至ると。

例えばだよ、ここに野球の好きな子供がいたとして、自分は将来、とにかく野球が好きだから、野球選手になって生きていくんだと考えたとしよう。するとその子供は一生懸命野球の修習をするだろう。そして中学時代も野球部、

高校時代も野球部といった形になると。その子供が、実際問題としてプロ野球で活躍できるかどうかは、その徳によって決まるわけだけれど、もし徳があるとするならば、その子供は当然プロ野球へと至るだろうと。

そしてプロ野球の世界というものは、それと同じようなタイプの魂が集まっているわけだよね。つまり、自分がなしてきた経験の集合体が、その世界を表わすということがいえるわけです。

したがって、この人間よりもより偉大な功徳を積み、善行をなし、そして法則の実践を行ない、寂静の修行を行なっている魂の集合体が神であり、それから逆に、最もひどい言葉や行為や心の実践をなしている者の集合体が、地獄を形成しているというふうに考えたら理解しやすいんじゃないかと思うんだけど、どうかな。それは。

（質問者）構造として理解できます。

（尊師）だよね。構造として理解できたら、あなたは賢いと思うんだよ。それを構造として理解できているから。次は、それを瞑想上、体験していけばよろしいと。それは、地獄があるんだよ、あるんだよといって体験するのではなく、心を浄化するような瞑想修行等を行なっていくことによって、その世界は体験できます。例えば、ここにいるマハー・ケイマ最上善逝とか、ウッパラヴァンナー供養値魂なども、そのような経験を多く行なっています。もちろんわたしもそうです。（九二年六月九日・仙台説究ホール）

第3章「なぜ〝修行〟なのか」より

●悟り

（質問者）普通の生活をしながら悟るために必要なこと等を教えていただけたらと思うのですが。

（尊師）普通の生活をしながら悟る方法、これはあります。しかし普通の生活をしながら解脱をする方法はありません、結論からいうと。

これは、わたしが日本だけではなく、インド、あるいはチベットの亡命政府、スリランカ等を歩いてみて感じたことですけれどもね。普通の生活をしながら解脱する教えは存在していないと。

悟るというのは何かというと、英語的表現を使ったらわかりやすいわけですけれども、リアライゼーション（realization）という言葉を使います。解脱とは、エンライトンメント（enlightenment）、あるいはサルベーション（salvation）といったような言葉を使いますが、この違いは何かというと、悟りとは、要するに内側の本質的納得、これが悟りです。そして、エンライトンメントというのは、これは内側の身体を脱させる、つまり外側の身体から内側の身体を脱させる、これが解脱です。

悟りのための方法というのは、まず、公式、つまりこの現象界における当たり前といわれている公式をまずしっかりとマスターする。例えば、わたしたちが生まれ、老い、病み、死んでいくとか、あるいは、わたしたちの脳と心臓以外の細胞は約三年間で入れ替わってしまうとかね。例えばこういうものをしっかりと教義的に理解すると、第一段階で。

そして、理解した上で現象を淡々と見つめると。これを行なうことによって、わたしたちは何がわたしたちを苦しめ、何がわたしたちを喜ばせ、何が本質で、何が本質でないのかを理解できるようになります。

それからもう一つ、今日は話しませんでしたが、ヨーガ的方法によって悟ることができます。それは、いち早く潜在意識へ入るための方法としての特殊な呼吸法、そして入った段階でその潜在意識を見つめ、それを取り払うための教え、これを使うわけですが、この第一番目の方法でも、第二番目の方法でも、必ず多くの悟りに到達し、そして最終的にはセルフ、つまり自己を悟ることができます。

（九二年六月六日・神奈川県楽楽会館）

●欲望

（質問者）オウム真理教もそうでしょうが、仏教では欲望というものはすべてなくするべきで、欲望を取り去れば苦しみから解放されるといっているのですか。

（尊師）それは違います。欲望を取り去らなければならないのは、ある段階へ到達し、欲望の必要性を感じなくなった魂が欲望を取り去るんです。

つまり、どういうことかというと、初めは三宝に対する信を持つことから始まります。ですから、あなたがこれから何かを達成したいとした場合、それを三宝の力によって――三宝とは、「三つの宝」と書くわけだけれど、それはオウム真理教でいうならばグル・シヴァ大神・すべての真理勝者方、つまりすべての仏陀方。それからその教え。そしてその教えを実践して、あなたよりも高いステージへ至った者たち――の力によってあなたの欲望を完全に満足させると。

例を挙げるならば、素晴らしい結婚をしたいとしましょう。教えを実践をして結婚をする場合どうなるかというと、当然、お互いがお互いに対して綺麗な言葉を使うとか、お互いがお互いに対して心から尽くすとか、あるいはお互いがお互いに対して自分よりも大切にするぐらいの心を訓練するとかいったような教えがありますから、その教えを実践することによって幸福になるということになるわけです。

そして、その教えの中で段階的に、例えば愛着をしすぎ

ているると死というものを境に苦しまなければならないから、その愛著を取り払う方法とか、例えば四無量心の瞑想とか、そのようなものを伝授され、徐々に徐々に煩悩が弱められ、そして自己を超越する世界へと入っていくわけです。理解できますか。

（質問者）煩悩は、教えによって、自然とだんだんと弱められていくものであるということですか。

（尊師）例えばね、あなたが「オレは一日、おいしいものを五回食べたいんだ」と考えたとしましょう。そして、教えによって一日おいしいものが五回食べられるようになったと。これが「十回食べたいんだ」と考えたとしましょう。十回食べられるようになったと。しかし「もうこれ以上は食いたくないよ」と。「こんなものはいくら食ったって十分満足させられないんだ」という認識が生じたら、次はそこから離れようとするよね。どうかな。そういう段階に入ったときに、欲望は徐々に弱まるということを言っているわけだね。

だから、始めから食べちゃいけないよという制約はしません。段階によって変わってくるということです。

（質問者）ということは、瞑想をしているときに欲望は取り去るべきものであると無理に考えるわけではないのですね。

（尊師）そうするとストレスになるよね。だからストレスにならないようないろいろな方法があるんだよ。でなかったらね、ただ単に本を皆さんに読んでもらって「さあこれを実践しましょう」ですむわけだけれど、そうではないよね。なぜ教団があるかというと、その教えの表面的な部分だけではなく、深い部分についての教えがあるんだね、たくさん。そして、信徒はそれを実践することになります。

（九二年六月九日・仙台読売ホール）

●階層性からの離脱

（質問者）今のお話を拝聴する限り、修行の目的というのは、いわば低位から高次化していくということを言われていたと思うのですが、それは、ヒエラルキー（ピラミッド型の階層組織）のような感じになってしまって、それは我々が今まで経験してきた受験勉強なり何なりに似たような形ではないのかということを僕は思ってしまうのですが。

例えば、我々は今この受験戦争でそういったヒエラルキーを、より高度な大学・学問を目指していて、一応東京大学に——もちろんこういうのは現世的でしかないんでしょうけども、受かったと。それでも、いつも我々は満たされていません。

修行によって今の生以上の生を求めるときに、その世界もまたヒエラルキーとなってしまうのではないでしょうか。

（尊師）確かにそのとおりだ。しかしね、それは先程述べた認知経験滅尽の前の段階までの話だね、それは。つまり、最終的な認知経験滅尽というのは、すべての経験を完全にクリアにした形、透明にした形になるんだよ。その段階で三界から完全に離脱しますから、だから離解脱という言葉を使っているわけだよね。つまり、君が言っている階層性からの完全なる離脱、それが最終の解脱なんです。

ただ、そこへ到達するためには、一応すべてを経験しなければならないわけだよね、要するに。それはちょうど、例えば、そうだね、もし作曲家になりたいとして、譜面も書けないでは当然作曲家になれないよね。あるいは数学の勉強をする場合、これは数列にしろそうだし、あるいは微積にしろそうだし、あるいは関数にしろそうだけれども、その土台としては、やはり四則計算、つまり足し算、引き算、かけ算、わり算だと思うんだね。こういうものをクリアしていった段階で、徐々に高度な学問に到達していくと。

これと同じで、徐々に高い世界を経験し、最終的には認知経験滅尽、つまりニルヴァーナに到達すると。そのニルヴァーナに到達したときには、すべてを超越しているということなんだよ。理解できるかな。

（質問者）ということは、最終的な目的というのは、宇宙との合一というようなことを考えてよろしいんでしょうか。

（尊師）最終的な目的は、宇宙を超越することです。つまり、なぜ、真理というのが神々の世界にまで浸透しているかというと、神々も宇宙の破壊と同時に、その宇宙には存在できなくなるんです。だから、宇宙を超越しない限り、結局本当の意味での自由・幸福・歓喜は得られないんだよ。そこから仏教とか、あるいは真理とかいわれるものは存在しているんです。

（九一年十一月二十三日・東京大学）

●神

（質問者）先程、人間は神になり得る要素があるとおっしゃいましたが、どのような過程で神になれるのでしょうか。

（尊師）まず、神とそれから人間の違いを検討した場合、それは、俗にいうところの智慧、そして徳の違いということができると思います。

この智慧とは何かというと、要するにわたしたちが持っているポテンシャルとアビリティー、つまり潜在的能力とそれを具体的に発現させることのできる能力と。例えば、相手の本質を見抜くことができたり、あるいは神々と実際に対話できたり、あるいは他人の過去世やあるいは未来世を見抜く力があったり、あるいは他人の煩悩がどのようなものであるかを理解できたり、あるいは未来において何が起きるかを理解できたり、あるいは人が想像もつかないようなことを現象化する、このような智慧と徳を有する魂を、仏教では、あるいはキリスト教では神といっています。

　ではなぜ、キリスト教の神がそうなのかというと、聖書を見ていただいたらわかるとおり、例えばモーセが、神に対して大変な帰依をしていると。そうするとその神は、ユダヤ人に対しては、滅びさせることはなく、エジプト人に対しては、例えば、長子、一番上の息子だけが死ぬといったような現象を巻き起こしたり、あるいは飢饉を生じさせたりする。そしてこのような力を持った存在、これをもって神と定義しているわけです。

　で、人間はそういうことはできるかというと、今の科学は発達していますから、それに近づいていますが、なかなかできないということがいえると思います。

　しかし、わたしたちが瞑想修行を続けていくと、智慧、あるいは徳というものは増大します。そして智慧、あるいは徳は増大することによって、わたしたちはそのようなことが可能になってくるのです。

（質問者）修行をして、死んだ後に神になるんですか。それとも、またさらに輪廻転生を重ねて霊格を上げて、徐々に神に近づいていくという形なんですか。

（尊師）この人間の生の段階でも、修行を続けていくと徐々に神々としての要素というのは構成されてくるというのが仏教的な考え方です。　（九二年六月四日・北海道大学）

●カルマの法則

（質問者）仏教の根本的な考え方として「カルマの法則」がありますね。そのカルマの法則は、例えばある人が意地悪をしたら、条件が整った段階でその人は自分が冷たくした報いを受けるということですね。そういう一般的なレベルでのカルマの法則は非常に理解しやすいんですが、仏教には、もう一歩突っ込んだカルマの法則、つまり、ある人と物理的に接触するだけで、尊師がおっしゃったその人の「経験の構成」が移っていくんだという次元になってくると、僕みたいな凡夫にとっては非常にわかりづらい領域になってくるんです。基本的には深い瞑想体験の中でそれを理解していくしかないのかもしれませんが、ある程度ご説明いただきたいと思うんですけれども。

（尊師）なぜ仏道修行者が修行するのか、なぜ真理を探求しなきゃならないのかというと、要するに、それは心の本質というものは、すべてを映し出すといわれているからなんです。心の本質がすべてを映し出すとは何かというと、例えば先程おっしゃられた経験の構成、これが映し出された場合、例えば自分のなした行為が即投影され、そして現象化されるということになると。で、そのスピードが速ければ速いほど、自分のなしたカルマというものはわかりやすくなってくるのです。

　ところが、一般的にはそこへ到達するためには、相当な時間がかかると。ただ、それを例えば成就者といわれる修行者にザンゲをしたりすると、その成就者が自分の経験の構成を映し出してくれて、カルマの法則を理解させやすくしてくれるということがあるわけですね。

　仏教は教えだけになった段階で衰退すると予言されているのは、仏教の教えは高度であると。そして、その根本となっているカルマの法則というものは、結局クリアな、透明な心の本質――ま、意識でもいいでしょう――意識の状態によってのみ映し出すことができると。しかし、それを映し出すことができなくなれば、その教えというのは滅びるんだというふうに考えていただいたら、質問の答えになるんじゃないかと思うわけです。

　ですから、できるだけ多くの人が成就し、そしてその人たちを通してカルマの法則を投影する。これこそが、最も早くこの世の中を真理によって照らすことのできる早道だと考えています。　（九二年六月十四日・名古屋大学）

●絶対幸福

（質問者）功徳を積むと幸福になるということですが、これは絶対幸福とは違うのでしょうか。

（尊師）そのとおりだよ。つまり、功徳を積んで得られる幸福というのは、絶対幸福でもなければ絶対自由でもなければ、絶対歓喜でもありません。

　まずわたしたちが第一段階で何ができるかというと、善行を行なうことができるわけだけれども、これはわたしたちの観念上、理解できるからそれができると。第二ステップとして、観念上理解できるようになったならば、徳の実践を行なうことができると。第三段階として、徳まで積んだら次は寂静の修行が理解できるようになってくる心の状態が生じると。第四段階として、そこまでわかると、今度はカルマの法則が理解できるようになってくる段階があると。で、この第四段階がある段階に達すると、瞑想の究極に至ることができると。そこで瞑想の四つの段階の最後のサマディへと入ると。ここで、人間の身体から別の身体が抜け出して、サマディの経験を行なうことができると。そして最終的に、そのサマディの最終地点に解脱が生じると。で、解脱が生じた段階で、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の条件が得られると。そして、解脱によってこの現世と、それから解脱した状態との対比の意識が生じてくると。で、それが、離解脱相通見解といわれているわけだけれども、その状態が生じてくると。そこで絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜が生じる、ということです。だから、功徳は第二ステップだね。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

◉神通力と解脱

（質問者）神通力を使うには、功徳を積むことによってある程度エネルギーをためる必要があるということですが、それだったら、あまり神通力は使わずに、功徳を積んで、それをずっとためておいた方が、悟りを得るためにはいいんじゃないかと思うのですが。

（尊師）いや、そうではなくて、功徳を積んで、法則の実践を行なうことによって、解脱・悟りを得ると。そして解脱・悟りを得る途中のプロセスに神通力が身につくんだと。で、質問があるんだけれど、例えば目があるとしましょう。で、見るなといっても見えるでしょう。どうかな。

（質問者）そのとおりです。

（尊師）耳があるとして、聞くなといっても聞こえるでしょう。どうかな。

（質問者）そうです。

（尊師）神通力とはその程度のものです。結論からいうと。

（質問者）そうすると、神通力とは、修行の過程で得られるものであって本質ではないということですか。

（尊師）本質ではないというよりも、自然と具足していくものであるということだね。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

◉願望成就

（質問者）世の中にはいろいろな宗教がありますが、オウム真理教以外の宗教は実践しても意味がないとお考えですか。

（尊師）これについては、オウム真理教の教えのみを実践しなければ結果が得られないというわけではありません。しかし、例えば、宗教を実践する→結果が得られるというパターンがあったとしてだよ、例えばあなた方がある願望を持っていたと。そして、その願望が成就されたと。それで、その宗教は価値があるんだと断定したと。確かにそれは、あるカテゴリーにおいては、その教えは正しいといえると。しかし、それがこの宇宙の全体系から見て誤っているとしたならばどうだろうかと。

例を挙げるならば、ここにサラ金があると。そのサラ金からうまく金を借りる法がありますといって、その法を実践して、たくさん金を借り、その金を借りたときは大変な喜びを経験することができたと。しかし、そのサラ金からはいずれ取り立てが来るし、返さなきゃならないということを、もし忘れてしまっているとするならば、未来において大きな不幸が存在すると。

同じように、例えばここにサラ金があると。しかし、そういうものには頓着せずひたすら努力しなさいと。そして、働いて、このような方法が合理的にお金を稼ぐ道ですよという教えがあったと。

この両方とも、お金をあなたに与えることになると思うわけだけれど、前者は未来において不幸を生じさせる因を持ちながら瞬間的幸福を与えると。後者は、未来において不幸をもたらす因を与えないで幸福をもたらすということになるということだよね。

だから、実践してみなさいではなくて、まず教えの全容がどういうものなのかを理解することから、わたしは、宗教というものは始めるべきだと思います。

（九一年十一月二十三日・東京大学）

◉物質的欲望

（質問者）物質への欲望が、わたし自身は非常に止み難いものがあるわけです。それでも解脱は可能なのでしょうか。

（尊師）まず、物質的欲望そのものを所有していない魂は存在しないと、第一段階では。特にこのように物質的な宣伝がどんどんなされている以上、それに対しての欲望が増大されるのは当然であると。

そこから、どのような形で物質的欲望を取り払っていくかという作業こそが、宗教的課題の一つの大きな目的であると。そしてその大きな目的である物質的とらわれの超越、それをなしたときに一つの悟りへと到達すると。ですから、初めはどの人でも——これはわたしもそうですけれども——物質的な欲望は当然有していると。しかし、それは修行によって少しずつ少しずつ弱められ、そして完全に超越することができます。

ですから、今あなたの持っていらっしゃる物質的欲望、これがあるから悟れないんだとか、解脱できないんだとお考えになる必要はないです。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

◉願望の達成

（質問者）自己の持っている音楽を自由に引き出すためにはどういうふうにしたらよろしいでしょうか。

（尊師）それは、仏教でいわれているところの思念、要するに一つのことを記憶修習し続けると。

例えば、このような人がいます。これは事業を営んでいる方ですが、一生懸命功徳を積まれると。そして、自己の事業を拡大したいという思念だけをなさると。そして現に数年間で、その事業は、いろいろな角度での拡大をなしたと。しかしその人の意識の中には、その事業を拡大すること以外の意識は存在しないわけです。ですから、その他の現象をわたしから見るならば、あまり良くなっていないが、事業が拡大して経済的な部分だけが増大していると。

同じ例で、全くかなわない恋に対して、その恋をかなえ

たいといって、ずっと思念をし続けていた人がいらっしゃると。で、その人はひたすら、やはり功徳を積み続けられたと。そして、やはり同じように四年後にそれを達成しています。

ですから、思念ですね。つまり、自分はこうなりたい、こうなるんだという、強い思念を持たれれば、当然達成はできると思います。

(質問者) では、思念しても達成できない場合はどうなるんでしょうか。

(尊師) いや、それは思念が足りないんだと思います。つまり、いろいろな煩悩によって思念の集中が弱いんだと考えるべきです、それは。で、もし、それでも、達成できないとしたら、それは善業の量が少ないと考えるべきだと思います。

(質問者) 善業の量というのは、どのようにしたらわかるんですか。

(尊師) それはステージによって違います。例えば、わたしたちのレベルになってくると、その善業の量というものは、光の強さとか、あるいはその光の粒の色とか、そのような視覚的なもので測ることができます。

(質問者) わたしは凡夫なんでわからないんですが、どうしたらいいでしょうか。

(尊師) それは、日々の生活の中で、喜びと苦しみのどちらが多いかをじっくりと分析してみられたらいかがでしょうか。もし善業が多ければ、喜びが多く苦しみが少ないはずです。もし善業が少なければ、喜びが少なく苦しみが多いはずです。

(質問者) じゃあわたしは、喜びが少ないですから、悪業が多いということですか。

(尊師) その場合は、善業優位でなくて、悪業優位だと考えるべきだと思います。

(質問者) 悪業優位から無理やり少ない善業を使ってでも、抜け出すことはできませんか。

(尊師) 要するに、達成したいわけですね、何かを。

(質問者) はい、そうです。悪業があろうとなかろうと、善業をとにかく引き出したいということです。

(尊師) そのためには、密儀的な特殊な例えばマントラ、祈り等があります。しかし、それはここでは伝授できません。今日の伝授したプラーマリー・プラーナーヤーマと、オウム瞑想を一生懸命行なわれれば、その可能性は高くなると考えられて結構だと思います。

(九二年六月十七日・東京大学)

第4章「公開! 解脱の境地」より

◉けがれ

(質問者) 先程"けがれ"とおっしゃっていたのですが、そのけがれとはいったい何なのか、わたしにはわからないんですが。

(尊師) ここに第三者的な人がいたとしましょうね。この人に対して何を思うのかというと、例えば視覚的に見、聴覚的に聞き、それから嗅覚的に嗅ぎ、そして味覚的に味わい、触覚的に感じると。で、心の中に、あるいは意識の中に何かを思うと。これらの相互作用によって、対象を認識するわけですが、この認識そのものをけがれといっているわけです。

じゃあ、何をもってけがれのない状態とするのかというと、この対象に対して真に自由・幸福・歓喜を得ていただきたいと思う心、一点の曇りもなく、そのような心が生じる状態を形成したとき、その心をもって心のけがれなき状態というふうにわたしたちは言っているわけです。

(質問者) それは、『般若心経』でいう色ということですか。

(尊師) 『般若心経』では、六処、つまり眼・耳・鼻・口それから触覚・意識というのは空であると説いています。空であるとは何かというと、実体がないと。実体がないとはどういうことかというと、今までの情報によってそれを判断しているだけであって、それ以外の何ものでもないんだよというのがその意味合いなわけです。

そこからもう一歩進めて、空は空でOKなんだけれど、その空というゼロの状態ではなく、プラスの状態をいい状態であるとわたしたちはいっているわけです。つまり、その対象の本当の成長を願う心というか。しかもそれは見返りを求めない心、その状態をもって、"心のけがれなき状態"といっているわけです。

(質問者) "色即"の即はイコールの空で、「空即是色」の即はイコールとはまた違うということですか。

(尊師) 「色即是空」はOKです。「空即是色」もOKです、これは。しかしそれは修行の途中の段階であると。それは、オウム真理教ではマハームドラー、つまり心の静止の状態を体験するわけですが、そこをもって「色即是空、空即是色」という言葉としているわけです。

そこからは逆に空に綺麗な色づけをすると。その色づけとは何かというと、すべての衆生の本当に幸福、発展を願うということを求めるための、俗にいうところの大乗の種子を植えつけていくわけです。その成長過程をもって、心のけがれなき、ボーディサットヴァ、到達真智運命魂の状態というふうに説いているわけです。

(九二年六月七日・杉並道場)

◎広がりある意識

（質問者）悟りを開いた状態を実際に体験した人は、どんなふうに感じるのかを、短い言葉で結構ですから、お話しいただけるでしょうか。

（尊師）空間に漂う広がりある意識という言葉で理解していただけるかな？　つまり、わたしたちの意識というのは、一般的には固定されているわけだけれども、その固定の状態がいっさい外された意識の状態であるというふうに考えてください。

（九二年六月四日・北海道大学）

◎最終地点

（質問者）仮に最後のステージまでたどり着いたとして、その人はどうしなければならないのでしょうか。

（尊師）二つ道があって、一つはそこから大完全煩悩破壊といって、この世界から離脱して、もう二度とこの世界に帰ってこないという生き方と、もう一つはそうじゃなくて、肉体を所有して多くの人のために真理の法を説き明かすためにできるだけ長くとどまって、輪廻を繰り返すというか、生まれ変わるという二つの生き方があります。

（質問者）尊師はどちらを採られているのですか。

（尊師）わたしは後者です。

（九一年十一月二十三日・東京大学）

◎最終解脱

（質問者）尊師は最終解脱をされているということですが、自分としては、解脱に最終段階があることが信じ難いんです。解脱より上のレベルのものはもう何もないんでしょうか。

（尊師）いえ、正確な言い方をするならば、解脱の上は存在します。これはどういうことかというと、まず、解脱によって真我とそれからグナ、あるいは真我とわたしたちの経験しているものの構成との分離が完全に起きますが、その状態で生存し、そして魂の救済を続けると、もともと自分の持っていた要素のグナではなく、他人の要素のグナの干渉を受けます。で、瞬間的に解脱した意識状態が、そこで崩れ去ることがあります。そしてそれを、またぬぐい去る作業が繰り返し繰り返し、続けられると。

ですから、最終解脱をしたとしても、もしそのときに、すべての現象を捨断し、そして、孤立の状態、独存の状態に入らなければ、それは最終の段階であって最終の段階でないということができるわけです。

それはちょうど、どういうことかというと、鏡にいろいろな色が塗られていたとして、その色をいったんふき、完全に払った状態であると。しかし、それは現実の生活において、特に救済活動の、例えばエンパワーメント等の行為を行なうと瞬間的に色がつきます。で、その瞬間的に色がついたものを瞬間的に払い続けるということが大乗の修行になるわけですが、その大乗の修行の終焉によってのみ、最終の確定した状態での解脱ということができるといえるでしょう。

（九二年六月十七日・東京大学）

◎絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜

（質問者）低俗的な言い方かもしれないけれど、最終解脱に至って、幸せなんでしょうか、今。

（尊師）絶対的な自由・幸福・歓喜というのはあるよね。

（質問者）それが自分にとって何なのか、そういうのはどうお考えでしょうか。

（尊師）自分というものを止滅しているからね。まあ、それに対して、一元と二元とは違うわけだよ。つまり、思考する段階というのは二元だから思考できるわけでしょ。対象があって、その対象に対していろんなデータを当てはめて分析すると。わかるよね、これは。ところが、それがもう全部終わってしまった段階というのは、一元だから、それについて表現はできないんだよ。ただ、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という状態を表現することはできるということです。

（質問者）言ってしまえばそれだけのことですか。

（尊師）そうだね。言ってしまえばそれだけのこと。しかし、その三つがすべてだとわたしは考えている。それは君もそこへ到達したらそうなります。

（九一年十一月二十四日・京都大学）

◎絶対と相対

（質問者）先程、絶対幸福とか絶対自由とか、絶対とかいう言葉を使われておられたんですが、絶対というのは相対とどう違うのでしょうか。

（尊師）絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の絶対という言葉と、それから相対の違いは、まず相対というのは外的情報によって与えられる幸福・自由・歓喜であると。これはおわかりでしょうか。

例えば、恋をして幸せであると。例えば、そうですね、おいしいものを食べて大変満足できるとか。あるいは、例えば忙しい試験等から解放されて自由な時間が使えるようになって自由を感じると。つまり何を言いたいかというと、不自由に立脚した自由であるとか、あるいは、不幸に立脚した幸福であるとか、あるいは不快に立脚した歓喜であるということがいえると思うんですね、相対というのは。

ところが絶対というのは、それらの情報から完全に解き放された状態に生じる、意識よりももっともっと深い、高い精神的状態であるというふうに考えていただいたら、よ

く理解できると思います。

つまり情報によらないがゆえに変化がないと。変化がないがゆえに絶対という言葉が使えるわけです。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

第5章「教えて！不思議現象」より

●オカルトブーム

（質問者）最近、特に十代とか二十代とかの若者の間で、いわゆるオカルティズムであるとか、あるいは霊的な現象だとか、不思議なものに対するブームのようなものがあって——例えば、占いとかおまじないの専門の雑誌なんかはヘタな少女マンガの雑誌なんかよりよっぽど部数が出ているという状態があるわけですが、このような、いってみれば興味本位の霊的世界に対するブームについてはどう思われますか。

（尊師）興味がないより、まず興味があった方がいいと。そして、その興味もできるだけ崇高な興味へと移行できるような、普段からのフィードバック、つまり、思索のフィードバックを繰り返していただきたいというのが今のわたしの考え方です。

（質問者）ただ単にそういう世界に対して実利的なものを求めたりとか、あるいは迷ったときに占いの先生のところに行ったりとか、そういう形も別に構わないということですか。

（尊師）構わないというよりも、仏教的教えでいうならば、低級霊域——まあ皆さんのよく知っている餓鬼の世界といわれるわけですが——餓鬼の世界へ転生する種子を繰り返し繰り返し記憶しているというふうにとらえていただいたらいいと思います。

今の言葉ではちょっと理解できないだろうから少し付け加えるならば、この低級霊域というのは、わたしたちが霊的なものを煩悩の単純な修習によって使った場合に行く世界であるというふうに考えてください。

（質問者）このようなブーム自体に対して、その原因とか、あるいはその影響とか、そういったものについて、どのような見解を持たれていますか。

（尊師）それは、この現実の粗雑な世界と、それからアストラル世界、つまり霊的世界とが近づいてきているというふうに考えています。したがって、次における破局というのは、オカルティックな破局が起きるんじゃないかというのがわたしの見解です。（九二年六月四日・北海道大学）

●チャネリング

（質問者）最近、チャネリングなどの霊的なものが流行っていますが、そのような瞑想の仕方をどう思われますか。

（尊師）意識の中の下から三つ目の低級霊域と呼ばれる世界がありますが、これを散策する上では大きな利益があるのではないかと考えています。しかし、全体的な意識の構成を経験するには、あまりにも貧弱すぎる教えであるというのがわたしの認識です。（九二年六月十七日・東京大学）

●臨死体験

（質問者）最近、テレビや雑誌などで臨死体験がだいぶ取り上げられています。その内容は、黒いトンネルを抜けると、お花畑とか三途の川があったりして、そこで自分に身近な人がいて「戻りなさい」とか言われて戻ったら生き返ったという形をとっているようなのですが、臨死体験をした人たちが経験しているプロセスについて、説明していただきたいのですが。

（尊師）ヨーガの修行を行なうと、いろんな段階の状態があるわけですが、まず第一番目に、体温の上昇を経験すると。これは皆さんが考えているような、低い体温ではなく、四二度とか四三度といったような高い体温を経験します。

これによってわたしたちの肉体の元素がどんどん変わり、そしてその次に現われてくるのが夢の世界です。ここでいう夢とは皆さんが見ている夢とは違い、もっとリアルで、そしてその世界の意識ははっきりとしています。

そして、その次に現われるものはバルドーの世界、つまり、わたしたちが輪廻するときの世界が現われてきます。ここで、あなたのおっしゃるとおり、まず黒いトンネルが象徴的に現われてきます。この黒いトンネルとは何かというと、わたしたちの意識がわたしたちの肉体から抜け出すときの状態です。そして、意識が肉体から抜け出し、訓練がされていないとそこから帰ってこれないと。帰ってこれないがゆえに、それを死という形で表わしていると。しかし、もしまだ生命があり、生き続けなければならないカルマが存在するとするならば、そこで、「帰りなさい」という霊的存在によってこの肉体に戻されるわけです。

（九二年六月九日・仙台説完ホール）

●先祖霊

（質問者）自分の先祖の中で変な死に方をした人がいる場合、自分に霊障が出るということはあるのでしょうか。

（尊師）ないです、それは。ありません。

だってご先祖様っていうのは、ほとんど四十九日間で他に転生してしまうわけですから、地獄に生まれ変わったり、餓鬼に生まれ変わったり、動物に生まれ変わったりしているわけですから、ありませんね、それは当然。

（八七年十一月一日・福岡支部）

◉供養

（質問者）わたしの知り合いで霊障があると言われて解脱供養した人がいるのですが、その後、運が良くなったんです。それはどういうふうに考えればいいんでしょうか。

（尊師）それは布施をなさったからじゃないですか。一時的に布施をなさって、それはだれに対してもそうだけれど、お金をあげたならば、その功徳は返ります。だからそう大したカルマじゃなかったんでしょうね。

ただね、一つ聞きたいのは、その後、その人がずっと幸福なのかどうかということが問題なんだ。わかりますか。真理じゃなくても、例えば人に物を施せば、それはカルマになって必ず返ってきます。真理には永続性があるけども、真理じゃないものには永続性がない。だから、大切なことは、そのとき変わったことが大切なんじゃなくて、その変わった状態が永遠に続くかと。そしてその後、より高くステージを上げられるかどうかが問題なんですね。

（八七年十一月一日・福岡支部）

◉マリア像の涙

（質問者）石で彫ったマリア像から涙が出たり血の涙が出たりするという話があるのですが、それは本当でしょうか。

（尊師）まずその前に、確認しなきゃならないことは、マリアは崇拝されるべきではありません。なぜならば、これはキリストも言っているとおり、主なるキリストを崇拝すべきであって、その母親はただ生んだにすぎないと。ところが、どうしてもキリストを崇高に仕上げていくために、家系的血縁というものにウェイトを置くことにより、教義の安定を図ったという欠点があります。

次に、涙が出たり血が出たりするというのは、これは明らかに低級霊域の現象です。ということは、マリアの血を流させたり涙を流させたりしてるのは明らかに低級霊域的現象であると見るべきだと思います。そして、低級霊域の特徴というのは貪りであり、今のキリスト教社会はどうかというと、まさに貪りが中心の社会ですので、これは一致しているといえます。しかし、それを逆手にとって、悔い改めなきゃいけないんだと言いつつ、実際に悔い改めるための法則そのものがあるかといったら、実際はないと。だとするならば、それは矛盾だよね、わかりますか。

（質問者）低級霊域のどういうものが涙を流させているのですか。

（尊師）低級霊域で思念が強ければ、そういう現象は起きます。だから、低級霊域の魂で、やはり熱狂的なキリスト教信者じゃないかと考えるべきでしょう。

（九二年六月十七日・高崎支部）

『尊師に聞く』2 第1章「宗教は一つの道」より

◉道徳

（質問者）正しい教え・真理というのは、一般常識や道徳に反しないものなのでしょうか。

（尊師）そうだね、テーラヴァーダの仏典の中にも「一般的な道徳的な教えにはつき従い」というのがありますから、それはそれでいいと思います。

ただ問題は、それより高いレベルになったときに、常識的な部分でカバーできるかどうかというのはまた別問題であるということがいえるでしょう。しかし、いかなる教えであろうとも、その背景にある論理というものは、はっきりしていると、明白であるということはいえます。

（質問者）ということは、オウム真理教の考えでは、信者でなくとも正しい行ないをなしてる者は、それはそれなりに認めると考えていいんでしょうか。

（尊師）どの人もオウム真理教の信者になりなさいとはいいません。例えば、オウム真理教の活動の中で、スリランカのテーラヴァーダ仏教を保護している部分もありますし、あるいは、チベット仏教を保護している部分もあります。

ということはどういうことかというと、彼らの実践は、それなりに評価しているということがいえるでしょう。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

◉偉大な仏教哲学者

（質問者）本当の宗教というのは、完全な体系があって、それをクリアしていく、そのプロセス——つまり、最初に真理があって、それを知って、それをクリアしていくということでしたが、他の優れた哲学者ですとか思想家というのは、そこに存在している真理を学ぶのではなくて、それを試行錯誤して見つけていきます。そういう生き方にも僕はひかれるんです。ところが、宗教だと、ただ救われたいという気持ちも持ってしまうわけで……。

（尊師）言っていることはよくわかるよ。ただ、だとしたらね、なぜ君が東京大学にいるのかなという質問があるよね。つまり、どういうことかというと、最高の大学に入るということは、実際素晴らしい教授がいて、その教授の教えを学び、最短で自分の目的を達成し、例えばその教授を超えるということになるわけでしょ。学問というのはそういうものだと思うけれど、どうだそれは。

宗教も同じだよね。例えば、哲学、まあ仏教哲学となぜいわれるかというと、すべてが完璧な論理なんだね。ただそれは、例えばサキャ神賢——まあ、お釈迦様だよね。わたしたちはサキャ神賢と呼んでいるから、サキャ神賢、つ

まりサキャ族の賢い神様というふうにとらえてほしいわけだけれども――このサキャ神賢の教え、この教えがどれくらいの期間でできたかというと、サキャ神賢の話を聞くと、要するに五神通、五つの神通力を得てから四アサンキャ十万カルパ――十万カルパというのは、十万回この宇宙が創造され破壊された間だけれど――それほど長い間ずっと修行なさって、今から二千六百年前、真理勝者、あるいはバガヴァン、つまり世尊として登場なさったんだということなんだよね。

それだけ偉大な経験、偉大な知識、あるいは偉大な分析を行なった、そういう教えが存在しているのにだよ、重箱の隅をつつくような一部の哲学、あるいは自己の思索というものが価値があるかという問題があると思うんだよ。

では、どういうことかというと、例えば何の条件もないところに子供を放り出したと。そして、そこから例えば足し算の法則を発見しなさいとか、あるいは引き算の法則を発見しなさいとか、あるいはかけ算や割り算の法則を発見しなさいというのは、これは大変なことだと思うんだよね。でも、その法則を子供たちが発見したからといって、いったい何になるんだと。もちろん、その子供たちにとっては智慧の進歩という意味においては意味があるかもしれないけれどもね。わたしの言いたいことはわかるよね。

つまり、それだけ完璧な教えがある以上、その完璧な教えの全体系を、まず初めは疑問を持ちながらでも構わないから理解し、そして、自分の中でしっかりと論理的に分析していく訓練をすることの方がわたしは価値があると思うんだけれど、どうだそれは。

（質問者）それですと、個人の尊厳が非常に軽視されているという気がしますが。

（尊師）その尊厳そのものが、もうすでに慢なんだよ。つまり、尊厳そのものを超越することが修行課題にあるわけだから、その尊厳という言葉そのものが問題になってくるわけ、真理を実践する場合はね。

そして、個人の尊厳を壊して、より高い自我を形成していく、あるいはより高い霊性をつくり上げていくことが修行なんです。

（九一年十一月二十三日・東京大学）

●偶像崇拝

（質問者）初期の仏教では、偶像崇拝を禁止していたはずですが、この本（オウム出版の書籍）にあるような絵は、偶像崇拝に当たると思います。そこらへんはいかがでしょうか。

（尊師）サキャ神賢は、偶像崇拝を禁止したわけではない。サキャ神賢が禁止なさったのは、仏陀釈迦牟尼以外のものについての崇拝を禁止なさったんです。だから、原始仏教を最もきちんと押さえているラオスにおいても仏像はあります。それは日本の仏教の研究家の間違いです。

例えば、ビンビサーラ王がね、「何を崇拝したらいいか」と尋ねたとき、サキャ神賢は「わたしの髪の毛を崇拝しなさい」といって、髪の毛を与えられたという話がある。これも一種の偶像だよね。どうかな、それは。

つまり、心の内側にあるアートマン、真我だけに対する崇拝ではなく、そのような形で具体的な、エネルギーのこもったものに対して崇拝するというのは、インド仏教の常識です。

（九一年十一月一日・信州大学）

●無我と非我

（質問者）インド的な仏教というものは、すべての存在にアートマンを認めない「無我」、それから無常なものであるということを主張するものだと思っています。その場合に、わたしが無我である、つまりわたしという者は本当には存在しないということと同時に、自分がないんだから他人もなくなるわけですね。で、本質的には他人の存在もないと。そうした場合に、他人が本当には存在しないという立場で、いったいどのように他の人とかかわるべきかとお考えでしょうか。

（尊師）まず、その無我の論については、チベットと、それから中国の仏教間の争いで、中国仏教の敗北という形で終わった。ところが、今あなたの勉強している哲学自体のとらえ方が〝無我〟ということでそのときと同じ過ちを犯しているわけだね。

実際問題〝無我〟という言葉は正しくなくて、〝非我〟という言葉の方が正しい。つまり「我（われ）に非（あら）ず」と。つまり何を言いたいのかというと、例えば、『大完全煩悩破壊経』――これは漢訳でいくならば『大般涅槃経』だね――とか、あるいは『創世期経』あるいは『転輪獅子吼経』等に、はっきりと釈迦牟尼は、〝アッタ〟――パーリ語でね――つまり、サンスクリット語では〝アートマン〟の存在を認めています。

で、その認め方として、どのような形で認めているのかというと、アートマンは三界には存在しないと。つまり三界には存在しないとは、この欲望の世界、形状の世界、非形状の世界には存在しないと。

それからもう一つは、君のわかりやすい言葉を使うならば五蘊、つまり肉体、それから感覚、それからイメージ、それから経験のとらわれ、それから識別、この五蘊には存在しないと。この五蘊というのは、これらを集積したものがわたしたちであると釈迦牟尼はとらえていらっしゃるわけだけれど、その五蘊には存在しないということなんだね。

ではどこに存在するんだと。それは三界と五蘊を越えた

ところに、アートマンは存在するんだと、アッタは存在するんだということなんだよ。
　だから、そうなってくると、今度はどうなるかというと、ヴェーダーンタ的な考え方ではなくて、サーンキャ哲学的な考え方になってくるわけだね。
（質問者）サーンキャ二元論ですね。
（尊師）うん。サーンキャ二元論とは何を言いたいかというと、三界と真我との区別と、五蘊と真我との区別になるよね。
　そうなってくると、その真我の特徴とは何かというと、つまりアートマンの特徴とは何かというと、先程言った絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜であると。そしてその本質的なものは、ほとんど自と他の区別は存在しないと。しかし、ちゃんとした一応個我は存在しているんだということだよね。
（質問者）わかりました。じゃあ、ちょっと確認したいんですけど、要するに、尊師は、アナートマン（an-ātman）的――否定詞のanね――わたしではない、非我ととるのが正しい仏教だというふうにお考えになっているのですね。
（尊師）そうです。それは、パーリ語を英文から訳す場合の辞書でも同じように「アッタではない」ととらえています。
　ただね、あなたのような考え方を、実際問題としてスリランカの高僧がとっている場合もあります。日本の仏教学者でも、中村元先生は無我というふうにとらえているし、増谷文雄先生は非我ととらえています。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

◉真理のステップ

（質問者）オウム真理教のベースは仏教であると思うんですが、先程配られた本を見ていると、キリスト教の黙示録の話が扱われていたり、ヒンドゥー教のシヴァ神が出ていました。仏教の無常観と、キリスト教のプロテスタント的な絶対神の前の人間の無力感はまるで違うものですし、ヒンドゥー教のカースト制というのは、仏教が打倒しようとしたものだと思うんです。で、そういう相容れない世界観を持った三つの宗教を、なぜその本の中で同列に扱っているのでしょうか。
（尊師）つまり、真理にはステップがあると。それは、キリスト教は仏教観による神聖の世界、これは生存のみの世界へ至るための修行を行なうわけです。で、この段階というのは、サキャ神賢も何生も何生も繰り返していらっしゃると。これはわたしもそうだがね。
　その段階が通過すると、次はその生存の世界の最高の天界、これは超越真子天というのがあるわけですが、その超越真子天へと至る修行へと入っていくと。で、この生存の世界の最高の神は何かというと、それは、わたしたちがシヴァ大神といっている生命体、要するに偉大なる神であると。
　そして、その生存を超えた非生存の最高の境地が、マハー・ボーディ・ニルヴァーナであるということがいえるわけだね。つまり、これは一連の流れであると。
　そのステップを確定させていった方が、より目的がはっきりしていて達成もしやすいという意味において、この三つが内在していても矛盾しないと考えます。

（九二年六月十七日・東京大学）

◉神性・仏性

（質問者）民族学的な立場からお伺いしたいんですけれども、洋の東西を問わず、人類が始まって、少し知識がついてきてから、それこそ石を拝み、木を拝みしていたわけですよね。つまり、森羅万象すべてが神であり、仏であると。これについて、尊師はいかがお考えでしょうか。
（尊師）いろんな現象に対していろんな考え方があるわけであって、あなたの言っていらっしゃることを、わたしの立場から述べるならば、それはそのとおりであると。
　で、そのとおりであるといってもピンと来ないかもしれないから、わかりやすく説明するならば、この粗雑な次元というのは、地・水・火・風という四大種から構成されていると。この「地」というのは固体成分であり、「水」というのは液体成分であり、それから「火」というのは熱成分であると。「風」というのは気体成分という表現よりも、どちらかというとエネルギー、例えば核融合その他のエネルギーというふうに考えていただきたいわけだけれど、この四つの成分を土台とし、例えば、わたしたちのこの肉体も、粗雑な部分はその四つのカテゴリーに分類することができると。
　で、例えば木にしろ、例えば石にしろ、そういう意味でいったら、地の産物、あるいは水の産物、あるいは地・水・火の産物であるということができると。そして、わたしたちの肉体の地・水・火・風を司っている真理勝者がいるわけです。それを考えるならば、同じように地・水・火・風の四大種で構成されている物質に神が存在し、仏が存在していると考えてもおかしくはないということになります。
　また、こういうこともいえます。真我が通過する途中の段階で、人間から神に至り、神から仏陀に至っていくわけだけれども、ということはどういうことかというと、わたしたちの内側に神の要素が存在し、あるいは仏陀の要素が存在していると。そうすると、わたしたちと同じように四大種で構成されているものの中に神・仏が存在していると

しても間違っていないということになります。

（九一年十一月二十四日・京都大学）

◉神話

（質問者）北欧の神話などに興味があって、いろいろと読んだりしています。世界三大宗教以外の宗教、あるいは自然信仰とかいうものに関してはどのような見解をお持ちでしょうか。

（尊師）一ついえることは、それらはすべて存在の世界、仏教的言葉を使うならば、愛欲の神々の世界の範囲内に属する話なんだね。だから、例えばそれは、この日本の歴史とか、アメリカの歴史とかと同等にわたしの中に扱われているというふうに考えてください。

だから、そういう神話については、ある意味で常識であると。先程言った原始キリスト教や、あるいは仏教というものは、それらの世界を実際に体験する、そしてそれを超えるための教えが内在しているものであるというふうにわたしは理解しています。

もっと別の言い方をすれば、でき上がったビデオを見る、これが神話を読む立場であると。ところが、原始キリスト教や仏教は、そのビデオを制作するというふうに考えてもらったらいいかもしれないね。つまり、自分の目で確かめられる宗教であると。そういう世界を実際に経験できるということです。

（九二年六月四日・北海道大学）

第2章「真理と科学」より

◉神秘性と科学

（質問者）もともと宗教は精神科学の本流だと思っているのですが、現在は、宗教というと、念力みたいな摩訶(まか)不思議観が通ってます。二十一世紀に向かって、宗教は、精神科学されたものに本当に到達できるのか、それとも永久に摩訶不思議というものを前に出して宗教というものが進んでいくのか、疑問に思うのですが。

（尊師）結論からいうならば、摩訶不思議宗教、この摩訶不思議宗教の要素がより増大された形で、より神秘的なものと、そしてそれを科学的に分析する二つの要素を備えた宗教が登場し、そして二十一世紀を担うということが、これは『ヨハネの黙示録』、あるいは『ノストラダムスの大予言』、あるいはボン教の予言に説かれています、ということです。

なぜかというと、今の摩訶不思議というのは大した摩訶不思議じゃないんだね。もっともっと高度な摩訶不思議現象を起こし、そして、それが結局は神の賜である、あるいは心の賜であるということをはっきりと示し、そして、それをかつ科学的に分析する宗教、この宗教が二十世紀の後半、一九〇〇年代に生じ、そして二十一世紀を担うということが、予言書に説かれているということだね。それで答えになっていると思うんだけれど、どうかな。

（質問者）宗教が摩訶不思議というものからどのように遊離していくのかということがよくわからないのですが。

（尊師）つまりこういうことだよ。その、もっとより深い摩訶不思議を生じさせて、そのより深い摩訶不思議を科学的に分析しない限り、すべての宗教的な不思議さというのは証明されないでしょ。つまり、より大きな範囲の集合があって、そのより大きな範囲の集合のすべてを証明しているとするならば、その中に内在している部分集合というものは、すべて証明されたことになるよね。ということです。

（九一年十一月二十四日・京都大学）

◉直観

（質問者）〝自分〟を理解するための科学的アプローチとして、例えばカナダの大学の先生が、実際に脳味噌を開いて脳味噌のある部分を電気的に刺激して、どのようなイメージを心の中に浮かべたかというのを調べながら、人間が思考するメカニズムを明らかにしようとしてるんですよね。で、その対局にあるものとして、宗教があって、例えば修行によって自分の中をよく見ていこうというような直観的アプローチをとっていると思うんです。オウム真理教では、どのようなアプローチをしているのでしょうか。

（尊師）まずオウム真理教の実践が直観的であるということは、まあ一部分は正しくて、一部分は正しくないと。

それは今日、わたしの前に、おとといまで〝アンダーグラウンド・エアータイト・サマディ〟といって、これは、ステンレスチェンバーで完全に空気の遮断された中に五日間、断水断食の状態で入っていた弟子が話をしたと思いますが、そのときの計測等は、最先端の、そうだねppmオーダーのデータの出る二酸化炭素の測定や、あるいは他のガスの測定、あるいは酸素の実際のパーセンテージも、小数点以下はゼロが三つつくまでの数値をしっかり出して、いつの段階で呼吸が停止し、いつの段階で呼吸が動き出しているというような実験を行なうとか、あるいは、真っ暗闇の全く光の入らないステンレスチェンバーの中で、フォトン、つまり光の粒が、どのチァクラからどの程度出ているという実験を行ない、その人の経験している内容が教義的に見た場合、どのチァクラに属しているということと、その場合の光の出方はどうであるかというのを科学的に検索する実験を行なうとか、あるいは磁気を使って、例えば大脳のどの部分を刺激すればどのような神経伝達の働きが起きるとか起きないとか、あるいは、温度に対してどの程度

耐えられるかということを、実際問題として科学的に測定するだとか、そのようなアプローチは行なっています。

ですから、単純にその直観的な実践だけを行なっているわけじゃないということをまず断っておきたいと。

それから第二番目として、なぜそれを行なっているのかというと、ヨーガの経典や、あるいは仏教の経典には、瞑想のプロセスが科学的に表記されているわけだね、例えば、この段階に入ると呼吸が止まるとか、この段階に入ると身体の緊張が取れるとか、この段階に入るとイメージが消えるとか。だから、そういう段階的なプロセスを、今から何千年も前のヴェーダや、あるいは二千六百年ぐらい前のサキャ神賢の教え等の中に見いだし、それを実際に科学的にフィードバックしているというのがオウム真理教のやり方なんです。

ですから、そのカナダの先生のやっていらっしゃることは、どちらかというと生理学的、あるいは解剖学的なアプローチだと思うが、わたしたちのやっていることは、瞑想を科学に還元し、フィードバックしているというふうにとらえていただいたらわかりやすいんじゃないかと思います。

（九二年六月四日・北海道大学）

◉進化論

（質問者）進化論について、オウム真理教ではどのように考えているのでしょうか。

（尊師）一部は正しいが、一部は正しくないというふうに考えています。

といいますのは、サルから人間へ至るプロセスの魂がもし存在するとするならば、実証的にわたしたちはそれを見ることができるはずであると。しかし、大きなカテゴリーでの生命体というのは存在していますよね、例えば爬虫類、あるいは両生類、あるいは哺乳類、あるいは鳥類といった形の大きいカテゴリーでの生命体の進化した形というものは存在していますが、そうではなくて、連続した状態でその現象を見ることはできないと。

で、これはカルマの法則に当てはめてみたらよくわかるわけですが、輪廻転生をする場合、確定した意識状態で輪廻転生すると。例えば動物にしろ、あるいは植物を形成している妖精にしろ、一通り原始仏教の理論によってすべては説明がつくわけですね。ですから、部分的には進化論は正しいが、全体的に見たら進化論は間違っているというのが仏教的見地だと考えていいと思います。

例えば、ある魂が動物の意識状態で転生した場合、それは明らかに動物として転生すると。そして、そのエリアが、あるものは地球にあるし、あるものは地球以外の生命の生存する場所で表現されると。

同じように、例えば人間の意識状態で死に、生まれたら、同じように人間の世界へと転生すると。例えば人間より進化した形の半神と呼ばれる半分神の生命体の意識状態で生まれたら、その世界へ転生するというような形の、これは無始の過去からそういうカテゴリーが存在しているわけですから、例えば、昔はそういう進化していない生命体しか存在していなくて、今は進化した生命体が存在するんだという考え方はおかしいというのが仏教的見解なんです。

（九二年六月十七日・東京大学）

◉記憶

（質問者）脳の海馬領域が破壊されると、その人間は、一瞬前のことでも忘れてしまう、覚えていられないという状態に陥るらしいのですが、人間の体が壊れていても、霊魂というか、精神は変わらないはずですから、記憶していられるはずだと思うのですが、それに対してどのようにお考えでしょうか。

（尊師）今の質問に対する答えとしては、オウム真理教で実験しているわけですけれども、脳波が停止したときに過去の記憶、あるいは過去世の記憶が思い出せるとするならば、それは、反証としては十分だと思うがどうでしょうか。

つまり、海馬領域が働いている、働いていないということを測るのは、結局脳波によって測定はできますよね、当然。

（質問者）そうですね、はい。

（尊師）だからそれが静止した状態で、もしわたしたちの記憶が存在しているとするならば、今の医学的アプローチに簡単に反証することができるんじゃないかと考えますがどうでしょうか？　つまり海馬領域だけではなく、他のいろいろな部分もいっさいが停止していると。

（尊師）ああ、そういうことになります。

（尊師）それについて、今実験を行なっていますので、そうですね、あと一年、あるいは二年ぐらいのうちには、データが出せるんじゃないかと思います。

（九二年六月六日・神奈川県薬業会館）

第3章「社会問題をどう見るか」より

◉社会問題

（質問者）世界には、環境問題や南北問題など、いろいろな社会問題がありますが、それを最小限に抑える技術はありながら、それが妨げられている理由は国同士の経済力、貨幣のあり方だと思うのですが、それについてはどう思いますか。

（尊師）それは、わたしの見解とは違う。わたしはこのよ

うに考えている。一人一人が心が未熟なるがゆえに、貪りが多いなるがゆえに、煩悩が多いなるがゆえに、つまり他人のことを考えないで、いろんなものをつくり出すと。あるいは、森林を伐採すると。それによって結局自分たちが最終的には被害を被っているというのがわたしの考え方です。

だから、いくら貨幣経済の流通が、あるいはドルとルーブルの格差がなくなるとか、円とルピーの格差がなくなるとかいう形になったとしても、本質は全く変わらないと思います。

（九二年六月七日・杉並道場）

●犯罪者

（質問者）最低の人と言っていいのかどうかわからないけれど、例えば幼女をどんどん殺すとか、強姦殺人なんかの凶悪犯なんかは、憎むべき存在でしょうか、哀れむべき存在でしょうか。

（尊師）わたしは哀れむべき存在だと思います。

その理由は、彼らの意識状態は、完全に殺人とか、あるいは強姦の衝動にさいなまれている意識状態ですから、例えばその意識状態を憎んだとしても解決できないと。それよりも、やはりそういう人たちの意識を早くしっかりと高い意識状態へ引き上げてあげる操作が必要であるというのが一つと、それからそのような意識状態を形成しているのは、いろいろな情報であるというのがわたしの見解ですから、その情報の中に埋もれさせられて、要するに染まりやすい意識状態の人に対して、それだけひどいデータを入れる方に問題があるのではないかなというのがわたしの見解です。

したがって、哀れむべき存在だと思います。

（九二年六月十七日・東京大学）

●脳死

（質問者）オウム真理教において、脳死というものはどういうものであるか、死の基準として科学的な観点ばかり論議されている中で、宗教的な観点でオウム真理教における脳死の見解、つまり死の基準を教えてください。

（尊師）まだ心臓が動いているということは死でない、というのがわたしたちの見解です。というのは、これは仏教、あるいはヨーガの見解からいくと、心臓にコーザル、つまりわたしたちの本質的な魂の根っこが存在していると。脳は、アストラル、つまりイメージ形成を中心としているものであるというふうに考えています。ですから、この肉体からアストラルの停止、つまり脳波の停止が起きたとしても、まだ心臓が動いている以上は、その人は死んでいないというのがオウム真理教の考え方です。

（質問者）ただ心臓の場合は、医者の技術によって無理やり動かすことが可能です。それがあって、脳死の判定が最近いわれ出してると思うんですが。

（尊師）脳波が停止した後、それでも心臓を機械で動かすことについてはオウム真理教では肯定します。なぜかというと、心臓が動いている間にできるだけデータを入れる意味において、心臓に対していろんなヴァイブレーションをかけるわけですね。例えば、マントラを流すとか――マントラというのは神々に対する祈りです。あるいは声のヴァイブレーションをかけるとか、いろいろなヴァイブレーションをかけるわけですが、それによってできるだけ振動数を神々の振動数に変えたいものですから、心臓の動いてる時期は長ければ長いほどいいというのがわたしたちの見解なんです。

しかし、心臓を無理やり動かしていても、結局本当に機械的な心臓の動きの場合、体の壊死があちこちで始まりますよね。つまり、あちらこちらの器官がどんどん死んでいくというか、炎症を起こして死んでいくと。それからもう一つ、壊死に伴っての腐敗臭が始まるんですね。この死臭が出、そしていろんな器官の壊死が始まった段階。その段階ではもう意味がないというふうに考えています。

（九二年六月十三日・京都教育文化センター）

●臓器移植1

（質問者）オウム真理教では、臓器移植についてどのようにお考えですか。

（尊師）それは、信徒が移植されるわけですか。それとも信徒の臓器を移植するわけですか。つまりどういうことかといいますと、教義というのは、あくまでも信徒に対してのものですよね。ですから、信徒が受け手なのか、あるいは与え手なのかによって違ってくるということですよね。

（質問者）両方の場合をお願いします。

（尊師）信徒がだれかに肝臓移植する場合、その信徒が与えたいと考えるならばそれは布施波羅蜜の実践ですから、つまり肉体を与えることそのものは仏教の布施の最高の教えとされていますから、問題ないと思います。

例えば、典型的な例としては、テーラヴァーダの国であるスリランカでは、多くの人がアイバンクに目の布施をしています。それと同じ考え方で、肉体を布施すること、これは大変価値のあることですから、それはそれで問題ないと思いますね。

それを受ける場合の問題点は、やはり修行が特に進んでいますと、エネルギーの問題等がありますから、その人の判断に委ねられることになるんじゃないでしょうか。

（九二年六月十三日・京都教育文化センター）

●臓器移植2

（質問者）最近話題になっている臓器移植について、オウム真理教では、臓器を移植された人にはどのようなことが起こるとお考えでしょうか。

（尊師）まず、心臓以外の臓器の移植と心臓の移植とでは、意味合いが違うというふうに考えます。

その前に言っておかなければならないことは、心臓にはコーザル、つまり、識別をする部分が宿っているというふうに一般的には考えるわけです。そして、脳死の状態で心臓が動いていて、その心臓を入れた場合にどうなるかというと、その識別の要素が変わると。つまり今までにない性癖、つまり性質的な癖というものが当然現われてきます。

これは、心臓移植した後にその人の性質が変わったという例はいくつも報告されていますよね、実際に。ですから、コーザルの部分の変化というのはやむを得ないと。しかし、その人が形成していた、アストラル――まあこれは大脳と関係があるわけですが――その部分と、あるいはこの現象界の肉体の部分は変わらないわけですから、外から見てもわからないと。しかし、その人の本質は変わり得ているというのが、心臓移植の場合の特徴であるというふうに考えます。

他の臓器については、それぞれのカルマの範囲内で若干の変化は起きるでしょうが、そう大した変化は起きないというふうに考えています。

ただ、事実こういう例があります。輸血をしたことによって、その輸血を受けた人の性格に、血を与えた提供者の性格が混じり合った例というのは、何例もわたしは聞いておりますので、受けた臓器の部分のカルマもある程度受ける、その典型的というか、その最も激しい例が心臓移植であると。心臓移植の場合は、コーザルのデータは入れ換わると考えていいんじゃないでしょうか。

（九二年六月二十一日・大阪阿倍野区民ホール）

●日本

（質問者）日本はそれなりの経済的な繁栄を今日もたらしてると思うんです。そのことに特別な意味があるのでしょうか。それとも、そんなものは全く意味がないことなのでしょうか。

（尊師）この今の日本の文明といわれるものは、世界のどこを歩いても、これだけの俗にいう綺麗な機械文明を形成しているところはありません。特に首都圏、東京、あるいはこの名古屋もそうでしょう。

しかし問題は、その背景にあるものについての良さは良さとして、それから欠点は欠点としての検討をする必要はあると。で、良さとは何かというと、これだけのものを短期間に形成した、要するに仏教的な言葉を使うならば不放逸、つまり努力し続ける姿勢、それからもう一つは知能の高さと、この二つは大変称賛しなければならないと思う。で、欠点とは何かというと、逆にそれにとらわれすぎているがために、心の本質を放棄してしまっている部分があるということ、これは当然反省材料として考えなきゃならないと思う。

では、この不放逸、つまり、努力し続ける姿勢、それからこの知能というものは、真理という点から考えた場合どのような利益があるのかというと、これは、要するに解脱、あるいは悟りに必要な第一の条件は何かといったら、不放逸、つまり、努力し続けることですから、そういう意味においては日本人というのは大変、解脱・悟りをしやすい民族であるということはいえると思いますね。

それから、もう一つは、これは言葉の定義ですけれど、この日本という国は、「日の本」と書きます。で、日というの皆さんもご存じのとおり太陽と。で、太陽の本、という意味であると。ところで、サキャ神賢（釈迦牟尼）のサキャという言葉には、太陽の末裔（まつえい）という意味があります。したがって、日本人そのものがお釈迦様のお生まれになったサキャ族の系譜の可能性があるんではないかなと。まあ、民族的にも似てますしね、大変。というのが今のわたしの見解です。

ですから、解脱・悟りといったような、高い精神性を有するための民族、選ばれた民族である可能性は、大変高いと思います。よろしいでしょうか。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

第4章「伝授！人生開拓法」より

●自分

（質問者）僕はいったい何者なのでしょうか。そして、それを僕が知る必要はあるのでしょうか。

（尊師）それを知ったら、ものすごく大きな利益だと思います。なぜかというと、あなたの今から死ぬまでの長い人生において、自分が何者であるかを理解したら、自分の努力をしなければならないことというものがはっきりわかってくるから、それは、しかもあなたの魂の本質とかかわることで、その本質に向かっての努力となるだろうから、それは大変大きな利益だと思います。

（九二年六月十四日・名古屋大学）

●生

（質問者）人間はなぜこの世に生まれて生きているのでしょうか。生まれながらにして罪をもって――今まで戦争など

による破壊といったいろんな罪を行なってきたんですけれど、なぜそういう人間が生まれ、生きているんでしょうか。

（尊師）人間が生まれてくる原因には、大きく分けて三つあります。

その第一は、煩悩によって生まれてくると。これは、輪廻転生のサイクルにおいて人間界へ転生する場合、一般的には父母の性的交わりの対象となる異性、例えば男性の場合は母親、女性の場合は父親に性的魅力を感じて、そこでその性的相手として自己を認識し、子宮へ飛び込むといわれています。これが一般の場合です。

それから、そうではなく、煩悩を滅尽しようということで人間の世界へ転生する魂がいます。これは小乗の修行者として転生する場合です。

それからもう一つは、大いなる救済を考えて生まれ変わってくる場合があります。これは、前生において阿羅漢の位に到達した魂が輪廻転生をするパターンです。この三つであると考えてください。

（九二年六月十三日・京都教育文化センター）

●人生

（質問者）人間は何のために生きているのでしょうか。

（尊師）人間の生きている目的は、二つのカテゴリーに分けることができます。その第一のカテゴリー、第一の分類は、瞬間瞬間の煩悩を満たすために流されていると。そして第二のタイプの魂は、すべての生き物たちを利する、つまりすべての生き物たちに利益を与えるために生きようと努めていると。そして中間的には、今この人間の生の苦しみというものを理解し、その苦しみから超越しようと思って生きている魂も存在します。ではなぜ、その中間の層をわたしが分類に入れなかったのかというと、結果的にこの中間の層の分類、つまり自分の苦しみを取り払いたいと考えて生きている魂は、最終的には第二のカテゴリーであり、すべての魂に利益を与えるために生きることになるからです。

少し専門的な話をするならば、自己の苦しみを超越する方法、これは仏教とかヨーガとかにいろいろあるわけですが、その実践を行ない到達した魂を阿羅漢、つまり供養に値する魂といいます。この、供養に値する魂が、いったんニルヴァーナという世界へ入ります。このニルヴァーナとは、すべての感覚器官が、そして心が静止した状態を指します。

しかし、この魂は自己の利益のために心を静止させていますから、より強い自己の利益の干渉があったとき、心は動き出します。より大きな自己の利益とは、例えば、お釈迦様のような世尊、バガヴァンといわれる魂からの光の導きや、あるいは、ボーディサットヴァと呼ばれる、もう阿羅漢に到達して輪廻転生を繰り返している魂の光の導きによって、その世界からいざなわれる形で生まれ変わり、そして衆生に対して真の幸福とは、煩悩を完全に超越することであるという法則を説くわけです。

ですから結果的には、二つのタイプ、いまだ真理に気づかず、煩悩を貪り続けている魂と、それからもう一つは、それを完全に超越している、そしてすべての魂の利益のために生きている魂と、この二つに分類することができます。

（九二年六月九日・仙台読売ホール）

●長生き

（質問者）長生きはすべきだとお考えですか。

（尊師）真理の実践ができるんだったら、長生きはすべきでしょう。しかし、もし真理の実践ができず、悪業を積み続けるのだったら、あまり長く生きても意味がないんじゃないかというのが、わたしの今の気持ちです。

（九二年六月五日・金沢支部）

●死

（質問者）人はいずれ必ず死んでしまいます。死ぬときには何も意識がないと思いますが、それじゃあ、何のために死ぬまで生きるのでしょうか。

（尊師）いや、死ぬ直前に、意識のある人もいるよ、実際問題として。

これは、わざわざ死の疑似体験を科学的に実験している大学もあるそうだが、それと同じように、瞑想体験によって「疑似死」というのを、必ず修行者はある段階に来たら経験します。そのときに、気絶をしているうちはそれは疑似死とはいわず、そこで意識が連続し、呼吸が停止して肉体から抜け出して、初めて成就の第一段階である化身の経験をするわけだけれども、そういう意味において、意識は死後も存在するというふうにわたしたちは考えています。

だから、死の直後に意識のなくならないような訓練をすることが生きている間の修行であるというふうに言い換えることができると思います。

（九二年六月四日・北海道大学）

●人間関係

（質問者）人間というものは、家族とか友人とかいろんな人間関係の中で支えてもらったり支えたりして生きていくものじゃないかと思ってきたし、わたし自身そうやって生きてきました。そうやって人に支えられたり、愛情を向けられることを期待して生きていると、相手を失うことをすごく恐れる気持ちとか、思いが伝わらないときの悲しみと

か、腹立たしさとかが心の中に起こってきて、すごくそういうのをわたしはしんどいと感じるんです。

そういうものを切り離してしまえたらどんなに楽だろうと思うこともあるんですが、オウム真理教の修行によってそういうとらわれを切り捨てて、その上で人間関係を保ちながら生きていくことはできるようになるんでしょうか。

（尊師）完全に切り捨てる道、これは出家修行の道です。それから逆に、あなたのおっしゃるとおり、支えて支えられる生き方、これを肯定する道、これが在家の道です。出家の道については、もう切り捨てればいいわけですから、それほど難しくはありません。ですから、在家の道について少し話しましょう。

在家の道の基本となるものは、まずとらわれるなと。そして、第二番目には、徳の高い者を称賛し、徳の高い者の教えに従いなさい、この二つを原則として説きます。

ではなぜ、この二つが原則となるのかというと、わたしたちは、人間界のしがらみによって、一人一人のしがらみによって、いい情報も悪い情報も入れることになるわけです。そして、例えば悪い情報を入れる友人がいて、自分の心が寂しいがゆえに、その友人にしがみついていたとしたならば、その魂は、その悪い情報なるがゆえに落下のプロセスを歩くことになります。

しかし、もし徳の高い、そして智慧のある在家の魂とつきあうならば、その在家の魂から多くの教えを受け、利益を受け、そして成長することができます。したがって、徳のある魂に近づきなさい、徳のない魂に近づくべきではないという教えは、そこから来ているわけです。

そして、とらわれるなというのは、結局、わたしたちがこの人生を生きているのは、修行としてとらえるならばそれは大変価値のあることであると。例えば自分が今までいろいろな善行をなしたとして、その善行の果報ではなく、逆に悪口を言われたりいじめられたりすることもあると。しかしそのときに、もしそういうものにとらわれなければ、悪業が減少し、つまり減り、そして自分のなした善業だけが増大していくと。したがって、在家においてとらわれず、そして徳の高い魂に対してのみ心を向け、そういう魂との人間関係をつくり上げていくならば、それは在家もまた素晴らしい道だと思います。

（九二年六月二十一日・大阪阿倍野区民ホール）

●絶対的善

（質問者）自分の中に絶対的善を求める心があって、様々な宗教書や哲学書を読んでみました。そこでお伺いしたいのですが、絶対的善というものはあるのでしょうか。それがあるとするならば何を基準としているのでしょうか。また、絶対的善があるとしたならば、なぜ哲学者たちが様々な異なった思想というものを展開し対立し合っているのか、その原因を教えていただきたいのですが。

（尊師）絶対的善というものは存在します。その絶対的善の背景にあるものは何かというと、それは真理の法則にかなったもの、これは絶対的善であるということができます。

では、なぜそういうことができるのかというと、真理の法則にかなった言葉・行為・心の働きは、わたしたちの心を豊かにし、そして高い世界へといざなうからです。ではなぜいざなうといえるのかというと、それは、例えば北伝の典型的な修行プロセスの中に六つの極限というのがあります。この六つの極限の中に、サマディ・智慧という最後の二つのステップがあるわけですが、そのサマディにおいて自分自身のなしている内側の要素というものをしっかりと認識する修行法があるわけです。つまり何を言いたいのかというと、自分の実践している教えが絶対的善であるかどうかを確認する、主観的に確認するただ一つの道、それがサマディであると。そして、そのサマディによって自分自身のなしてきた行為・言葉・心の働きをチェックしながら修行を進めること、これを、北伝では在家の修行の中に入れたわけです。

では、南伝ではどうしたのかというと、より早くサマディに到達した偉大なる仏弟子たちが、その法則の中で、この法則さえ在家のものが実践すれば、必ず幸福になれると、そして、それは絶対的な善の道を歩くことになるという教えを展開しました。したがってこの場合は、その仏弟子たちは神と等しいもの、つまり自己の絶対的価値の基本となるものとして大変な尊崇を受けたわけです。

疑い深い民族である日本人にとっては、この北伝的生き方、つまり、日々修行しながら自分自身のなしていることが正しいのかどうかを実際にサマディによって経験し、そしてフィードバックするという生き方の方が、わかりやすいかもしれません。

ところで、これらの絶対的善に対して、なぜいろいろな哲学的考え方がはびこるのかということについて次は考えなければなりません。もともと哲学というのは、「愛智」つまり智慧を愛するという言葉から来ています。この、フィロソフィーという言葉は、個々の心の成熟の段階によって全く違った結果を招くこととなるわけです。例えばわかりやすい例を挙げましょう。あるスピード狂の魂がここにいたとして、その魂はゆったりしたセダンの車と、それからスポーツカーとどちらを選ぶかというと、乗り心地が悪くとも、スピードの出るスポーツカーを車としては最高であると考えるでしょう。ところが、車というものはゆったりとくつろぐために乗るものであると考える魂は、セダンの

できるだけ大きい車に乗るはずです。つまり、単純に車という一つの課題についても、このようによしとする判定基準は、変わってくるわけです。

それ以上に多くのわき道を有する、多くの迷路のような〝意識〟に対して、最終地点に到達していない魂が自己の論を張るとするならば、それは多くの答えが出て当然だと思います。どうでしょうか。

（九二年六月二十一日・大阪阿倍野区民ホール）

◉高い世界へ至る欲求

（質問者）自分のより高い状態が欲しいって気持ちが本当に強いんですが、これはすごく大きな煩悩じゃないかなっていう気が、今しています。で、その煩悩は煩悩として認めてやって、その上で、なおかつより高い状態を求めていく自分自身の今のあり方は、安心できない状態のような気がしてしまうんです。それについて、お答えいただきたいのですが。

（尊師）これは、同じことをサキャ神賢の高弟であるアーナンダに対して、同じ時代の祭司が質問しています。同じ比喩によって答えることが最もわかりやすいでしょうから、その比喩を使わせてもらいます。

例えば、あなたが行きたいところがアメリカであるとしましょう。「アメリカに行きたい、行きたい」とあなたは強く欲求している。そしてあなたは実際にアメリカに飛行機を使って行ってしまったとしましょう。この飛行機を使って行ってしまったときに、その欲求が生じ続けるだろうかと。つまり欲求には、飽くなき欲求と、それから目的へ至らせるための欲求の二つがあります。

何を言いたいのかというと、あなたが高い世界へ至ろうとする欲求は、あなたを高い世界へ導くと。しかし、その高い世界に終わりがある以上、つまり最終地点がある以上、その高い地点、高い世界へ至ったとき、最終地点へ至ったとき、あなたの欲求はそこで完全に止滅してしまう。

ですから、その強い欲求は持つべきであり、そしてそれこそが、逆に高い世界へ至るための、ただ一つのエネルギーであるというふうに考えるべきです。

（九二年六月七日・杉並道場）

◉殺生

（質問者）生き物を殺すのはかわいそうだから肉食を断つという考え方がありますね。ということは、それを突き詰めていくと、人間というのは死んでしまった方がいいんじゃないでしょうか。

（尊師）死んだとしても、その要素がある以上、また生まれ変わります。つまり死んでも意味がないんです。先程わたしは、カルマの原因と返りについて、それがよりはっきりと、早くわかればわかるほど、それについての対応をするようになるという話をしましたよね。それが真理の実践ですよと。例えば、ヨーグルトを食べるとか、あるいは酵母菌を使ったパンの食事をすることによって、即ケガをし出す魂もいるんですね。それをやめた段階で、スパッとなくなると。ということはヨーグルトや、あるいはパンの酵母菌なども、それを殺すならば殺生になるという見解が成立すると。

ところが、それを知らない、つまりそれが蓄積されても平気な魂が一般的なんです。その場合はそれをやっても構わない。

（質問者）やってはいけないという見地に立っている人の場合は、それを突き詰めることは現実問題不可能なんじゃないんですか。

（尊師）いや、それを突き詰めます。ちゃんと突き詰めても生きていけるんですよ。ですから、決して死なないようにしてください。死んだとしても、生まれ変わって同じ苦しみを味わいますから。

（九二年六月十三日・京都教育文化センター）

◉思い出

（質問者）〝思い出〟というものを生かして、その美しい過去の思い出に執着することがいいことかというテーマの小説がたくさんあるのですが、思い出に執着することは、本当にいいことなんでしょうか。

（尊師）いや、それは不利益であるということがいえると思います。ではなぜ、思い出に執着することは、不利益なんでしょうか。

例えば、わたしたちは生きています。そして瞬間瞬間にわたしたちのなしていること、例えば言葉や行動やあるいは心の働きというものは、コーザルのデータに蓄積されます。そして、思い出というのは過去の産物ですから、その過去の産物に対して心がとらわれているとき、その状態のとき心は完全に無智の状態を形成し、その無智の記憶修習を繰り返すことになります。そして心が無智の記憶修習をしているとき、当然言葉も同じように無智な言葉を吐き、行動も同じように愚鈍になると。

したがって、わたしたちは生きているわけですから、この生きていることを最大限に利用し次の利益のあるステップを踏みたいと、そう考えるならば過去の思い出をいっさい捨断し、そして、今できるベストの生き方をする、これこそが最高の生き方だと思います。

（九二年六月二十一日・大阪阿倍野区民ホール）

●性欲

（質問者）尊師は人間の性欲というものに関してどのようにお考えなのでしょうか。少し詳しく教えていただきたいのですが。

（尊師）結論からいうと、動物の発情と雄性行動というパターン――これは生物学を学んでいたら理解できると思いますが――と全く変わらないと、わたしは自己の経験だけではなく、いろいろな現象を見て感じています。

それはどういうことかというと、まず女性の側からの発情が生じると。そしてそれに対して男性は、無意識の意識というよりも、正確にいうと超潜在意識によって男性的行動に出ると。そしてそこで恋愛が成立して性欲が発生するということが一般的なパターンであると。

ところが、現代の性欲はその状態からかなり屈折していて、視覚的・聴覚的に、かなり記憶修習をしていると。それは、例えばマンガ、あるいはアニメーション、あるいはポルノビデオ等で、絶えずそこでの喜びを視覚的に見たり聴覚的に聞いたりすることによる記憶修習をしていると。それによって、例えば女性型の発情がなくても、男性の方は雄性行動に出てしまうというパターンが存在するようになってきている。つまり、哀れな時代であるというのがわたしの印象です。

（九二年六月十七日・東京大学）

●カルマの解放

（質問者）最近しょっちゅう悪口を言われることがあるのですが、それはカルマが返ってきているのだということはわかります。ただ、このままでカルマが落ちて二度と悪口を言われない状態にはなれるんでしょうか。

（尊師）それについては、悪口を言われたときに、「わたしの過去になした悪口のカルマ、あるいは人に対して、嫉悪した心の働きが現象化している、つまり、現われてきてるんだ」というふうに考えて、そして「ああカルマが落ちてほんとにうれしいな」という心が持ち続けられたら、そんなに長い時間かからなくて、悪口を言われなくなります。そのときには、悪口のカルマは落ち切ったんだというふうに考えていいと思います。だから、しっかり頑張ってくださいね。

（九二年六月九日・仙台研究ホール）

第5章「病は癒える」より

●エイズ

（質問者）オウム真理教附属医院では、エイズなどの病気をなくす自信はありますか。例えばエイズになった人が宗教的に心が救われるということも大事なんですが、それ以上にエイズという病気自体を治すことはできますか。

（尊師）エイズについては、これは特殊な病院を造らなければならないわけですから、今のところ、そこまでの準備がなされていないというのはあります。しかし、当然信徒さんも多くいらっしゃるので、その中でエイズに感染していらっしゃり、オウム真理教の修行を行なうことによって、肉体的あるいは精神的な問題を解決しつつある人は、若干名います。

この若干名いるという表現は何かというと、要するにあまりにもクランケの数が少ないがゆえに、今そういう表現しかできないと。でもそれは、未来において確実にエイズそのものを撲滅するのはそれほど難しくないんではないかなというのが、わたしたちの今の考え方です。

今の話をね、少し詳しく述べるならば、例えばエイズ感染の予防として、オウム真理教が行なっているのは、エイズウイルスというのはだいたい五十度の温度、約三十分ぐらいで完全にウイルスそのものは死滅しますから、それより高い体温の状態を形成するとか、そういうことが可能なのかどうかの実験をし出しているというかな、まあそういうふうにとらえていただいたら結構だと思います。

（九二年六月十七日・東京大学）

●リューマチ

（質問者）わたしは十七年前にリューマチになりまして、薬を飲み過ぎたせいか肝硬変になりまして、現在、橋本病で病気ばっかりなんですね。で、今歯の治療をしておりまして、歯の麻酔を打ちましたら、右の頭、後頭部全部痺れて麻痺したような状態と、それから左の方の歯の治療をしましたら、左のほっぺたの方が全部麻痺しておりまして、リューマチの方は左半分がほとんど動かないような状態で、足も痛いんです。むくんでおりますし、たいへん痛いんです。治るでしょうか。

（尊師）これは難しいですね。かなり時間はかかると思いますね。例えば一年とか二年とかね。まず、症状の軽減からですね、長い時間をかけてゆっくり治療なさるといいと思うんですよ。で、その方法としては、今の話をお聞きしていますと、粘液とそれから胆汁の異常と。で、エレメントとしては風と、それから火元素のね、異常が背景となっていますから、そこのところをね、きちんと浄化なさると変わってくると思います。しかし大変難しいですね、これはね。これも具体的な方法につきましてはね、あとで弟子の方から指導があると思いますので受けてください。

（八九年四月十四日・世田谷道場）

●白内障

（質問者）今年で九十歳になります。白内障に高血圧、そ

れから耳の聞こえが非常に落ちてきて、足も痛いのですが、治るでしょうか。

（尊師）まず言えることは、原因として考えられることはね、それは完全に粘液体質が背景になっているということです。しかも三焦といいまして——三焦とは何かというと、この、胸から上、これを上焦といいます。そして、おなかから胸までを中焦といいます。そして、おなかから下を下焦というわけですけれども、その三焦の中の上焦の病であると。だから、それはきちんとした原則をもとにね、修行なされば一つずつ病は解決していくと思います。

　で、順番としては、まず血圧の正常な状態から入るでしょうね。それから次に、耳の聞こえが良くなってくると。そして、三番目に足の痛みですか、それが取れてくると。そして、最後に目の病が癒えてくると。そのような順番で治っていくと思います。（八九年四月十四日・世田谷道場）

●弱視

（質問者）視力がすごく弱いんですけれども、〇・〇三くらいしかないんですね。で、やっぱりコンタクトを入れるとか眼鏡をかけていないと見えないんで、裸眼では見えないのはすごく不便だし困っています。

（尊師）それについてはね、ネーティ、ひものネーティ、それから普通のぬるま湯のネーティね、これはきちんとした操作にのっとって、例えば一〇リッターとか二〇リッターとか、あるいは三〇リッターとかね、毎日おやりになれば、かなり改善されると思います。

（質問者）原因は何だと考えられるんでしょうか。

（尊師）二つあると思いますね。一つは、心の問題でいくとね、ストレスと。それからもう一つは、無智といったらいいのかな、それが原因であると。それから食べ物においては、やはり粘液体質になりやすい食べ物を取っているということですね。だから分泌、あるいは上焦周辺の粘液の量をね、減らすことによってそれは取り除くことができるんじゃないかと思いますね。現に、それで効果を発揮している人もいますからね。（八九年四月十四日・世田谷道場）

●アレルギー

（質問者）姉がアレルギー性の皮膚炎等のアレルギー性の病気を持っているのですが、そういうものを治すにはどうしたらよいでしょうか。

（尊師）肉体的原因によって生じているアレルギー性の問題であれば、それは浄化法といわれている修行法があります。で、それがもし心の問題であるとするならば、それは一種のポア、つまり意識を移し変える訓練をすることによって消すことができます。

　で、浄化法については、なぜそれを行なうのかというと、インド・ヨーガの考え方としては、胆汁、粘液、それから風の三つのバランスによってわたしたちは病にかかるというふうに考えているわけです。ですから、胆汁・粘液、それから風というのは肉体を通過しているエネルギーのことですが、この三つのコントロールをすることによって、アレルギー性の疾患は治るということはいえるでしょう。

　で、アレルギー性疾患は、その三つの胆汁・粘液・風のどれに属すのかというと、一般的には風の作用が弱まったときの状態であるということができますから、その風の状態を強めるような肉体を浄化する修行法を行なえばいいと思います。

　具体的には、後で師の方からの指導を受けてください。（九二年六月十四日・名古屋大学）